

# 二都物語

上巻

チャールズ・ディッケンズ

青空文庫



## 序

「二都物語」はチャールズ・ディッケンズ（一八一三—一八七〇）の一八五九年の作である。すなわちこの巨匠が数え年四十八歳の時の作である。作者は一八三六年に諧謔小説「ピックウイク俱楽部」によつて一躍ウォルター・スコット以後のイギリス随一の流行作家となり、以来「オリヴィア・トウェイнст」、「ニコラス・ニッカルビー」、「骨董店」、「バーナビー・ラッジ」、「マーティン・チャッズルウイット」、「ドムビー父子」、「デーヴィッド・コツパフイルド」、「物淋しい家」、「小さなド

リット」等の諸大作その他の作品を発表して、既に、当時全ヨーロッパにおける最も高名な小説家の一人であり、その名声のみならず文学的手腕においても彼の高潮に達していたのであつた。

「二都物語」の作者自身の緒言に記されているように、彼がこの作の主要な観念を思い付いたのは彼の年少の友人ウイルキー・コリンズの劇を演じていた時であつて、それは一八五七年の夏のことであつた。しかし、その思付きはただごく漠然たるものであり、当時は家庭的不和のためにはなはだしく心を苦しめられていて、ただちにそれの具体化に著手することが出来なかつたが、やがて、フランス革命を背景としてその観念を中心の一の物語を創作することとし、慎重綿密にその考案、準備、構想を進めたらしい。翌

五八年の一月末には、彼の親友であり後に彼の伝記作者となつたジョン・フォースターに宛てた書簡の中で、「いつかは」というその物語の標題を報じており、更に同年三月には「生埋め」、「黄金の糸」、「ボーヴエーの医師」という標題を挙げている。

また、書かれた正確な年月は不明であるが、一八五五年から書き始めた彼の覚書帳メモランダムの中には、この作について、「二つの時期」—フランスの劇のように間に時の推移のある——にわたる物語については如何？ そういう思付きのための標題。時！ 森の木の葉。散らばつた木の葉。偉大な車輪。 り つて。古い木の葉。ずっと以前に。遠く離れて。落葉。二十五年。何年も何年も。過ぎ去る歳月。毎日毎日。伐り倒された樹。記憶のカートン。やく

ざ者。二つの世代。」とあり、他に、この作の主要人物である獅子の豺やまいぬとしてのカートンと、同じく作中人物のクランチャード夫妻とについての萌芽的な思付きが記されている。しかし、五八年の五月にはディックケンズは妻のキャサリンと遂に合意の別居をすることとなり、また同年から彼の自作朗読会を始めたので、その年もその制作に没頭することが出来ず、翌五九年の三月に至つてようやく「二都物語」と現在の標題が決定され、「ハウスホールド・ワーヴ誌」に代つて創刊された同じく彼自身の主宰する週刊雑誌「オール・ジ・イア・ラウンド誌」上に、その第一号すなわち四月三十日号から同年の十一月二十六日号までにわたつて連載されたのである。かつ、同年六月から十二月までにわたつてチャット

マン・アンド・ホール社から作者の他の諸長篇と同様に月刊分冊で逐次出版され、ただちに巨万の読者に迎えられた。これは八分冊に分れ、各分冊に「ピックウイク俱楽部」の挿画以来フィズの名で知られたハブロット・ブラウンの挿画が二葉ずつ入り、第六分冊までは定価各一シリング、最後の第七第八分冊は合本二シリングであつて、その最後の分冊にタイトルページ標題紙や目次などと共に緒言が附せられた。制作の前及びその間に作者が異常な苦心を重ね努力を払い時日を費したことは彼の手記や書簡などによつて窺い知られる。

本篇の手法に関する意図について、作者は制作中の書簡にこう書いている。「私は、眞実に迫つた人物、しかし彼等が対話によ

つて自分自身を現すよりも以上に物語そのものが現すべき人物がいて、各章ごとに興味の加わる、画のように叙述した一つの物語を作るこの小さな仕事に専心している。他の言葉で言えば、（中略）人物を出来事それ自身の臼の中で搗き碎き、その人物から彼等の興味を打ち出して、出来事の物語を書くことが出来ると思つたのである。」

フランス革命に取材したことについては、作者が年来絶えず繰返して読み、決して厭うことのなかつた、トマス・カーライルの名著「フランス革命史」に負うところが極めて多かつた。この物語の文体、思想等についても、カーライルの影響を示しているところが見られる。なお、作者が制作の準備中に知人であるカー

ライルに自分の目的に役立ちそうな数冊の参考書の借用を請うたところ、カーライルはただちに荷車二台に満載したフランス革命に関する文献をデイツケンズの邸宅に送り届けたという。

「二都物語」は「バーナビー・ラッジ」に次ぐデイツケンズの第二の歴史小説であり、また彼の最後の歴史小説である。歴史小説と言つても、時代を過去に採り、背景を歴史的事件に求めただけであつて、登場する人物はことごとく非歴史的人物であり、作者自身の純然たる創造になる人物のみである。本篇の主人公である、自己犠牲的な深い愛によつて進んで断頭台の下に立つ弁護士シドニー・カートンは、疑いもなく近代小説の群像中でも最も魅力ある性格の一であるに違いない。その他、その正義感のために暴虐

な貴族の手によつてバステイユ牢獄に投獄され、十八年間監禁されていた医師アレクサーンドル・マネット、その娘リューシー・マネット、フランスの貴族の地位と財産とを自ら抛棄してイギリスで自活するシャルル・エヴレモンド、その叔父サン・テヴレモンド侯爵、パリーの酒店の主人であり革命党員であるエルネスト・ドファルジユ、その妻テレーズ・ドファルジユ、銀行員ジャーヴィス・ロリー、弁護士ストライヴァー、走使いクランチャード・家政婦プロス等の諸人物は、いずれも、円熟した大作家にふさわしい手腕で鮮かに創造されている。そして、これらの人物が、フランス大革命の前及びその間の時代を背景とし、イギリス及びフランスの両国、主としてロンドンとパリーとの二都を舞台として

演ずる劇的な物語は、実に津々たる興味にみちているのである。ある意味ではまさしく歴史小説であるよりも以上に伝奇小説であるかもしれない。

また、この作はディツケンズの全作中において特異な地位を占めるものである。「ピックワイク俱楽部」以下彼の諸長篇の大部分にあつては、殊に前半期の多くの作にあつては、筋はあまり顧慮ないしは重視されず、誇張して言えば全篇が挿話の連續であり、豊かな興味は主として作中諸人物の滑稽感<sup>ヒューマーベース</sup>や哀感<sup>プロット</sup>に集中しているのが普通であるに対して、本篇では、筋は完全に首尾一貫し、全体の構成がはなはだ緊密であり、作中諸人物はことごとく物語の進展に関与し、物語は巧みな戯曲的展開をもつて章を逐うて最

後の不可避的な結末に至る。すなわち、その人物以上に事件の進展に読者の感興が惹かれる。他の諸大作よりも量において小であり、人物の数も比較的に少く、全体的に極めて圧縮されていることもまた、この作の顯著な一特質である。

外面向的にはデイツケンズの最大の特徴である諧謔<sup>(ヒューマー)</sup>は、本篇

にあつては題材の性質上著しく抑制されている。しかしそれは全然影を潜めているのではなく、この作の处处に現れて微妙な効果を収めていることは、細心な読者には容易に認め得るところである。

その異常な題材、印象的な人物、劇的な事件、巧緻な手法、等、等によつて、この物語はあらゆる読者を深く愉しませるのみなら

ず、また、終りの方に表現されているその主要観念は、愛や人生そのものについて考えさせるもののも含んでいる。

従来の批評家がディツケンズの他のいかなる作よりもこの作に對する評価について意見を異にし、ある評家は 譜ヒューマーに乏しい

この物語をさほど高く評価せず、また他の評家はこれをこの作家の最も完璧な傑作と激賞し、作者自身もその完成の少し前に本篇を「自分のこれまでに書いた最上の物語」として期待したが、作家が最近の労作を自己の最上の作と考えやすい傾向などを考慮に入れても、要するに、この「二都物語」が、ディツケンズの代表作とは遠いものであるにせよ、単に彼の力作たるに止まらず、少くとも「デーヴィッド・コッパフイールド」その他と共にこの

民衆の作家、小説文学の巨匠の最高傑作の一であり、かつ世界の文学における傑れた一名作であることは、何等の疑いもあり得ない。

物語は全三巻から成る。第一巻は、一七七五年の秋から冬へかけての数日間のことを取り扱い、この物語全曲に対する短い静かな序曲に過ぎない。第二巻は、一七八〇年の三月からフランス革命勃発の三年後すなわち一七九二年の八月に至るまでの十二年間余にわたり、最も変化に富む展開部に当る。第三巻は、一七九二年秋から翌九三年暮までの一年数箇月間、革命の真最中のことであり、荒れ狂う終曲であると共に、全曲の最高潮である。

第三巻中の医師マネットの手記によつて物語の発端は遠く一七

五七年まで遡り、更に第三巻の結末にはシドニー・カートンのそれから数十年後の予想が記され、時代はフランス革命の前後數十年間にわたつているが、この作の姿なき主人公はフランス革命であるとも言い得る。この物語によつて読者は絵画的に具象化されたかの革命とその時代とについて歴史書以外の知識と感銘とを得るであろう。その意味で、この小説は、人類の歴史が過去に有した最大の動乱の時代の一であるフランス革命の時代に興味と関心とを有する人々にも読まれるに価するものである。

訳者の他のすべての翻訳におけると同様に、訳文中に傍点を附してある箇處は、原文においてだいたい強調の意味をもつて斜体イタリック活字で印刷されている箇處であり、訳文中圈点を附してある語は、

同じく原文に強調の意味をもつて頭文字のみで記されている語である。ダッシュ、句読点、その他については、絶えず数種の底本を対照して適當と考えるところに拠る。

星標★を附した箇處の語句には巻末に註を附して、主として作品の細部または細部の語句をも正確に理解するに必要なことを記したが、各読者が単にその必要に応じて参考さるべきである。

同じく巻末に附した解説は、もし読まれるならば、原作の後に読まれることを希望したい。

一九三六年八月

佐々木直次郎

## 緒言

私が自分の子供たちや友人たちと共にウイルキー・コリンズ氏の劇の「凍れる海」を演じていた時に、私は初めてこの物語の主要な観念を思い付いたのである★。その観念を自分自身で具体化してみたいという強い欲望が、その時私に起つた。それで私は自分の空想の裡<sup>うち</sup>で特別の注意と感興とをもつてそれを追究したが、空想裡ではそれは燐眼な観客に対しての上演を必要ならしめたのであつた。

その観念が私の心に親しくなつて来るにつれて、それは次第次

第にそれの現在の形体になつて來た。その制作の間を通じて、それは私を完全に捉えていた。私は、これらの頁の中になされかつ感じられているところのことを、自分ですべて確かになしかつ感じたくらいにまで、それらを実感したのである★。

かの大革命の前ないしはその間におけるフランスの人民の状態についてここに何等かの言及（いかにわずかなものであろうとも）がなされている時にはいつでも、それは、真に、最も信頼するに足る証拠に基いてなされているのである。カーライル氏の驚歎すべき書物★の哲学に何かを附け加えるということは何人にも望むことが出来ないけれども、あの怖しい時代について的一般の絵画的な理解の手段に何ものかを附け加えたいというのは私の希望の

一つであつたのである。

一月。

ロンドン、タヴィストック館★にて、

一八五九年十



第一卷  
よみがえ  
甦る

## 第一章 時代

それはすべての時世の中で最もよい時世でもあれば、すべての時世の中で最も悪い時世でもあつた。叡智の時代でもあれば、痴愚の時代でもあつた。信仰の時期でもあれば、懷疑の時期でもあつた。光明の時節でもあれば、暗黒の時節でもあつた。希望の春でもあれば、絶望の冬でもあつた。人々の前にはあらゆるものがあるのでもあれば、人々の前には何一つないのであつた。人々は皆真直に天国へ行きつつあるのでもあれば、人々は皆真直にその反対の道を行きつつあるのでもあつた。――要するに、その時

代は、当時の最も口やかましい権威者たちのある者が、善かれ悪しかれ最大級の比較法でのみ解さるべき時代であると主張したほど、現代と似ていたのであつた。

イギリスの玉座には、大きな顎をした国王と不器量な顔をした王妃とがいた。フランスの玉座には、大きな顎をした国王と美しい顔をした王妃とがいた★。どちらの国でも、現世の利得を保持している国家の貴族たちには、天下の形勢が永久に安定しているということは水晶よりも明かなのであつた。

それはキリスト紀元一千七百七十五年のことであった。その恵まれた時代には、現代と同様に、さまざまの心靈的な啓示がイギリスに授けられた★。サウスコット夫人★は彼女の第二十五回の

祝福された誕生日を迎えたばかりであつたが、近衛騎兵聯隊の予言者の一兵卒が、ロンドンとウエストミンスター★とを呑み込む手筈が出来ていると言ひ触らして、彼女の莊厳な出現を先触れしていた。例の雄鶏コック・レーン小路の幽靈★でさえ、あの昨年の精靈も（不可思議にも独創力に欠けていて）御託宣メツセジをやはりこつこつと叩いて知らせたように、自分の御託宣メツセジをこつこつと叩いて知らせた後に、鎮められてから、ちょうど十二年たつたに過ぎなかつた。それとは違つて俗世界の出来事であるが、ただの音信メツセジが、つい先頃、アメリカにおける英國臣民の会議から、イギリスの国王ながらびに人民宛にやつて來た★。不思議なことには、この音信メツセジの方が、これまで雄鶏コック・レーン小路のどの雛から受け取つたどんな通信より

も、人類にとつてもつと重要なものであるということが、後にわかつたのである★。

心靈的な事柄では概して楯と三叉戟との姉妹国★ほどに恵まれていなかつたフランスは、紙幣を造つてはそれを使い果して、素晴しい勢で下り坂を転げ落ちていた★。その他<sup>ほか</sup>、キリスト教の牧師たちの指導の下に、フランスは、一人の青年がおよそ五六十ヤードばかり離れた視界の内を通り過ぎる修道僧たちの穢らしい行列に敬意を表するために雨中に跪かなかつたからといつて、その青年の両手を切り取り、舌を釘抜<sup>くぎぬき</sup>で引き抜き、体を生きながら焼くように、宣告したりするような慈悲深い仕事をして楽しんでいた。その受難者が死刑に処せられた時に、フランスやノルウ

エーの森林には、歴史上にも怖しい、囊と刃物との附いているある動かし得る枠細工★を作るために、伐り倒されて板に挽かれるようになると、運命という樵夫(きこり)が既(しるし)に印をつけておいた樹木が、生い繁っていたのであろう。また、その日には、死という農夫(か)の大革命の時の自分の死刑囚護送馬車にするために既に取除けておいた粗末な荷車が、パリー近隣のねとねとした土地を耕している百姓たちのむさくるしい納屋の中に、田野の泥にまみれ、豚に喰(く)ぎされ禽(とり)どもに塘(とや)にされて、雨露を防いでいたのであろう。しかし、その樵夫(きこり)とその農夫とは、絶えず働いてはいるけれども、黙々として働いているのである。それで、彼等(あしおと)が跔音(あしおと)を忍ばせながら歩きつっているのを、誰一人として聞きつけはしなかつた。

彼等が目を覚しているのではなかろうかと疑いを抱くだけでも、無神論者で叛逆者になるというのであつたから、それはなおさらのことであつたのだ。

イギリスでは、大層な国民的の自慢ももつともだというだけの秩序や保安は、すこぶる怪しいものだつた。武器を携えた連中の大胆不敵な押込強盗や、大道強奪は、首都でさえ毎晩のように行われた。市内の家庭へは、家具を家具商の倉庫に移して安全にしてからでなければ市外へ出てはならぬと、公然とお達しがあつた。夜の追剥<sup>おいはぎ</sup>は昼間<sup>ひるま</sup>は本市<sup>シティ</sup>★で商売をしている男であつた。そして、「首領<sup>キャプテン</sup>★」の資格で止めと命じた自分の仲間の商人に正体を見破られると詰<sup>なじ</sup>られると、勇ましくその男の頭を射貫<sup>いぬ</sup>いて馬を

飛ばして逃げ去つた。駅逓馬車★が七人の剽盜に待伏せされ、車掌がその中の三人を射殺したが、「弾薬が欠乏したために」自分も残りの四人に射殺された。その後で駅逓馬車の客は無事安穩に掠奪された。あの素晴らしい勢力家のロンドン市長も、ターナム・グリーン★で一人だけの追剥に立ち止つて所持品を渡せとやられたものだつた。追剥はその著名な人物を彼の隨行員一同の目前で剥奪したのであつた。ロンドンの監獄の囚人が獄吏と戦闘をし、弾丸を籠めた喇叭銃★が尊厳なる法律によつて囚人たちの中へ撃ち込まれたことがあつた。盜賊どもが宮廷の引見式で貴族たちの頸から金剛石の十字架を切り喰んだこともあつた。銃兵たちが密輸品を捜索するためにセント・ジャイルジズ★へ入つて

行くと、暴民が銃兵に発砲し、銃兵が暴民に発砲したこともあつた。が、誰一人としてこれらの出来事のどれ一つをも大して変つたこととは考えなかつたのである。こうした出来事の最中に、いつも多忙でいつも無益であるよりも有害な絞刑吏は、のべつに用があつた。時には、ずらりと並んだいろいろな罪人を片つ端から絞殺したり、時には、火曜日に捕えられた強盗を土曜日に絞首にしたり、時には、ニューゲート★で十二人ずつ手に烙印を押したり、また時には、ウェストミンスター会館★の入口のところで小冊子を焼き棄てたりした。今日は、兇惡な殺人者の命を取るかと思うと、明日は、百姓の<sup>あす</sup><sub>せがれ</sub>命<sup>いのち</sup>を取つたりした。

こういうすべての事柄や、これに類した数多の事柄が、その親愛なる一千七百七十五年とそのすぐ前後に起っていたのであつた。例の樵夫きこりと農夫のうぶとが誰にも気づかれずに働いていた間、そういう事柄に取巻かれながら、大きな顎をしたあの二人と、不器量な顔と美しい顔をしたあのもう二人とは、すこぶる堂々と歩み、彼等の神授の王権を傲然と携えて行つた。こういう風にして、一千七百七十五年は、その王者たちや、無数の微賤な人々——この物語に出て来る人々をもその中に含めて——を導いて、彼等の前に横わる道を進ませたのである。

## 第二章 駅遁馬車

十一月も晩おそくのある金曜日の夜、この物語と交渉のある人物の中の最初の人の前に横わっていたのは、ドーヴァー街道であつた。そのドーヴァー街道は、その人の前にと同じく、シユーターズビル丘★をがたがたと登つてゆくドーヴァー通りの駅遁馬車の先に横わつてゐるのであつた。その人は駅遁馬車の脇に沿うて泥濘の中を阪路を歩いて登つていたのであるが、他の乗客たちもやはりそうしていた。それは、何も彼等がこういう場合に少しでも歩行運動に趣味を持っていたからではなく、その丘も、馬具も、泥ぬかるみ濘ぬかるみも、

馬車も、みんなひどく厄介なものだつたので、馬どもはそれまでにもう三度も立ち停つたし、おまけに一度などは、ブラツクヒース★へ馬車を曳き戻そうという反抗的な意思をもつて、街道を横切つて馬車を牽き曲げたからなのである。しかし、手綱と鞭と馭者と車掌とが、一緒になつて、放置しておけば、動物の中には理性を賦与されているものもいるという議論に非常に都合のよくなれる目論もくろみを、禁止するところのあの軍律を、読み聞かせた★のだ。それで、馬どもも降参して、彼等の任務をまたやり出したのだつた。

彼等は、頭をうなだれ尾を震わせながら、折々は、四肢の附根つけね  
のところで潰れはしないかと思われるくらいに、足搔あがいたり躡づまい

たりして、どろどろの泥の中を進んで行つた。馭者が、油断なく「どうどう！　はい、どうどう！」と言いながら、彼等を立ち止らせて休ませるたびに、左側の先導馬は、いかにも並外れて勢のある馬らしく——頭や頭に附いているすべてのものを激しく振り動かし、こんな丘へこんな馬車を曳き上げるなんてことが出来るものかと言つてはいるようだつた。その馬がそういう音を立てるたびごとに、例の旅客は、神経質な旅客ならするように、びくつとして、心がどきどきするのであつた。

谷間という谷間には濛もうもう々たる霧がたちこめていた。そして、悪霊のように、安息を求めて得られずに、寄るべなく丘の上へさまよい上つていた。じつとりした、ひどく冷い霧、それが、荒れ

た海の波のように、目に見えて一つ一つと続いて拡がつて いる漣  
 をなして、空中をのろのろと進んで来る。馬車ランプの燃えてい  
 るのと、その附近の道路の数ヤードとを除いては、何もかもラン  
 プの光から遮つて いるくらいに、濃い霧だつた。そして、喘ぎな  
 がら曳つぱつて いる馬の立てる湯気がそれと 雜りまじり、その霧がみん  
 な馬の吐き出したものかと思われるほどであつた。

例の旅客の他に、もう二人の旅客が、その駅逕馬車の脇に沿う  
 て丘をのそりのそりと登つていた。三人とも、耳の上も頬骨のと  
 ころまでも身をくるんでいて、膝の上までの大長靴を穿いていた。  
 この三人の中の誰一人も、自分の見たことからは、他の二人のど  
 ちらかがどういう類たぐいの人物であるか言えなかつたろう。また、銘

々は、自分の二人の道連れ<sup>みちづれ</sup>の肉眼に對してと同様に、彼等の心眼に對しても、ほんとど同じくらいたくさんのものを纏つて自分を隠していた。その頃の旅人は、ちょっと知り合つただけで打解けることをひどく嫌っていたのである。というのは、道中で逢う人間は誰であろうと、それが追剥か、追剥とぐるになつてゐる者であるかもしけなかつたからである。その追剥とぐるになつてゐるということなら、何しろ、宿駅★という宿駅、居酒屋という居酒屋には、亭主から一番下つぱの怪しげな廄舎係までにわたつて、「首領<sup>キャプテン</sup>」の手当を貰つてゐる者が誰かしらいるという時代では、それはいかにもありそうなことなのだ。そんなことをドーヴアー通りの駅遞馬車の車掌が腹の中で思つたのは、一千七百七十

五年の十一月のその金曜日の夜、シユーターズ丘ヒルをがたがた登りながらのこととで、その時、彼は馬車の後部にある自分だけの特別の台に立つて、足をどんどんと踏み、自分の前にある武器箱に目と片手とを離さずにいた。その武器箱の中には、彎刀わんとうを一番下にして、その上に七八挺の装薬した馬上拳銃が置いてあり、それの上に一挺の装薬した喇叭銃が載せてあつたのだ。

このドーヴァー通いの駅遞馬車は、車掌が乗客を疑り、乗客たちは相互に疑り車掌を疑り、みんなが他の者を一人残らず疑り、馭者は馬より他ほかのものは何も信用しないという、それのいつも通りの和氣藪々たる有様であった。その馬については、それらがこの旅行には適していないということを、馭者は潔白な良心をもつ

て両聖約書にかけて宣誓することでも出来た。

「どうどう！」と馭者が言つた。「はい、どう！　もう一度ぐつと曳つぱりや、てつぺんだぞ、いまいましい奴め。手てめえ前たちをそこまで漕ぎつけさせるにやあおれあずいぶん骨を折つたからな！」  
——ジョー！』

「おうい！」と車掌が答えた。

「何時なんじだろうね、ジョー？」

「十一時たつぶり十分過ぎてるよ。」

「驚いたな！」といらいらした馭者は叫んだ。「それでいてまだシユーターズのてつペんへ著けねえんだぜ！　ちえつ！　やい！

そら行け！」

例の勢のある馬は、断乎としていうことをきかないでいたところへ鞭でぴしりとやられたので、今度は断然と爬かき登り出した。

すると他の三頭の馬もそれに倣つた。もう一度ドーヴィアーブー通りの駅逕馬車はがたごとと動き出し、乗客たちの大長靴もその脇に沿うてぴしやりぴしやりと進んで行つた。馬車が止る時には彼等は止り、それとぴつたりくつついていた。もし、その三人の中の誰でも一人が、他の者に、霧と闇との中へ少し先に歩いて行こうではないかと言ひ出すような、大胆なことをしようものなら、彼は自分を追剥としてたちどころに射殺されるようにするようなものであつたろう。

最後の疾駆で馬車は丘の頂上に達した。馬はまた息いきをつぐため

に立ち止り、車掌は下りて来て、下り坂の用心に車輪に歯止はどめをかけ、乗客を入れるために馬車の扉ドア<sub>あ</sub>を開けた。

「しつ！ ジョー！」と馭者は、馭者台から見下しながら、警告するような声で叫んだ。

「何だい、トム？」

彼等は二人とも耳をすました。

「馬が一匹緩駆ゆるがけでやつて来るぜ、ジョー。」

「いや、馬が一匹疾駆はやがけでだよ、トム。」と車掌は答えて、扉ドアを掴んでいる手を放し、自分の席へひらりと飛び乗った。「お客様！ よろしいですか、皆さん！」

大急ぎでこう頼むと、彼は喇叭銃に撃鉄をかけ、撃つ身構えを

した。

この物語に既に記載されている例の旅客は、馬車の踏台に乗つて、入りかけていた。他の二人の旅客は、彼のすぐ後にいて、続いて入ろうとしていた。彼は、半身を馬車の中に、半身を馬車の外にしたまま、踏台に立ち止つた。他の二人は道路の彼の下に立ち止つた。彼等三人は馭者から車掌へ、車掌から馭者へと眼をやり、そして耳をすました。馭者は振り返つて見、車掌も振り返つて見、例の勢のある馬でさえ、逆らいもせずに、耳を欹<sup>そばた</sup>て振り返つて見た。

夜の静かな上に、馬車のがらがらごとごという音が止んだための静けさが加わつて、あたりは全くひつそりしてしまつた。馬の

喘ぐのが伝わつて馬車がぶるぶる震動し、ちょうど馬車が胸騒ぎしてでもいるようだつた。旅客たちの心臓はおそらく聞き取れそ  
うなくらいに高く鼓動していたろう。とにかく、そのひつそりし  
ている合間は、人々が息を殺し、固唾かたずを呞み、何事が起るかと思  
つて動悸を速めている様子を、聞えるほどに表あらわしたのであつた。

はやがけ疾駈はやがけで来る馬の蹄の音が猛烈に丘を上つて來た。

「おうい！」と車掌は呶鳴れるだけの大きな声で呼びかけた。  
「こらあ！ 止れ！ 撃つぞ！」

馬の歩みはぴたりと止められた。そして、頻りに泥をはねかす  
音と足搔あがく音がすると共に、霧の中から一人の男の声が聞えて來  
た。「それあドーヴァー通いの馬車かい？」

「何だろうといらぬお世話だい！」と車掌が言い返した。「お前めえ

こそ何者だ？」

「それあドーザー通りの馬車なかい？」

「どうしてそんなことを知りてえんだ？」

「もしそうなら、わつしはお客さんに用があるんだよ。」

「何というお客さんだい？」

「ジャーヴィス・ロリーさんだ。」

例の記載ずみの旅客はただちにそれが自分の名前であるということを告げ知らせた。車掌と、馭者と、他の二人の旅客とは、胡うさん散そうに彼をじろじろ見た。

「そこにじつとしているよ。」と車掌が霧の中の声に呼びかけた。

「もしおれが間違まちげえをやらかすとなると、そいつあお前の生涯中取返しがつかねえんだからな。口リりーって名前のお方、じかに返事してやつて下せえ。」

「どうしたのだね？」と、その時、例の旅客は穩かに震えた口振りで尋ねた。「わたしに用があるというのは誰だね？ ジエリーかい？」

(「あれがジエリーってえんなら、そのジエリーてえ奴の声が、おれにや気にくわねえよ。」と車掌がひとりでぶつぶつ言つた。  
「あいつはおれの気に入らねえほどの嗄しゃがれ声をしていやがるよ、あのジエリーはな。」)

「そうですよ、口リりーさん。」

「どうしたのだい？」

「あつちの向うからあなたの後を追つかけて急ぎの書面を持つて来ましたんで。T社で。」

「わたしはあの使いの者を知っていますよ、車掌。」とロリー氏は言つて、道路へ下りたが、——彼が下りるのを背後から他の二人の旅客は丁寧にというよりは素速く手助けし、その二人はすぐに馬車の中へもぐり込んで、扉<sup>ドア</sup>を閉め、窓も引き上げてしまつた。

「あの男なら近くへよこしても大丈夫だ。何も間違はないから。」

「なけりやいいが、わしにやあそいつがほんとに信じられねえ。」  
と車掌が無愛想な独り言<sup>ひとりごと</sup>のように言つた。「おういおい！」

「よしよし！ おうい！」とジエリーは前よりももつと嗄れ声で言つた。

「並足で来るんだぞ。いいか？ それからもしお前がその鞍にピストル袋をつけてるんなら、手をそいつの近くへやるのをおれに見せねえようにしろよ。何しろおれは間違まちがえをするなあ悪魔みてえに速はええんだからな。そしておれが間違まちがえをやらかす時にや、きっと鉛弾丸だまでやるんだからな。さあ、もうやつて来い。」

一頭の馬と乗手との姿が、渦巻いている霧の中からのろのろと出て来て、例の旅客の立つている、駅逓馬車の脇のところまでやつて來た。その乗手は身を屈め、それから、車掌をちらりと仰ぎ見ながら、一枚の小さく折り摺たたんだ紙片を旅客に手渡しした。乗

手の馬は息を切らして、馬も乗手も両方とも、馬の蹄から男の帽子まで、泥まみれになつていた。

「車掌！」と旅客は、平静な事務的な信頼の語調で、言つた。

用心深い車掌は、右手を自分の持ち上げている喇叭銃の台尻に、左手をその銃身にかけ、眼を騎者に注ぎながら、ぶつきらぼうに答えた。「へえ。」

「何も懸念することはない。わたしはテルソン銀行のものだ。ロンドンのテルソン銀行はお前さんも知つて、いるに違ひない。わたしは用向でパリーへ行くところなのだ。酒代に一クラウン★あげるよ。これを読んでいいね？」

「速くして下さいますんならね、旦那。」

彼は自分のいる側の馬車ランプの明りの中にそれを開けて、そして読んだ、——最初は口の中で、次には声を立てて。「『ドーヴァーにてお嬢さんマムゼールを待て。』と。長くはないだろう、ねえ、車掌。ジエリー、こう言つてくれ。わたしの返事は、甦る、というのだつた、とね。」

ジエリーは鞍の上できよつとした。「そいつあまたとてつもなく奇妙な御返事ですねえ。」と彼は精一杯の嗄しゃがれ声で言つた。

「その伝言ことづけを持つて帰りなさい。そうすれば、わたしがこれを受け取つたことが、手紙を書いたと同じくらいに、先方にわかるだろうからね。出来るだけ道を急いで行きなさい。じゃ、さようなら。」

そう言いながら、旅客は馬車の扉を開けて入った。が、今度は相客たちは少しも彼の手助けをしなかつた。彼等は自分の懐中時計や財布を長靴の中へ手速く隠し込んでしまつて、その時はすっかり眠っている風をしていたのだ。それは、特にはつきりした目的があつてのことではなく、ただ、何等かの他の種類の行動の原因を作るような危険を避けるためなのであつた。

馬車は再びがらがらと動き出し、下り坂へ来かかると、前よりももつと濃い環を巻いた霧が周りに迫つて來た。車掌はまもなく喇叭銃を武器箱の中へ戻し、それから、その中にある他の武器を検べ、自分の帶革につけている補充用の拳銃ピストルを検べると、自分の座席の下にある小さな箱を検べてみた。その中には二三の鍛冶しら

道具と、火把たいまつが一対と、引火奴箱ほくちばこが一つ入っていた。それだけすっかり備えておいたのは、折々起つたことであるが、馬車ランプが嵐に吹き消された時には、車内に入つて閉めきり、火打石と火打鉄がねとで打ち出した火花を藁からほどよく離しておけば、かなり安全にかつ容易に（うまくゆけば）五分間で明りをつけることが出来たからである。

「トム！」と馬車の屋根越しに低い声で。

「おうい、ジヨー。」

「あの伝言ことづてを聞いたかい？」

「聞いたよ、ジヨー。」

「お前ぬえあれをどう思つたい、トム？」

「まるでわかんねえよ、ジヨー。」

「じゃあ、そいつも同じこつたなあ。」と車掌は考え込むように言つた。 「おれだつてまるつきりわかんねえんだからな。」

霧と闇との中にただ独り残されたジエリーは、その間に馬から下りて、疲れ果てた馬を楽にさせてやるばかりではなく、自分の顔にかかっている泥を拭つたり、半ガロン★ほどの水を含むことの出来そうな自分の帽子の鐸<sup>つば</sup>から水気を振い落したりした。駅逕馬車の車輪の音がもう聞えなくなつてしまい、夜がまたすっかり静まり返るまで、彼はひどく泥のはねかつている腕に手綱をかけたまま立つていたが、それからぐるりと身を して丘を歩いて下り出した。

「あんなにテムブル関門★から駆け通しで来たんだからなあ、お婆さん、お前を平地へつれてくまではおれはお前の前脚を信用出来ねえよ。」とこの嗄れ声の使者は、自分の牝馬をちらりと眺めながら、言った。「『甦る』だとよ。こいつあとてつもなく奇妙な伝言だなあ。そんなことがたくさんあつた日にやあ、お前のためにやよくあるめえぜ、ジエリー！ なあ、おい、ジエリー！ もし甦るなんてことが流行つて来ようものなら、お前はとてつもなく面白くもねえことになるだろうぜ、ジエリー！★」

### 第三章 夜の影

あらゆる人間が他のあらゆる人間にとつて深奥な秘密であり神秘であるようになって出来てゐるということは、考えてみると驚くべき事実である。私が夜間にある大きな都会に入る時、その暗く寄り集つてゐる家々の一つ一つがそれぞれの秘密を包んでいるということや、その一つ一つの家の中の一つ一つの室がまたそれぞれの秘密を包んでいるということや、そこにいる幾十万の胸の中に鼓動している一つ一つの心臓が、それの思い描いている事柄によつては、それに最も近しい心臓にとつても一の秘密である！ とい

うことは、考えると厳かな事柄である。死というものでさえ、その恐しさの幾分かは、このことに基くのである。もはや私は自分の愛したこの懐しい書物の紙葉をめくることが出来ない。そして、いつかはそれをみんな読もうと思つていた望みも空しくなつてしまふ。もはや私は深さの測り知られぬこの水の底を覗き込むことが出来ない。瞬時の光がちらりと射し込んだ時に、私はその水中に沈んでいる宝やその他の物を瞥見したことがあつたのだが。その書物は、私がたつた一頁だけ読んでしまうと、永久に永久にぴたりと閉じられる宿命になつていたのだ。その水は、光がその水面に閃いていて、私が岸に何も知らずに立つている時に、永遠の氷に鎖される宿命になつていたのだ。私の友人が死ぬ。私の隣

人が死ぬ。私の恋人、私の心の愛人が死ぬ。それは、その個人の裡<sup>うち</sup>に常に宿つていた秘密の仮借なき凝固であり永久化であるのだ。そういう秘密を私もまた自分の裡に宿して自分の生涯の終りまで持つて行くことであろう。私の今通つているこの都会のどの墓地にでも、この都会の忙しく働いている住民たちが、その心の一番奥底では、私にとつて窺い知りがたいものであり、あるいは私が彼等にとつてそうであるよりも以上に、窺い知りがたい死者というものが、果しているであろうか？

この、生得の、他人に譲ることの出来ない資産ということでは、例の馬上の使者も、国王や、宰相や、ロンドン随一の富裕な商人などと全く同じだけのものを持つてゐるのであつた。また、がた

がたと音を立てて行く一台の古ぼけた駅逓馬車の狭苦しい中に閉じこめられている、あの三人の旅客にしても、やはりそうなのだ。彼等は、一人一人が自分自身の六頭牽の馬車に乗つて、あるいは自分自身の六十頭牽の馬車に乗つて、自分と隣の者との間に一つの郡ほどの間隔を置いてでもいるように、完全に、お互が神秘なのであつた。

例の使者はゆつくりした早足で馬に乗つて引返し、かなり幾度も路傍の居酒屋に止つて酒を飲んだが、しかし、なるべく口を噤み、帽子を眼深まぶかにかぶつているようにしていた。彼はそういう帽子のかぶり方に極めてよく釣合つた眼をしていた。黒味がかかつた眼で、色でも形でも深みが少しもなく、もし余り遠く離れていた

ると何かの事で片眼だけが見つけ出されはしないかと恐れてでもいるかのように——ひどくくつつき過ぎてしているのだ。その眼は、三角の痰壺のような古ぼけた縁<sup>ふちそり</sup>反帽<sup>ぼう</sup>の下、頤と咽<sup>のど</sup>とを巻いてほどんど膝あたりまで垂れ下っている大きな襟巻の上に、陰険な表情をしていた。止つて一杯飲む時には、彼は、右手で酒をぐうつとやる間だけ、その襟巻を左手で取り除け、それがすむや否や、すぐに再び巻きつけてしまうのだつた。

「いいや、ジエリー、いやいや！」と使者は、馬に乗つてゐる間も一つの事ばかり考え返しながら、言つた。「そいつあお前<sup>めえ</sup>のためにやよくあるめえぜ、ジエリー。ジエリー、お前<sup>めえ</sup>は実直な商売人なんだからな、そいつあお前の商売にや向くめえよ！ よみが

——！ うん、旦那は一杯飲んで酔つ払つてたに違えねえや！」

あの伝言ことづては彼の心をひどく悩ませたので、彼は何度も帽子を脱いで頭をがりがり搔くより他ほかに仕方がないくらいであつた。ぱらぱらと禿げている脳天を除いては、硬こわい黒い髪の毛がその頭一面にぎざぎざと突つ立つていて、ほとんど彼の団子鼻のあたりまでも生え下つていた。その頭は鍛冶屋の作つた物のようであつた。髪の生えた頭というよりは、堅固に忍しおびがえ返し★を打ちつけてある塀の頂に似ていた。だから、蛙飛び★の一番の名人でも、飛び越すのにこれほど危険な男は世の中にもいないと言つて、彼を飛び越すことは断つたかもしかつた。

彼がテムブル関門バの傍のテルソン銀行の戸口のところにある番

小屋の中の夜番人に渡し、その夜番人がまたそれを中にいる上役たちに渡すことになつてゐるはずの、あの伝言ことづてを持つて、馬を早足で歩ませながら引返してゐる間、夜の影は、彼にとつては、その伝言ことづてから生じたような形をしてゐるように見え、その牝馬にとつては、その馬だけにしかわからぬいろいろの不安の種から生じたような形をしてゐるように見えたのであつた。そういう不安の種はたくさんあつたらしく、馬は路上のあらゆる物影におびえていた。

その間に、例の駆遁馬車は、お互に窺い知りがたい三人の相客を車内に乗せたまま、がたがた、ごろごろ、がらがら、ごとごとと、そのもどかしい道を進んで行つた。この三人にも、同じよう

に、夜の影は、彼等のうとうとしている眼と取留めのない思いとが心に浮ばせた通りの姿をして現れた。

テルソン銀行がその駅逓馬車の中で取附けに逢っていた。あの銀行員の乗客が——馬車が特別ひどく揺れる度に、隣の乗客にぶつかつて、その人を隅っこに押しつけることのないために、車内の者が皆しているように、吊革に片腕を通したまま——眼を半ば閉じながら自分の座席でこくりこくりやつていると、小さな馬車の窓や、そこから仄暗く射し込んで来る馬車ランプや、向い合っている乗客の嵩ばつた図体などが、銀行に変つて、一大支払をやつているのだつた。馬具のがちやがちやいう音は、貨幣のじやらじやらいう音になつた。そして、五分間のうちに、テルソン銀

行できえ、その国外及び国内のあらゆる関係方面をみんなひつくるめて、かつてその三倍の時間に支払つたことのあるよりも以上に多額の、為替手形が支払われた。それから今度は、テルソン銀行の地下の貴重品室が、その乗客の知つているような高価な品物や秘密物を納めたまま（そしてそれらの物について彼の知つていることは少くはなかつたのだ）、彼の前に開かれた。そして、彼は大きな幾つもの鍵と微かに弱々しく燃えている蠟燭とを持つてその中へ入つて行つた。すると、その品々は、彼が最後に見た時とちようど同じに安全で、堅固で、無事で、平静であることがわかつた。

しかし、銀行がほとんど絶えず彼と共にあつたけれども、また

馬車も（阿片剤を飲んだための苦痛があるように、混乱したのにではあるが）絶えず彼と共にあつたけれども、その夜中流れて止まなかつたもう一つの印象の流れがあつた。彼はある人を墓穴から掘り出しに行く途中なのであつた。

ところで、彼の前に現れる多数の顔の中のどれが、その埋葬されている人のほんとうの顔なのか、夜の影は示してくれなかつた。だが、それらはどれもこれも年齢四十五歳の男の顔であつて、主として異つてているのは、その表<sup>あらわ</sup>している感情と、その瘠せ衰えた様子の物凄さとの点であつた。自負、軽蔑、反抗、強情、服従、悲歎などの表情が次々に現れ、いろいろのこけた頬、蒼ざめた顔色、痩せ細つた手や指などが次々と現れたのだ。しかしその顔は

だいたいは同一の顔で、頭はどれもまだそういう年でもないのに  
真白だつた。幾度も幾度も、このうとうとしている旅客はその亡  
靈に尋ねるのであつた。――

「どれくらいの間埋められていたんです？」

その答はいつも同じであつた。「ほとんど十八年。」

「あなたは掘り出されるという望みはすっかり棄てておられたの  
ですね？」

「ずっと以前に。」

「あなたは御自分が甦よみがえつていることを御存じなのですね？」

「みんながわたしにそう言つてくれる。」

「あなたは生きたいとお思いでしようね？」

「わしにはわからない。」

「あの女ひとをあなたのところへお連れして来ましようか？　あなたの方からあひとの女ひとに逢いにいらつしやいますか？」

この質問に対する答は、いろいろさまざままで、正反対のもあつた。時には、とぎれとぎれに「待つてくれ！　余り早く彼女あれに逢つてはわたしは死にそうだから。」という返事をすることもあつた。時には、さめざめと涙の雨あられにくれ、それから「わたしを彼女あれのところへ連れて行つてくれ。」という返事をすることもあつた。また時としては、じつと見つめて当惑したような顔をして、それから「わしはそんな女ひとを知らん。わしには何のことかわからん。」という返事をすることもあつた。

そういう想像上の会話の後に、この旅客は、その憐れな人間を掘り出してやるために、空想の裡うちにで——ある時は鋤で、ある時は大きな鍵で、ある時は自分の両手で——掘つて、掘つて、掘るのであつた。顔にも髪にも土をくつつけたまま、ようやく出て来るど、その男はたちまち倒れて塵になつてしまふ。すると旅客ははつとして我に返り、窓を下して、霧と雨とを頬に実際に感じるのであつた。

それでも、彼が眼を見開いて、霧と雨や、ランプから射す光の動いてゆく斑紋や、ぐいぐいと遠退いてゆく路傍の生垣などを眺めている時でさえ、馬車の外の夜の影は、いつの間にか馬車の内の夜の影のあの連りと一緒になるのだつた。テムブル関門バ<sub>1</sub>の傍の

ほんとうの銀行も、前日のほんとうの事務も、ほんとうの貴重品室も、彼の後を追つかけて来たほんとうの急書も、彼が持たして返したほんとうの伝言も、みんなそこにある。そういうものの真中から、例の幽霊のような顔が現れて来る。すると彼はまたそれに話しかける。

「どれくらいの間埋められていたんです？」

「ほとんど十八年。」

「あなたは生きたいとお思いでしようね？」

「わしにはわからない。」

掘つて——掘つて——掘つている——と、とうとう二人の乗客の中の一人がたまりかねたような身動きをするので、彼ははつと

気がついて窓を引き上げ、片腕をしつかりと吊革に通して、眠っている二人の姿を默想する。そのうちにいつの間にか彼の心は二人のことから離れて、彼等は再び銀行と墓穴との中へ滑り込んでしまう。

「どれくらいの間埋められていたんです？」

「ほとんど十八年。」

「掘り出されるという望みはすっかり棄てておられたのですね？」

「ずっと以前に。」

この言葉がつい今しがた口で言われたようにまだ耳に残つている——今までにかつて口で言われた言葉が彼の耳に残つたようにはつきりと残つている——時に、その疲れた旅客は、明るい光に

気がついてはつとし、夜の影がもう消え失せていることを知つた。

彼は窓を下すと、顔を外に突き出して、さし昇る太陽を眺めた。

そこには、山脊のようになつて長く連つている耕地があつて、犁<sup>からすき</sup>  
**★**が一つ、前夜馬を轍<sup>くびき</sup>から離した時に残されたままにしておいて  
あつた。耕地の向うには、静かな雜木林があつて、燃えるように  
紅<sup>あか</sup>い木の葉や、金色のように黄ろい木の葉が、梢にまだたくさん  
残つていた。地面は冷くてしつとり湿<sup>しめ</sup>つていたけれども、空は晴  
れわたつていて、太陽は燦然と、穩かに、美わしく昇つていた。

「十八年とは！」と旅客はその太陽を眺めながら言つた。「お慈  
悲深いお天道さま！ 十八年間も生埋めにされているなんて！」

## 第四章 準備

駅遞馬車が午前中に無事にドーヴィーへ著くと、ロイアル・ジヨージ旅館★の給仕頭ホテル<sup>あ</sup>は、いつもきまつてするように、馬車の扉ドアを開けた。彼はそれを幾分儀式張つて仰々しくやつたのであつた。というのは、何しろ、冬季にロンドンから駅遞馬車で旅をして来るということは、冒險好きな旅行者に祝意を表してやつてしかるべきくらいの事柄であつたからである。

この時までには、その祝意を表さるべき冒險好きの旅行者は、たつた一人しか残つていなかつた。他の二人は途中のそれぞれの

目的地で下りてしまつていたからだ。馬車の黴臭い内部は、その湿つぽい汚れた藁と、不愉快な臭気と、薄暗さとで、幾らか、大きな犬小屋のようであつた。藁をふらふらにくつつけ、長い毳けいのある肩掛けをぐるぐる巻きつけ、鐸つばのびらびらしている帽子をかぶり、泥だらけの脚をして、その馬車の中から体をゆすぶりながら出て來た、乗客の口リー氏は、幾らか、大きな犬のようであつた。

「明日カレー★行きの定期船は出るだらうね、給仕？」

「さようでござります、旦那、もしお天氣が持ちまして風が相当の順風でござりますればね。潮しおは午後の二時頃にかなり工合よくなりますでしよう、はい。で、お寝やすみですか、旦那？」

「わたしは晩になるまでは寝まい。しかし、寝室は頼む。それか

ら床屋をな。」

「それから御朝食は、旦那？　はいはい、畏りました。は、どうぞそちらへ。和<sup>コンコード</sup>合の間へ御案内！　お客さまのお鞄<sup>かばん</sup>と熱いお湯を和<sup>コンコード</sup>合の間へな。お客さまのお長靴は和<sup>コンコード</sup>合の間でお脱がせ申すんだぞ。（上等の石炭で火が燃やしてございますよ、旦那。）床屋さんを和<sup>コンコード</sup>合の間へ呼んで来ておあげなさい。さあさあ、和<sup>コンコード</sup>合の間の御用をさつさとするんだよ！」

その和<sup>コンコード</sup>合の寝室というのはいつも駅遞馬車で来た旅客にあってがわれていたので、そして、駅遞馬車で来た旅客たちはいつも頭の先から足の先までぼつてり身をくるんでいたので、その室は、ロイアル・ジョージ屋の人々にとつては、そこへ入つて行くのは

ただ一種類だけの人に見えるが、そこから出て来るのはあらゆる種類のさまざまの人であるという、妙な興味があるのでした。そういう訳で、六十歳の一紳士が、大きな四角いカフスとポケットトに大きな**覆布**<sup>ふた</sup>のついている、かなり著古してはあるが、極めてよく手入れのしてある茶色の服に正装して、朝食をとりに行く時は、別の給仕と、二人の荷持と、幾人かの女中と、女主人とが、**コンコード** 和合の間と食堂との間の通路の処々方に偶然にもみんなぶらぶらしていたのであつた。

食堂には、その午前、この茶色服の紳士より他に客はなかつた。彼の朝食の食卓は炉火の前へ引き寄せてあつた。そして、その火の光に照されながら、食事を待つて腰掛けている間、彼は余りじ

つとしているので、肖像画を描かせるために著席しているのかと思われるくらいであつた。

彼はすこぶるきちんとして几帳面に見え、両膝に手を置き、音の大きな懐中時計は、あたかもかつかと燃えている炉火の軽躁さとうつろいやしさとに自分の莊重さと寿命の永さとを競わせるかのように、垂片たれのあるチヨツキの下で朗々たる説教をちよきちよきちよきちよきとやつていた。彼は恰好のよい脚をしていて、少しほれを自慢にしていたらしい。というのは、茶色の靴下はすべすべとぴつたり合つていて、地合が上等のものであつたし、緊しめがね金附めがねきの靴も質素ではあつたが小綺麗なものだつたから。彼は、頭にごくぴつたりくつついている、風変りな小さいつやつやした

縮れた亞麻色の假髮かつらをかぶつていた。この假髮かつらは髪の毛で作られたものであろうが、しかしそれよりもまるで絹糸か硝子質の物の纖維で紡いだもののように見えた。彼のシャツ、カラー類は、靴下と釣合うほどの上等なものではなかつたが、近くの渚に寄せて碎ける波なみ頭がしらか、海上遠くで日光にきらきらと光つてゐる帆影ほどに白かつた。習慣的に抑制されて穩かになつてゐる顔は、潤うるおいのあるきらきらした一双の眼のために、例の一風変つた假髮かつらの下で始終明るくされていた。その眼をテルソン銀行風の落著いた遠慮深い表情に仕込むには、過ぎ去つた年月の間に、その眼の持主に多少は骨を折らせたものに違ひない。彼は健康そうな頬色をしていて、その顔には、皺がよつてはいたけれども、憂慮の痕は

大して見えなかつた。だが、おそらく、テルソン銀行の機密に参与する独身の行員たちというものは、他人の苦労に主としてかかりあつていたのであろう。そして、おそらく、他人のセカンドハンドお古の苦労というものは、他人のセカンドハンドお古の著物と同様に、脱ぐのも著るのも造作のないものなのであろう。

肖像画を描かせるために著席している人との類似を更に完全にしよう、ロリー氏はうとうとと寐入つてしまつた。朝食が運ばれて来たのに彼は目を覚された。そして、自分の椅子を食事の方へ動かしながら、給仕に言つた。――

「若い御婦人が今日ここへ何時来られるかもしけないが、その方のために部屋を用意しておいてもらいたい。その御婦人はジヤー

ヴィス・ロリーさんはいないかと言つて尋ねられるかも知れないし、それとも、ただ、テルソン銀行から来たお方はいないかと尋ねられるかもしれない。そしたらどうか知らせて下さい。」

「は、畏りました。ロンドンのテルソン銀行でございますね、旦那？」

「そうだ。」

「は、承知いたしました。手前どもでは、あなたさまのところの方々かたがたがロンドンとパリーの間を往つたり来たりして御旅行なさいます時に、たびたび御聟こひ員にあづかつております、はい。テルソン銀行では、旦那、ずいぶん御旅行をなさいますようで。」

「そうだよ。わたしどもの銀行は、イギリスの銀行であると同じ

くらいに、全くフランスの銀行でもあるようなものだからね。」

「は、なるほど。でも、旦那、あなたさまはあまりそういう御旅行はしつけてお出でになりませんようございますが?」

「近年はやらない。わたしどもが——いや、わたしが——この前フランスから戻つてから十五年になるよ。」

「へえ、さようでござりますか? それでは手前がここへ参りましたより以前のこととござりますよ、はい。ここの人たちがここへ参りましたよりも以前のこととて、旦那。このジョージ屋はその時分は他の人の経営でございました。」

「そうだろうねえ。」

「しかし、旦那、テルソン銀行のようなところになりますと、十

五年前はおろか、五十年ばかりも前でも、繁昌していらっしゃった  
ということには、手前がどつきり賭かけをいたしましてもよろしゅう  
ございましょうね？」

「それを三倍にして、百五十年と言つたつていいかもしけんな。  
それでも大して間違이じやないだらうよ。」

「へえ、さようで！」

口と両の眼とを円くしながら、ウエーティ給仕人は食卓から一足下ると、  
ナプキンを右の腕から左の腕へと移して、安楽な姿勢をとつた。  
そして、客の食べたり飲んだりするのを、展望台か望楼からでも  
するように見下しながら、立つていた。あらゆる時代における給ウ  
仕人エータの昔からの慣習に従つて。

ロリー氏は朝食をすましてしまって、浜辺へ散歩に出かけた。

小さな幅の狭い曲りくねつたドーヴィーの町は、海の駝鳥のように、浜辺から隠れて、その頭を白堊の断崖の中に突っ込んでいた★。浜辺は山なす波浪と凄じく転げつてゐる石ころとの沙漠であつた。そして波浪は己おのが欲するままのこととした。その欲するまゝのこととは破壊であつた。それは狂暴に町に向つて轟き、断崖に向つて轟き、海岸を突き崩した。家々の間の空気は非常に強く魚臭い臭いがして、ちょうど病氣の人間が海の中へ浸りに行くように、病氣の魚がその空気に浸りに来たのかと想像されるほどであつた。この港では漁業も少しは行われていたが、夜間にぶらぶら歩き

つて海の方を眺めることが盛んに行われた。★殊に、

潮しおがさして来て満潮に近い時に、それが行われるのであつた。何一つ商売もしていない小商人が、時々、不可思議千万にも大財産をつくることがあつた。そして、この附近の者が誰一人も点灯夫に我慢がならないことは不思議なくらいだつた。

日が戻かげつて午後になり、折々はフランスの海岸が見えるくらいに澄みわたつていた空気が、再び霧と水蒸気とを含んで来るにつけれど、ロリー氏の思いもまた曇つて來たようであつた。日が暮れて、彼が朝食を待つていた時のようにして夕食を待ちながら、食堂の炉火の前に腰掛けていた時には、彼の心は、赤く燃えている石炭の中をせつせと掘つて掘つて掘つているのであつた。

夕食後の上等なクラレット★の一罐は、赤い石炭の中を掘る人

に、ともすれば仕事を抛擲させがちであるからということの他には、何の害もしないものである。ロリー氏は永い間安閑としていたが、そのうちに、中年を過ぎた血色のいい紳士が一罐を傾け尽した場合にいつも見られるようなこの上もなく満足だという様子で、自分の葡萄酒の最後の杯を注<sup>つ</sup>いだ時に、がらがらという車輪の音が狭い街路をこちらの方へとやつて来て、旅館の構内へごろごろと入つて來た。

彼は杯に口をつけずにそれを下に置いた。「お嬢さんだな！」  
と彼は言つた。

数分たつと給仕人<sup>ウェーラー</sup>が入つて来て、マネット嬢がロンドンからお著きになつて、テルソン銀行からお出でになつた紳士にお目に

かかるなら仕合せですと言つていらっしゃいます、と知らせた。

「そんなに早く？」

マネット嬢は途中で食事をおとりなつたので、今はちつともほしくはないそうで、もしテルソン銀行の紳士の思召しと御都合さえよろしければ、すぐにお目にかかりたいと非常にお望みです、とのこと。

そのテルソン銀行の紳士は、そのためには、ただ、無神経な捨鉢らしい風に杯の酒をぐうつと飲み乾し<sup>ほ</sup>、例の風変りな小さい亞麻色の仮髪<sup>かつら</sup>を耳のところでしつかりと抑えつけて、給仕人<sup>ウエーテー</sup>の後についてマネット嬢の部屋へと行きさえすればよいのであつた。

そこは大きな暗い室で、黒い馬毛織を葬式にふさわしいような陰

氣なのに飾りつけ、どつしたりした黒ずんだ卓子を幾つも置いてあつた。これらの卓子は油を塗つてびかびかと拭き込んであるので、室の中央にある卓子に立ててある二本の高い蠟燭は、どの板にもぼんやりと映つていた。あたかもその蠟燭が黒いマホガニーの深い墓穴の中に埋められていて、そこから掘り出されるまではその蠟燭からはこれというほどの光は期待することが出来ないかのようだつた。

そこの薄暗さでは見透すのが困難であつたので、ロリー氏は、だいぶん擦り切れているトルコ絨毯の上を気をつけて歩きながら、マネット嬢は一時どこか隣の室あたりにいるのだろうと想像したが、やがて、例の二本の高い蠟燭の傍を通り過ぎてしまうと、彼

には、その蠅燭と暖炉との間にある卓子の傍に、乗馬用外套を著て、まだ麦藁の旅行帽をリボンのところで手に持つたままの、十七より上にはなつていない一人のうら若い婦人が、自分を迎えて立つてゐるのを認めた。彼の眼が、小柄で華奢な美しい姿や、豊かな金髪や、尋ねるような眼付をして彼自身の眼とぴたりと会つた一双の碧い眼や、眉を上げたり顰めたりして、当惑の表情とも、不審の表情とも、恐怖の表情とも、それとも単に怜俐な熱心な注意の表情ともつかぬ、しかしその四つの表情を皆含んでいる一種の表情をする奇妙な能力（いかにも若々しくて滑かな額なめらひたいなどに止まつた時とど）を持つ額などを止まつた時——彼の眼がそれらのものに止まつた時に、突然、ある面影がま

ざまざと彼の前に浮んだ。それは、霰が烈しく吹きつけて波が高いある寒い日、この同じイギリス海峡を渡る時に彼自身が腕に抱いていた一人の幼児の面影であつた。その面影は、彼女の背後にある氣味の悪い大姿見鏡の面おもてに横から吹きかけた息なぞのように、消え去つてしまい、その大姿見鏡の縁には、幾人かは首が欠けているし、一人残らず手か足が不具だという、病院患者の行列のような、黒奴くろんぼのキュー・ピツドたちが、死海の果物★を盛つた黒い籠を、黒い女性の神々に捧げていたが、——それから彼はマネット嬢に対して彼の正式のお辞儀をした。

「どうぞお掛け遊ばせ。」ごくはつきりした気持のよい若々しい声で。その口アクセント調には少し外国訛なまりがあつたが、それは全くほ

んの少しである★。

「わたしはあなたのお手に接吻いたします、お嬢さん。」とロリ一氏は、もう一度彼の正式のお辞儀をしながら、昔の作法に従つてこう言い、それから著席した。

「あたくし昨日銀<sup>きのう</sup>行からお手紙を頂きましたのでございますが、それには、何か新しい知らせが——いいえ、発見されましたことが——」

「その言葉は別に重要ではありません、お嬢さん。そのどちらの言葉でも結構ですよ。」

「——あたくしの一度も逢つたことのない——ずっと以前に亡<sup>な</sup>くなりました父のわずかな財産のことにつきまして、何かわかりま

したことがありますそうで——

ロリー氏は椅子に掛けたまま身を動かして、例の黒奴くろんぼのキューピットたちの病院患者行列の方へ心配そうな眼をちらりと向けた。あたかも彼等がその馬鹿げた籠の中に誰でもに対するどんな助けになるものでも持つていてるかのように！

「——そのために、あたくしがパリーへ参つて、あちらで、その御用のためにわざわざパリーまでお出で下さる銀行のお方とお打合せをしなければならない、と書いてございましたのですが。」「その人間というのがわたしで。」

「そう承るだろうと存じておりました。」

彼女は、彼が自分などよりはずつとずつと経験もあり智慮もあ

る方かただと自分が思つて いると いうことを、彼に伝えたいと いう可憐な願いをこめて、彼に 対して膝を屈めて礼をした（当時は若い淑女は膝を屈める礼をしたものである）。彼の方ももう一度彼女にお辞儀をした。

「あたくしは銀行へこう御返事いたしました。あたくしのことを知つていて下すつて、御親切にいろいろあたくしに教えて下さる方々かたがたが、あたくしがフランスへ参らなければならぬとお考えになるのですし、それに、あたくしは孤児みなしごで、御一緒に行つて頂けるようなお友達もございませんのですから、旅行の間、そのお方さまのお世話になれますなら、大変有難いのでございますが、と申し上げましたのでございます。そのお方はもうロンドンをお

立ちになつてしまつていらつしやいましたが、でも、そのお方に  
ここであたくしをお待ち下さるようにお願いしますために、その  
方かたの後あとから使いの人を出して下すつたことと存じます。」

「わたしはそのお役目を任せましたことを嬉しく思つておりま  
した。それを果すことが出来ますればもつと嬉しいことでござい  
ましよう。」とロリー氏が言つた。

「ほんとに有難うございます。有難くお礼を申し上げます。銀行  
からのお話では、その方かたが用事の詳しいことをあたくしに御説明  
して下さいますばずで、それがびつくりするような事柄なのだから、  
その覚悟をしていなければならない、とのことでございまし  
た。あたくしはもう十分その覚悟をいたしておりますので、あた

くしとしましてはどんなお話なのか知りたくて知りたくてたまらないのですございますが。」

「御もつとも。」とロリー氏は言つた。「さよう、——わたしは——

ちよつと言葉を切つてから、彼はまた例の縮れた亞麻色の假髪かつらを耳のところで抑えつけながら、こう言い足した。——  
「どうも言い出すのが大変むずかしいことなのでして。」

彼が言い出さずに、躊躇しているうちに、彼女の視線とぱつたり出会つた。と、例の若々しい額ほかが眉を上げてあの奇妙な表情をしき——しかしそれは奇妙なという他に可愛いくて特有の表情であつたが——それから、彼女は、何かの通り過ぎる物影を思わず掴

むか引き止めるかのよう、片手を挙げた。

「あなたはあたくしのまるで知らないお方なのでしょうか？」

「そうじやないと仰しやるんですか？」ロリー氏は両手を拡げて、議論好きなような微笑を浮べながらその手をぐつと左右に差し伸ばした。

彼女がこれまでずつとその傍に立っていた横の椅子へ物思わしげに腰を下した時に、眉毛と眉毛の間、この上なく優美な上品な鼻筋をした女らしい小さな鼻のすぐ上のところに、例の表情が深まつた。彼は彼女が物思いに沈んでいるのを見守っていたが、彼女が再び眼を上げた瞬間に、こう話し出した。――

「あなたの帰化なさいましたこの国では、あなたをお若いイギリ

スの御婦人としてマネツト嬢ミス・マネットと申し上げるのが一番よろしいかと存じますが?」

「ええ、どうぞ。」

「マネツト嬢ミス・マネット、わたしは事務家でございます。今わたしには自分の果さなければならん事務の受持が一つございますのです。あなたがそれをお聴き取り下さいます時には、わたしをほんの物を言う機械だというくらいにお思い下さい。——全くのところ、わたしなぞはそれと大して違つたものじやありません。では、お嬢さん、御免を蒙つて、わたしどもの方ほうのあるお得意さまの身の上話をあなたにお話申し上げることにいたしましょう。」

「身の上話ですって!」

彼女が言い返した言葉を彼はわざと聞き違えたらしく、急いで  
言い足した。「そうです、お得意さまです。銀行業の方ではお取  
引先のことをお得意さまといつも申しておりますんで。その方かたは  
フランスの紳士でした。科学の方面の紳士で。非常に学識のある  
人で、——お医者でした。」

「ボーヴェー★出身の方かたではございませんの？」

「そうですねえ、ええ、ボーヴェー出身の方かたです。あなたのお父  
さまのムシュー★・マネットと同じように、その紳士はボーヴエ  
ー出身の方かたでございました。あなたのお父さまのムシュー・マネ  
ットと同じように、その紳士もパリーでなかなか評判の人でした。  
わたしがその方かたとお近ちかづき付になりましたのはそのパリーだつたの

です。わたしたちの関係は事務上の関係でございましたが、しかし非常に親しくして頂いておりました。わたしはその頃わたしのフランスの店におりまして、それまでには——そう！ 二十年間もそこにおりましたのですが。」

「その頃——と仰しやいますと、いつ頃なのでございましょうかしら？」

「わたしは、お嬢さん、二十年前のことをお話申しております。その方かたは御結婚なさいました、——イギリスの御婦人ふじんとでした。

——そしてわたしは財産管理人の一人になりました。その方かたの財務上の事は、他のたくさんフランスの紳士方やフランスの御家庭の財務と同様に、すっかりテルソン銀行に任せてございました

のです。そんな風にして、わたしは現在、いや以前から、たくさんのお得意さまのあれやこれやの管理人になつております。これは皆ただの事務上の関係ですよ、お嬢さん。それには友情とか、特別の関心とかではなく、感情といったようなものは何もないのです。わたしは事務の人間として今日までの生涯を送つて来ました間に、そういうのの一つから他ほかのにと移つて参りました。それは、ちようど、わたしが毎日事務を執つています間に、一人のお得意さまから他のお得意さまへと移つてゆきますようなもので。手短に申しますと、わたしには感情というものがございませんのです。わたしはほんの機械なんです。で、話を続けることにいたしますと——」

「でもそれはあたくしの父の身の上話でございましょう。あたくし何だか、」——と例の不思議な表情をする額が彼に向つて熱心になりながら——「あたくしの母が父の亡くなりましてからたつた二年しか生きていなくて、あたくしが孤児みなしごになりました時に、あたくしをイギリスへ連れて来て下さいましたのは、あなたでしたように、思われて参りました。あなたに違ひないような気がいたします。」

ロリー氏は、彼の手を握ろうとして信頼するように差し伸べられた、ためらつて、小さな手を取つて、それを幾らか儀式張つて自分の脣にあてた。それから彼はその若い淑女をすぐによみがへた。彼女の椅子のところへ連れて行つた。そして、左手では椅子の背

を掴み、右手を使って自分の頬を撫でたり、<sup>かづら</sup>仮髪の耳のところをひつぱつたり、自分の言つたことを注意させたりしながら、立つて、腰掛けで自分を見上げている彼女の顔を見下した。

「マネット嬢、<sup>(ミス・マネット)</sup>それはいかにもわたしでした。ところが、それ以来わたしがあなたに一度もお目にからなかつたことをお考え下されば、わたしがつい今、自分のことを、わたしには感情というものがなきとか、わたしと他の人たちとの関係はみんなただの事務上の関係だと申しましたことが、ほんとうであることがおわかりになりますでしよう。そうです、一度もお目にかかりませんでした。あなたはそれ以来ずっとテルソン商社の被後見人ですのに、わたしはそれ以来ずっとテルソン商社の他の事務にばかり<sup>ほか</sup>あ

くせく齷齪していたのです。感情なんて！わたしにはそんなものを持つ時まもなく、機会もありません。わたしは一生、お嬢さん、大きなお札の皺伸機をさつしづのしして過すのですよ。」

自分の毎日の仕事をこういう奇妙なのに説明してから、口リ一氏は亞麻色の仮髪を両手で頭の上から平らに抑えつけ（これは全く余計なことで、そのぴかぴかした表面は前から何も及ばないくらいに平らになつてゐるのである）、それから元の姿勢に返つた。

「ここまででは、お嬢さん、（あなたの仰しやいました通り）あなたのお氣の毒なお父さまの身の上話なのです。ところが、これからは違うのですよ。もしも、あなたのお父さまが、お亡くなりになつたという時に、亡くなられたのではない、としますと――。

驚かないで下さい！ そんなにびつくりなすつては！」

彼女は、實際、飛び立つほどびつくりしたのだつた。そして両手で彼の手頸を掴んだ。

「どうぞ、」とロリー氏は、左の手を椅子の背から離して、それを烈しくぶるぶる震えながら彼の手を握つてゐる懇願するような指の上に重ねながら、宥めるなだような調子で言つた。——「どうぞお氣を鎮めて下さい、——これは事務なんですから。今申しましたように——」

彼女の様子がひどく彼を不安にさせたので、彼は言葉を切り、どうしようかと迷つたが、また話し出した。——

「今申しましたように、ですね。もしもムシュー・マネットが亡

くなられたのではないとしますと、ですよ。もしもあなたのお父さまが突然に人にも言わずに姿を消されたのだとしますと、です。もしも神隠しか何かのようにされたのだとしますと、です。どんなに恐しい処へ行かれたか推測するのはむずかしくはないが、どんなことをしてもお父さまを探し出すことは出来ないのだとしますと、ね。お父さまには同国人の中に一人の敵があつて、その敵が、この海の向うでわたしが若い時分どんな大胆な人でもひそひそ声で話すことも恐しがつていたということを知つて いるような特権を——例え ばですね、書入れしてない書式用紙にちょっと名前を書き込んで、誰をでも牢獄へどんなに永い間でも押しこめておけるという特権★を——使える人間だつたとしますと、ですね。

お父さまの奥さんに当る人が、王さまや、お妃さまや、宫廷や、僧侶に、何か夫の消息を聞かしてくれるようにと歎願なすつたが、みんな全く何の甲斐かひもなかつたとしますと、ですね。——もしもそうだつたとしますと、そうすると、そのあなたのお父さまの身の上は、ボーヴェーのお医者である、今の不幸な紳士の身の上になるのです。」

「どうかもつとお聞かせ下さいますように。」

「お聞かせいたしますよ。しようとしているところです。あなたは御辛抱きさうぱいがお出来になりますね？」

「今のようなこんな不安な気持でいるのでさえなければ、あたくしどんなことでも辛抱きさうぱいが出来ますわ。」

「あなたは落著いて仰しゃいますし、あなたは落着いて——いらっしゃいますね。それなら大丈夫ですな！」（しかし彼の態度は彼の言葉ほどには安心していなかつた。）「事務ですよ。事務とお考え下さい、——しなければならない事務とね。さて、もしそのお医者の奥さんが、大変気丈夫な勇氣のある御婦人ではありますけれども、お子さんがお生れになるまでにこの事で非常に御心痛になります——」

「その子供と仰しゃいますのは女の子だつたのでござりますねえ

。

「女のお子さんでした。こ——これは——事務ですよ、——御心配なさらないで下さい。お嬢さん、もしそのお気の毒な御婦人が、

お子さんがお生れになるまでに非常に御心痛になりまして、そのために、可哀そうなお子さんにはお父さまはお亡くなりになつたものと信じさせて育てて、御自分の味われたようなお苦しみは幾分でも味わせまいという御決心をなさいましたものとしますと——。いやいや、そんなに跪いたりなすつちやいけません！ 一体どうしてあなたがわたしに跪いたりなぞなさるんです！」

「ほんとのことを。おお、御親切なお情深いお方、どうかほんとのこと！」

「こ——これは事務ですよ。あなたがそんなことをなさるとわたしはまごついてしまいます。まごついていてはわたしはどうして事務を処理することが出来ましよう？ さあさあ、お互に頭を明

晰にしましよう。もしあなたが今、例えはですね、九ペニスの九倍はいくらになるか、あるいは二十ギニーは何シリングかということを、言つてみて頂ければ★、よほど気が引立つんですがねえ。わたししだつてあなたの心の工合にもつともつと安堵が出来るというものですが。」

こう頼んだのに対して直接には答えなかつたけれども、彼女は、彼がごく確かに彼女を起してやつた時に、ジャーヴィス・ロリー氏に多少の安心を与えるくらいに、静かに腰を掛けたし、ずつと彼の手頸を握っていた手を今までよりももつとしつかりさせたのであつた。

「それでよろしい、それでよろしい。さあ、しつかりして！ 事

務ですよ！

あなたは事務を控えているのです。有益な事務をね。

マネット嬢(ミス・マネット)

、あなたの母さんはあなたに對してそういう御方針

をお執りになつたのです。で、お母さんがお亡くなりになり、――

御傷心のためかと思ひますが、――その時あなたは二歳で後に  
お遺されになりましたのですが、お母さんは御自分では何の甲斐(かい)

がなくともお父さまの搜索を決して怠られなかつたのに、あなた

には、お父さまが牢獄の中でももなく死なれたのだろうか、それ

ともそこで永い永い年月(としつき)の間瘦せ衰えていらつしやるのだろう

かと、どちらともはつきりわからずには過すというような黒い雲も

ささずに、花のように、美しく、幸福に、御生長になるようにな

きましたのです。」

こう言いながら、彼は、房々と垂れている金髪を、感に堪えないような憐みの情をもつて見下した。あたかもその髪がもう既に白くなっているのかもしれぬと心の中で思い浮べてもいるかのように。

「御承知のように、御両親には大した御財産はございませんでしたし、お持ちになつていらしたものは皆お母さまとあなたとのお手に入りました。お金かねにしても、その他の何かの所有物にしても、今さら新しく発見されるものは何一つなかつたのです。しかし――」

彼は自分の手頸がいつそうしつかりと握り締められるのを感じたので、言葉を切つた。これまで特に彼の注意を惹いていた、そ

して今では動かなくなっている、額の例の表情は、ますます深まつて苦痛と恐怖との表情になつていた。

「しかしあの方<sup>かた</sup>が見つかつたのです。あの<sup>かた</sup>方は生きてお出でになります。さぞひどく変つていらつしやることでしよう。ほとんど見る影もなくなつておられるかもしません。そんなことのないようと思つてはいるのですが。とにかく、生きておられるのです。あなたのお父さまはパリーで昔の召使の家に引取られてお出でになるので、それでわたしたちはそこへ行こうとしているところなのです。わたしは、出来れば、お父さまであるかどうかを確かめるためにですし、あなたは、お父さまを生命と、愛と、義務と、休息と、慰安とに復<sup>かえ</sup>さしてあげになるためにです。」

身震いが彼女の体に起り、それが彼の体に伝わった。彼女は、まるで夢の中ででも言っているように、低い、はつきりした、怖おじ恐れた声でこう言つた。――

「あたしはお父さまの幽霊に逢いにゆくのですわ！　お逢いするのはお父さまの幽霊でございましょう、――ほんとのお父さまじやなくつて！」

ロリー氏は自分の腕に掴まつてゐる手を静かにさすつた。「さあ、さあ、さあ！　もうわかりましたね、わかりましたね！　一番よい事も一番悪い事ももうすっかりあなたにお話してしまつたのですよ。あなたはあのお氣の毒なひどい目に遭われた方かたのおられるところをさしてよほど来ておられるのです。そして、海路の

旅が無事にすみ、陸路の旅も無事にすめば、すぐにその方の懷しかたなつかし  
いお傍そばへいらっしゃれましよう。」

彼女は、囁き声くらいに低くなつた前と同じ調子で、繰返して言つた。「あたしはこれまでずっと自由でしたし、ずっと幸福でしたのに、でもお父さまの幽靈は一度もあたしのところへ来て下さいませんでしたわ！」

「もう一事だけ申し上げますと、」ロリー氏は、彼女の注意を惹きつけようとする一つの穩かな手段として、その言葉に力を入れて言つた。「あの方かたは見つかりました時には別の名前になつておられました。ほんとうのお名前は、永い間忘れておられたか、それとも永い間隠しておられたのでしょうか。今それがどつちだか尋

ねるということは、無益であるよりも有害でしょう。あの方<sup>かた</sup>が何年も見落されておられたのか、それともずっと故意に監禁されておられたのか、どちらか知ろうとすることも、無益であるよりも有害でしょう。今はどんなことを尋ねるのも、無益どころか有害でしょう。そういうことをするのは危険でしょうから。どこででもどんなのにでも、その事柄は口にしない方がよろしいでしょう。そして、あの方<sup>かた</sup>を——何にしてもしばらくの間は——フランスから連れ出してあげる方がよろしいでしょう。イギリス人として安全なわたしでさえ、またフランスの信用にとつて重要なテルソン銀行でさえ、この件の名を挙げることは一切避けているのです。わたしは自分の身の——りに、この件のことと公然と書いてあ

る書類は一片も持つておりません。これは全然秘密任務なのです。  
 わたしの資格証明書も、記入事項も、覚書も、『甦る』<sup>よみがえ</sup>』といいう  
 行の文句にすっかり含まれているのです。その文句はどんなこと  
 でも意味することが出来るのです。おや、どうしたんですか！  
 お嬢さんは一言も聞いていないんだな！

<sup>ミス・マネット</sup>  
マネット嬢！

全くじつとして黙つたまま、椅子の背に倒れかかりもせずに、  
 彼女は彼の手の下で腰掛けて、全然人事不省になつていた。眼は  
 開いていてじつと彼を見つめており、あの最後の表情はまるで彼  
 女の額に刻み込まれたか烙<sup>きざ</sup>きつけられたかのように見えた。彼女  
 が彼の腕にひどくしつかりと掴まつてゐるので、彼は彼女に怪我  
 させはしまいかと思つて自分の体を引き離すのを恐れた。それで

彼は体を動かさずに大声で助力を求めた。

すると、まるで赭い顔色をして、髪の毛も赭く、非常にぴつたりと体に合っている型の衣服を著て、頭には親衛歩兵の榾型帽、それもずいぶんの榾目のもの★のような、あるいは大きなステイルトン乾酪<sup>チーズ</sup>★のような、實に驚くべき帽子をかぶっているということを、ロリー氏があわてているうちにも認めた、一人の荒っぽそうな婦人が、宿屋の召使たちの先頭に立つて部屋の中へ駆け込んで来て、逞しい手を彼の胸にかけたかと思うと、彼を一番近くの壁に突き飛ばして、その可哀そうな若い淑女から彼を引き離すという問題をすぐさま解決してしまった。

(「これはてつきり男に違いないな！」)とロリー氏は、壁にぶつ

つかると同時に、息もつけなくなりながら考えた。」

「まあ、お前さんたちはみんな何てざまをしてるんだね！」とその女は宿屋の召使たちに向つて呶鳴りつけた。「そんなところに突つ立つてわたしをじろじろ見てなんかいないで、どうしてお薬やなんぞを取りに行かないの？　わたしなんか大して見映えがしやしないよ。そうじやないかい？　どうしてお前さんたちは要るものを取りに行かないんだよ？」　嗅<sup>かぎ</sup>塩<sup>しお</sup>と、お冷<sup>ひや</sup>と、お酢<sup>す</sup>と★を速く持つて来ないと、思い知らしてあげるよ。いいかね！」

それだけの気附薬を取りに皆が早速方々へ走つて行つた。すると彼女はそうつと病人を長椅子に寝かして、非常に上手に優しく介抱した。その病人のことを「わたしの大事な方<sup>かた</sup>！」とか「わた

しの小鳥さん！」とか言つて呼んだり、その金髪をいかにも誇らかに念入りに肩の上に振り分けてやつたりしながら。

「それから、茶色服のお前さん！」と彼女は、憤然としてロリー氏の方へ振り向きながら、言つた。「お前さんは、お嬢さまを死ぬほどびっくりさせずには、お前さんの話を話せなかつたの？」

御覧なさいよ。こんなに蒼いお顔をして、手まで冷くなつていらつしやるじやありませんか。そんなことをするのを銀行家つて言うんですか？」

ロリー氏はこの返答のしにくい難問に大いにまごついたので、ただ、よほどぼんやりと同情と恐縮とを示しながら、少し離れたところで、眺めているより他<sup>ほか</sup>に仕方がなかつた。一方、その力の

強い女は、もし宿屋の召使たちがじろじろと見ながらここにぐずぐずしていようものなら、どうするのかは言わなかつたが何かを「思い知らしてやる」という不思議な嚇おどし文句で、彼等を追つ払つてしまつてから、一つ一つ正規の順序を逐うて病人を回復させ、彼女を宥めなだすか賺すかしてうなだれている頭を自分の肩にのせさせた。

「もうよくなられるでしょうね。」とロリー氏が言つた。

「よくおなりになつたつて、茶色服のお前さんなんかにや余計なお世話ですよ。ねえ、わたしの可愛い綺麗なお方！」

「あなたは、」とロリー氏は、もう一度しばらくの間ぼんやりした同情と恐縮とを示した後に、言つた。「マネット嬢ミス・マネットのお伴をしてフランスへいらつしやるんでしような？」

「いかにもそうありそうなことなのよ！」とその力の強い女が答えた。「でも、もしわたしが海を渡つて行くことに前からきまつてるんなら、天の神さまがわたしが島国しまぐにに生れて来るよう<sup>さ</sup>いこ<sup>う</sup>子をお投げになるとあんたは思いますか？」

これもまたなかなか返答のしにくい難問なので、ジャーヴイス・ロリー氏はそれを考へるために引下ることにしたのであつた。

## 第五章 酒店

大きな葡萄酒の樽が街路に落されて壊れていた。この事故はその樽を荷車から取り出す時に起つたのであつた。樽はごろごろつと転がり落ちて、籠たががはじけ、酒店の戸口のすぐ外のところの敷石の上に止つて、胡桃の殻のようにめちゃめちゃに碎けたのだ。

近くにいた人々は皆、自分たちの仕事を、あるいは自分たちの無為を一時中止して、その葡萄酒を飲みにその場所へ走つて行つた。街路のごつごつした不揃いな敷石は、四方八方に向いていて、それに近づくあらゆる生物いきものを殊更ことさらに跛びっこにしてやろうというつ

もりのもののように思われたが、その敷石が流れた葡萄酒を堰き止めて、小さな水溜りを幾つも作っていた。その水溜りは、それぞれ、その大きさに応じて、そこへ来て押し合いへし合いしている群集に取巻かれた。男たちの中には、跪いて、両手を合せて掬つて、その葡萄酒が指の間からすっかりこぼれてしまわぬいうちに、自分で啜つたり、自分の肩の上に身を屈めている女たちにも啜らせてやろうとしたりする者もあつた。中には、男も女も、欠けた陶器の小さな湯呑で水溜りを掬つたり、女たちの頭から取つた手拭までも浸して、それを幼児の口の中へ絞り込んでやつたりする者もあつた。また、葡萄酒が流れてゆくのを堰き止めようと、小さな泥の堤防を築く者もいた。上方の高い窓から見物してい

る者たちに教えられて、あちこちと走りつて、新しい方向に流れ出してゆく葡萄酒の小さな流れを遮り止める者もいた。渣滓の滲み込んでいるじくじくした樽の破片にかじりついて、酒で朽ちたじめじめした木片をきもうまそうに舐めたり、噛みさえしたりする者もいた。葡萄酒の流れ去る下水は一つもなかつた。それで、それがすっかり吸い上げられたばかりではなく、それと一緒にずいぶんたくさん泥までが吸い上げられたので、この街には市街掃除夫がいたのではなかつたかと思われたくらいであつた。もつとも、これは、誰でもこの街のことをよく知つている人が、そういう市街掃除夫などという者が奇蹟的にもここに現れるということを信ずることが出来たとしてのことであるが。

笑い声と興がつてゐる声——男たちや女たちや子供たちの声——の甲高い響が、この酒飲み競争の続いている間、その街路に鳴り響いていた。この競技には荒っぽいところがほとんどなくて、ふざけたところが多くあつた。それには特別な仲のよさが、一人一人が誰か他の者と仲間になりたいという目立つた意向があつて、そのために、酒に運のよかつた連中や気さくな連中の間ではとりわけ、剽<sup>ひょうきん</sup>軽に抱き合つたり、健康を祝して飲んだり、握手をしたり、さては十二人ばかりが一緒になつて手を繋ぎ合つて舞踏をするまでになつたのであつた。ところが、葡萄酒がなくなつてしまつて、それのごくたつぱりあつた場所までが指で引搔かれて焼網模様をつけられる頃になると、そういう騒ぎは、始つた時と

同じように急に、ばつたりと止んでしまつた。切りかけていた薪に自分の鋸を差したまま放つて来た男は、またその鋸を挽き出した。熱灰の入つてゐる小さな壺で自分自身か自分の子供かの手足の指の凍痛を和げようとしてみていたのを、その壺を戸口段のところに放つておいて来た女は、壺のところへ戻つた。穴蔵から冬の明るみの中へ出て來た、腕をまくつて、髪を縛らし、蒼白な顔をした男たちは、立去つて再び降りて行つた。そして、日光よりももつとこの場にはふさわしく見える陰暗がこの場面に次第に募つて來た。

その葡萄酒は赤葡萄酒であつて、それがこぼれたパリーの場末のサン・タントワヌ★の狭い街路の地面を染めたのであつた。そ

れはまた多くの手と、多くの顔と、多くの素足と、多くの木靴とを染めた。薪を挽いている男の手は、その薪材に赤い痕を残した。自分の赤ん坊の守をしている女の額は、自分の頭に再び巻きつけた檻襷布片の汚染で染められた。樽の側板にがつがつしがみついていた連中は、口の周囲に虎のような汚斑をつけていた。そういうのに口を汚している一人の脊の高い剽輕者が、その男の頭は寝帽にしている長いきたない袋の中に入っていると言うよりも、それからはみ出ていると言つた方がよかつたが、泥まみれの酒の渣滓に浸した指で、壁に、血——となぐり書きした。

やがて、そういう葡萄酒もまたこの街路の敷石の上にこぼされる時が、またそれの汚染がそこにある多くのものを赤く染める時

が、来ることになつていたのである★。

さて、一時の微光のためにサン・タントワヌの聖なる御顔から  
 ★払い除けられていた暗雲が、またサン・タントワヌにかかつて  
 しまつたので、そこの暗さはひどくなつた。——寒氣と、汚穢と、  
 疾病と、無智と、窮乏とが、その聖者の御前に侍している貴族で  
 あつた。——いずれも皆非常な権勢のある貴人であつたが、とり  
 わけそうなのはその最後の者であつた。老人を碾いて若者にした  
 というお伽話の碾白<sup>ひきょうす</sup>とは確かに違つた碾白で恐しくも碾きに碾  
 かれて來た人間の標本が、あらゆる隅々に震えていた。あらゆる  
 家々の戸口を出入していた。あらゆる窓から覗いていた。風にあ  
 おられているあらゆる形ばかりの衣服を著ながらうろうろしてい

た。彼等を捏ね潰した碾臼は、若者を碾いて老人にする碾臼であった。子供たちまでが年寄のような顔と沈んだ声とをしていた。

そして、その子供たちの顔にも、大人の顔にも、年齢のあらゆる皺の中に鋤き込まれてからまた現れて来ているのは、飢餓という目標であった。それは至る処に蔓つていた。飢餓は竿や綱にぶら下つてゐるみすぼらしい衣服の中に入つて高い家々から突き出されていた。飢餓は藁と檻樓と木材と紙とで補片つぎをあてられてそのままの家々の中へ入つていた。飢餓は例の男が鋸で挽き切るわずかな薪のどの屑の中にも繰返された。飢餓は煙の立たぬ煙突からじつと見下していたし、塵芥の中にさえ食えるものの残屑一つない穢きたない街路から飛び立つた。飢餓はパン屋の棚の少しばかり並べてあ

る粗悪なパンの小さな一塊ずつに書いてある文字であつた。腸詰屋では売り出してある犬肉料理の一つ一つに書いてある文字であつた。飢餓は回転している円筒の中の焼栗の間でその干涸びた骨をがらがら鳴らしていた。飢餓は数滴の油を不承不承に滴らして揚げた皮ばかりの馬鈴薯の薄片の入つてゐるどの一文皿の中にも粉々に切り刻まれていた。

飢餓の住所はすべてのものがそれに適合していた。気持の悪いものと悪臭とのみちていて狭い曲りくねつた街路、それから幾つも岐れている別の狭い曲りくねつた街路、そのどこにもかしこにも襤襷わかつと 寝ナイトキャップ 帽ナイトキャップ との人間が住んでいて、どこにもかしこにも襤襷と 寝 帽 との臭いがして、目に見えるすべてのものが険

悪そうに見える考え方でいるような顔付をしている。人々の狩り立てられたような様子の中にも、いよいよ追い詰められるとなると振り返つて反抗するかもしだぬという野獸の気持がまだ幾分かはあつた。彼等は銷沈していくこそそしてはいたけれども、焰の眼は彼等の間にはなかつた。また、彼等の抑えつけている感情のために血の氣の失せた、きつと結んでいる脣もないではなかつた。また、彼等が自分でかけられるか、それとも人にかけてやることを考えている、あの絞首台の繩に似たのに顰めていひたいる額もないではなかつた。商売の看板は（そしてそれは店の数とほとんど同じほどあつたが）、いずれも皆、窮乏の物凄い図解であつた。牛肉屋や豚肉屋は肉の一番脂肪分の少い骨の多い下等な

ところだけを描いたのを出していった。パン屋は一番粗末なけちなパン塊を描いて出していた。酒店で酒を飲んでいるところとしてぞんざいに画いてある人々は、水っぽい葡萄酒やビールの量りの悪いことをぶつぶつ言いながら、凄い顔をして互にひそひそ話をしていた。道具類と兎器類とを除いては、景気よく描き出されているものは何一つとしてなかつた。ただ、刃物師の小刀や斧は鋭利でぴかぴかしていたし、鍛冶屋の鉄鎌はどつしりと重そうであつたし、鉄砲鍛治の店にある商品はいかにも人を殺しそうであつた。鋪道のあの人を跛びっこにしそうな石には、泥水の小さな溜りはたくさんあつても、別に歩道はなくて、家々の戸口のところでいきなりに切れていた。その埋合せに、下水溝が街路の真中を流れて

いたが、——それはともかく流れる時だけである。流れる時とい  
うのはただ豪雨の後ばかりで、その時にはたびたび矯激な発作で  
も起したように家々の中へまで流れ込むのだつた。街々を突つ切  
つて、遠く間を隔てて、不恰好な街灯が一つずつ、滑車綱で吊し  
てあつた。日が暮れて、点灯夫がそれを下し、火を点じて、また  
吊し上げると、弱い光を放っている数多の仄暗い灯心が、病みほ  
うけたように頭上で揺れ動いて、あたかも海上にあるようであつ  
た。實際それらは海上にあるのであつた。そして船と船員とは嵐  
に遭う危険に臨んでいたのであつた★。

なぜなら、この界隈の瘦せこけた案山子たち★が、する仕事も  
なく腹を空かしながら、永い間点灯夫のすることを眺めているう

ちに、その点灯夫のやり方を改良して、自分たちの境涯の暗闇くらやみを明るくするために、その滑車綱で人間をひっぱり上げようといふ考えを思い付く★時が、やがて来ることになつていてからである。しかし、その時はまだ来てはいなかつた。そして、フランスを吹きわたるどの風も徒らにその案山子たちの檻樓をはたはたと振り動かすだけであつた。なぜなら、鳴声も羽毛も美しい鳥ども★は一向に自らを戒めるところがなかつたからである。

さつきの酒店は角店かどみせで、外見や格式が他の大抵の店よりも立派であつた。その酒店の主人は、黄ろいチヨツキに緑色のズボンを著けて、店の外に立つて、こぼれた葡萄酒を飲もうと争つてゐる有様を傍観していた。「こいつあおれの知つたことじやねえや

。」と彼は、最後に肩を一つ竦め★ながら、言つた。「市場から来た連中がしでかしたんだからな。奴らにもう一つ持つて来させりやいい。」

その時、ふと彼の眼が例の脊の高い剽輕者があの駄洒落だじやれを書き立てているに止つたので、彼は路の向側のその男に声をかけた。

「おいおい、ガスパール、お前そこで何してるんだい？」

その男は、そういう手合のよくやるよう、さも意味ありげに自分の駄洒落だじやれを指し示した。ところが、それが的まとが外れて、すっかり失敗した。これもそういう手合にはよくあることである。

「どうしたんだ？　お前は気違けちい病院行きの代物か？」と酒店の

主人は、道路を横切つて行つて、一掴みの泥をすくい上げ、それを例の洒落の落書の上になすりつけて消しながら、言つた。「どうしてお前は大道なんかで書くんだ？ こんな文句を――さあ、おれに言つてみろ――こんな文句を書き込む場所ほかが他にないのか？」

こう言い聞かせながら、彼は汚れていない方の手を（偶然にかもしれないし、そうではないかもしだれぬが）その剽輕者の胸のところに落した。剽輕者はその手を自分の手でぽんと敲いて、ぴよいと身軽く飛び上り、珍妙な踊つているような恰好で下りて来ながら、酒で染つた自分の靴の片方を、足からひよいと振り脱いで手に受け止め、それを差し出して見せた。そういう次第で、その男

は、飽くことのない悪戯好きであることは言うまでもないが、  
極端な悪戯好きの剽輕者らしく見えた。

「靴を穿きな、靴を穿きな。」ともう一人の方が言つた。「酒は酒と言つて、それで止めとくんだぞ。」そう忠告しながら、彼は自分の汚れた方の片手をその剽輕者の衣服で拭いた。——その男のせいでその手を汚したのだというので、全くわざとやつたのだ。それから、道路を再び横切つて、酒店へ入つた。

この酒店の主人というのは、猪頸の、勇敢そうな、三十歳くらいの男であつた。そして熱しやすい気性の人間に違ひなかつた。というのは、身を斬るような寒い日だつたのに、彼は上衣を著ないで、それを肩へ投げかけていたからである。シャツの袖もまく

し上げてあつて、日に焦やけた腕は肱のところまでむき出しになつていた。それから、頭にも、自分自身のくるくると縮れている短い黒っぽい髪の毛より他ほかには、何もかぶつていなかつた。彼は總体に浅黒い男で、感じのいい眼をしており、その眼と眼との間にかなり大胆な豪放さがあつた。概して愛嬌のよさそうな男であるが、執念深そうでもある。明かに強い決意と頑固な意思とを持つた男だ。右側にも左側にも深淵のある隘路を駆け降りて来る時には出くわしたくない男である。というのは、どんなことがあってもこの男を後戻りさせることは出来ないだろうから。

彼の妻のマダーム・ドフルジユは、彼が店に入つて来た時は、店の中の勘定台の後に腰掛けていた。マダーム・ドフルジ

ユは彼とほぼ同年輩のがつしりした婦人で、滅多に何でも見ない  
 ように思われる油断のない眼と、たくさん指環を嵌めた大きな手  
 と、きりつとした顔と、きつい目鼻立ちと、非常に落著き払つた  
 態度とをしていた。マダーム・ドファルジユには、彼女なら自分  
 の管理しているどの勘定ででも自分の気のつかない間違いを滅多  
 にやることはあるまいと誰でもが予言出来そうな、一種の特性が  
 あつた。マダーム・ドファルジユは寒がりだったので、毛皮にく  
 るまつて、その上、首の周りには派手な肩掛ショールをぐるぐる巻きつ  
 けていた。もつとも、それも大きな耳環が隠れてしまうほどには  
 していなかつたが。彼女の編物がその前にあつたが、彼女はそれ  
 を下に置いて爪楊枝で歯をほじくつていた。左の手で右の脳を支

えながら、そうして歯をほじくついて、マダーム・ドファルジユは、自分の御亭主が入つて来た時には何も言わずに、ただ一度だけちよつと咳払いをした。この咳払いは、彼女が爪楊枝を使いながら黒くくつきりとした眉毛をわずかばかり揚げることと共に、彼女の夫に、彼が路の向側まで行つていた間に誰か新しいお客様が立寄つていなか、店を見 してお客様の間を探した方がいいだろう、ということを暗示したのである。

そこで酒店の主人は眼をぐるぐると してみると、その眼は、やがて、一隅に腰掛けている一人の中年過ぎの紳士と一人の若い淑女とに止つた。店には他にも客がいた。ほかかるた 骨牌をしているのが二人、ドミノーズ★をしているのが二人、勘定台のところに立つて

わざかな葡萄酒を永くかかつてちびちび飲んでいるのが三人いたのだ。勘定台の後へ つて行く時に、彼は、その中年過ぎの紳士が若い淑女に「これが例の男ですよ。」と目色で言つたのを見て取つた。

「一体全体お前さんたちはそんな処で何をしてるんだい？」とムシュー・ドファルジユは心の中で言つた。「こちとらはお前さんたちなんか知らねえや。」

しかし、彼はその二人の見知らぬ人には気がつかぬ風をして、勘定台のところで飲んでいる三人組の客と談話をし始めた。

「どうだね、ジャーグ★？」とその三人の中の一人がムシュー・ドファルジユに言つた。「こぼれた葡萄酒はみんな飲んじまつた

かい？』

「一滴も残さずによ、ジャーグ。」とムシュー・ドファルジユは答えた。

こんな風に洗礼名★の交換がすんだ時、マダーム・ドファルジユは、爪楊枝で歯をほじくりながら、また一つ咳払いをし、また少し眉毛を揚げた。

「あのみじめな獸たちは大抵は、」と三人の中の二番目の者がムシュー・ドファルジユに向つて言つた。「葡萄酒の味を知るなんてこたあ滅多にねえんだからな。いや、葡萄酒だけじゃねえ、黒パンと死ぬこととの他のものの味を知るつてことは滅多にねえんだ。そうじやねえか、ジャーグ？」

「そうだよ、ジャーグ。」とムシュー・ドファルジュは返答した。  
 こうして二度目にその洗礼名を交換している時に、マダーム・  
 ドファルジュは、極めて落著き払つてやはり爪楊枝を使いながら、  
 また一つ咳払いをし、また少し眉毛を揚げた。

今度は、三人の中の最後の者が、空からになつた酒を飲む器うつわを下に  
 置いて脣をぴちやぴちや舐めながら、自分の言うことを言い出した。

「ああ！ それよりはもつと悪いんさ！ ああいう可哀そうな畜  
 生にがどもがしそつちゅう口にしてるのは苦にがい味ばかりなんだ。そし  
 て奴らはつらい暮くらしをしているんだよ、ジャーグ。おれの言う通  
 りだろ、ジャーグ？」

「お前の言う通りだよ、ジャーグ。」というのがムシュー・ドナルジユの返事であつた。

この三度目の洗礼名の交換が終つた瞬間に、マダーム・ドナルジユは爪楊枝をやめて、眉毛をきつと上げ、自分の座席で少しきらきら音をさせた。

「待てよ！ うん、なるほど！」と彼女の夫は呟いた。「諸君、  
——わしの家内だ！」

三人の客はマダーム・ドナルジユに向つて自分たちの帽子を脱いで、それを大袈裟に振り した。彼女は、頭をぐるりと向け、彼等をちらつと見て、彼等の敬礼に報いた。それから、彼女は何気ない風に店の中をちらりと見 し、見たところ非常に平静な沈

著な様子で自分の編物を取り上げて、余念なく編み出した。

「諸君、」ときらきら光る眼を注意深く彼女に注いでいた彼女の夫は、言つた。「さよなら。あの独身者向きに設備してある部屋は、それ、君たちが見たいと言つて、さつきわしがちよつと表へ出た時に尋ねていたあの部屋だが、あれは六階にあるんだ。そこへゆく階段の出入口は、わしの家の窓際の、この左手にくつついた、「と手で指しながら、「小さな中庭のところにあるよ。しかし、今思い出したんだが、君たちの中の一人はあすこへ行つたことがあるんだから、道案内は出来る訳だね。じゃ、諸君、さようなら！」

その三人の客は飲んだ葡萄酒の勘定を払つて、そこから出て行

つた。ムシュー・ドファルジユの眼は編物をしている妻をじつと見守っていたが、その時、例の紳士がさつきの隅っこから進み出で、ちよつと一言お伺いしたいと言つた。

「お安いことで。」とムシュー・ドファルジユは言つて、その紳士と一緒に戸口のところまで静かに歩を運んだ。

二人の会談は極めて短かつたが、また極めてときぱきしたものだつた。ほとんど最初の一語で、ムシュー・ドファルジユははつとして非常に注意深く耳を傾けた。それが一分と続かないうちに、彼は頷いて出て行つた。すると紳士は例の若い淑女を手招きして、その二人もまた出て行つた。マダーム・ドファルジユは眉毛も動かさずに指を敏捷に動かしながら編物をして、何も見ようとしな

かつた★。

ジャーヴィス・ロリー氏とマネット嬢とは、こうしてその酒店から出て来ると、ムシュー・ドファルジユがつい先刻彼の他の客たちに教えてやつたあの階段の出入口のところで彼と一緒になつた。そこは悪臭のある小さな暗い中庭に向いていて、多数の人々の住んでいる積み重なつたたくさんの家々の共同の入口になつていた。ゆかがわら床 瓦を鋪いた薄暗い階段へと続く床瓦を鋪いた薄暗い入口のところで、ムシュー・ドファルジユは昔の主人の息女に対して片膝を曲げて身を屈め、彼女の手を自分の脣にあてた。それは優雅な行為であつたが、しかしそのやり方はちつとも優雅ではなかつた。数秒の間に極めて著しい変化が彼に起つていたのだ。

彼の顔には愛嬌のいいところがなくなつたし、開けつ放しの様子も少しもなくなり、寡言な、怒りっぽい、危険な人間になつていった。

「ずいぶん高いんです。少々厄介ですよ。ゆつくりかかつた方がいいでしよう。」三人が階段を昇りかけた時に、ムシユー・ドフアルジユはきつとした声で口リー氏にこう言つた。

「あの方は独りでおられるのですか？」と後者が囁いた。

「独りでですと！　お気の毒に、あの方と一緒にいるなんて者はいやしませんよ。」と今一人の方が同じ低い声で言つた。

「では、あの方はしそつちゅう独りでおられるんですか？」

「そうです。」

「あの方自身のお望みで？」

「あの方自身の余儀ない事情ででさ。の人たちがわつしを見つけ出して、わつしがあの方を引取るかどうか、またわつしが危険を冒しても慎重にやつてくれるかどうかと聞きただした後で、わつしは初めてあの方にお目にかかつたんですが、——その時の方は独りであつたように、今でもそんなんですよ。」

「ひどく変つておられるでしような？」

「変つてるですって！」

酒店の主人は立ち止つて、片手で壁をどんどん叩き、恐しい呪いの言葉を呴いた。どんな露骨な返事でもこの半分の力をこめることも出来なかつたろう。ロリー氏の気分は、彼が二人の同伴者と

共にだんだんと昇つてゆくにつれて、だんだんと沈んでゆくのであつた。

パリーの古くからの込んでいる地域にある、そういう階段や、その附属物は、今でもずいぶんひどいものであろう。が、その当時は、それは、そういうものに慣れて無感覚になつていない人の感覚には実に厭わしいものだつた。大きな不潔な巣のような一つの高い建物の内部にある一つ一つの小さな住居——言葉を換えて言えば、共同の階段に向いている一つ一つの戸口の内にある一室ないし教室——は、銘々の階段の中休み段に銘々の塵芥を山のように積み重ねておき、その上、残りの塵芥を窓から抛り出した。こうして出来たどうにも手のつけようのない始末に負えぬ腐

敗の堆塊は、たとい貧窮と剥奪とがそれの無形の不潔物を空氣に多量に含めなくてさえも、あたりの空氣を十分汚したであろう。そこへその二つの悪い原因が一緒になつて加わつたものだから、そこの空氣はほとんど我慢の出来ぬものになつていた。こういう空氣の中を、塵埃と毒氣との急勾配の暗い堅坑を通つて、路は続いているのであつた。ジャーヴイス・ロリー氏は、刻一刻とひどくなつて来る自分自身の心騒ぎと、自分の若い同伴者の興奮とに負けて、二度も立ち止つて休息した。その立ち止つたのは二度とも陰気な格子のところであつた。その格子からは、少しでも腐敗せずに残つてゐる衰えたよい空氣は皆逃げ出して、すべての悪くなつた不健康な瓦斯体が這い込んで来るようと思われたのであつ

た。その鋸びた鉄棒の間から、ごちやごちやになつてゐる附近の様子が、眼で見えるというよりも、舌で味われるようであつた。そして、ノートル・ダム★のかの二つの大きな塔の頂よりこつちにある、あるいはそれよりも低いところにある区域内には、健康新生活や健全な熱望などの見込をちよつとでも持つてゐるもののは何一つとしてないのであつた。

遂に、階段のてつぺんに達し、彼等は三度目に立ち止つた。が、屋根裏部屋の階まで行くには、今までよりもつと勾配の急な、幅の狭い、もう一つ上の階段をまだ昇らなければならなかつた。

酒店の主人は、あの若い淑女に何か質問をされるのを恐れてでもいるように、絶えず少し先に立つて歩き、絶えずロリー氏の歩く

側を進んで來たが、このあたりでくるりと向き直り、肩にかけていた上衣のポケットの中を入念に探つて、一つの鍵を取り出した。「じゃ、君、扉には錠を下してあるんですね？」とロリーフィーは意外に思つて言つた。

「ええ。そうです。」というのがムシュー・ドフルジユの厳しい返事であつた。

「君はあの不仕合せな方かたをそんなに閉じこめておくのが必要だと思うのですね？」

「わっしは鍵をかけておくのが必要だと思うんです。」ムシュー・ドフルジユはロリー氏の耳のもつと近くで囁いて、ひどく顔しかを蹙めた。

「どうしてです？」

「どうしてですって！ もし扉<sup>ドア</sup>が開け放しになつていようものなら、あの人はあんなに永い間押しこめられて暮して来られたので、怖<sup>こわ</sup>がつて——暴れて<sup>あば</sup>——われとわが身をすたずたに引き裂いて——死んでしまうか——どんな悪いことになるかわからないからでさ。」

「そんなことがあり得るだろうか？」と口リー氏は大声で言つた。  
 「そんなことがあり得るだろうかつてんですか！」とドフアルジユは苦々<sup>にがにが</sup>しく言い返した。「そうですよ。われわれが美しい世の中に住んでいる時に、そんなことは実際あり得るのです。また、  
 その他のそういうようなことがたくさんあり得るんです。あり得<sup>ほか</sup>

るだけじゃない。現にあるのです、——いいですか、あるんです  
よ！——あの空の下で、毎日毎日ね。悪魔万歳だ。さあ、行き  
ましょーか。」

この対話はごく低い囁き声で行われたので、その一語も若い淑女の耳には達しなかつた。けれども、この時分には彼女は強烈な感動のためにぶるぶる震え、彼女の顔には深い不安と、とりわけ憂慮と恐怖とが表れていたので、ロリー氏は元氣づかせる一二語を言うのを自分の義務と感じた。

「しつかりなさい、お嬢さん！ しつかりして！ 事務ですよ！

一番つらいことはじきにすんでしまいましょー。ただ部屋の戸口を跨ぐだけのことです。そうすれば一番つらいことはすんでし

まうのですよ。それからは、あなたがあの方に對して持つてお出でになるあらゆるよいこと、あなたがの方に對して持つてお出でになるあらゆる慰安、あらゆる幸福が始まるのです。ここにおられるわたしたちの親切な友達にそちら側から力を藉してもらいましょう。それで結構、ドナルジユ君。さあ、さあ。事務ですよ、事務ですよ！」

彼等はゆっくりとそつと上つて行つた。その階段は短くて、彼等はまもなく頂上へ著いた。そこへ来ると、そこで階段が急に一つ曲つていたので、彼等には突然三人の男が見えるようになつた。その三人は一つの扉の脇にぴつたり寄り添うて頭を屈めていて、壁にある隙間か穴から、その扉のついている室の中を熱心に覗き

込んでいるのだつた。足音が間近に迫つて来るのを聞くと、その三人の者は振り向いて、立ち上つた。見ると、それはさつき酒店で酒を飲んでいたあの同一の名の三人であつた。

「わつしはあなた方が訪ねてお出でなすつたのにびっくりして、あの連中のことを忘れてましたよ。」とムシュー・ドファルジユは弁明した。「おい、君ら、あつちへ行つてくれ。わしたちはここで用事があるんだから。」

三人の者は傍をすうつと通り抜けて、黙つたまま降りて行つた。  
 その階には他に扉<sup>ほか</sup><sub>ドア</sub>が一つもないようであつたし、自分たちだけになると酒店の主人はその扉の方へ真直に歩いてゆくので、ロリ一氏は少しむつとして囁き声で彼に尋ねた。――

「君はムシュー・マネットを見世物にしてるのかね？」

「わっしは、選ばれた少数の者に、あなたが御覽になつたようなやり方で、あの人を見せるのです。」

「そんなことをしていいものですかな？」

「わっしはいいと思っています。」

「その少数の者というのはどんな人たちです？　君はその人たちをどうして選ぶのですか？」

「わっしは、わっしと同じ名の者を——ジャークつてのがわっしの名ですが——ほんとうの人間として選ぶんです。そういう連中には、あの人を見せてやることはためになりそうなんでね。が、もう止しときましょう。あなたはイギリス人だ。だからそんなこ

とは別問題です。どうか、ほんのちょっと、そこで待つてて下さい。」

二人に後に下つてゐるようとに諭す<sup>さと</sup>ような手振りをしながら、彼は身を屈めて、壁の隙間から覗いて見た。ほどなく再び頭を揚げると、彼は扉<sup>ドア</sup>を二度か三度叩いたが、——それは明かにそこで物音を立てるだけの目的でしたのであつた。それと同じ目的で、鍵を扉<sup>ドア</sup>にあてて三四度ずうつと引き、その後で、それを不器用に錠の中へ挿し込み、出来るだけがちやがちやさせながらそれをした。

扉<sup>ドア</sup>は彼の手でゆっくりと内側へ開き、彼は室内を覗き込んで何かを言つた。すると弱々しい声が何かを答えた。どちら側からも

ただの一言以上はしゃべらなかつたに違いない。

彼は肩越しに振り返つて、二人に入るようになると手招きした。口  
リーエは自分の片腕を令嬢の腰にしつかりと して、彼女を支え  
た。彼女がぐつたりと倒れかかるように感じたからである。

「こ——こ——これは——事務ですよ、事務ですよ！」と彼は励  
ましたが、その頬には事務らしくもない一滴の涙が光つていた。

「お入りなさい、お入りなさい！」

「あたくしあれが怖いのです。」と彼女は身震いしながら答えた。  
「あれとは？ 何のことです？」

「あの方のかたことです。あたくしの父のこと。」

彼女はそういう様子だし、案内者は手招きしているので、幾分

やけ氣味になつて、彼は自分の肩の上でぶるぶる震えている彼女の腕を自分の頸にひつかけ、彼女を少し抱え上げるようにして、彼女をせき立てて室内へ入つた。彼は扉のすぐ内側のところで彼女を下し、自分にしがみついている彼女を支えた。

ドナルジユは鍵を引き出し、扉を閉め、内側から扉に錠を下し、再び鍵を抜き取つて、それを手に持つた。こういうことを皆、彼は、順序正しく、また、立てられるだけの騒々しい荒々しい音を立て、やつたのであつた。最後に、彼は整然たる足取りで室を横切つて窓のあるところまで歩いて行つた。彼はそこで立ち止つて、くるりと顔を向けた。

薪などの置場にするために造られたその屋根裏部屋は、薄暗く

てぼんやりしていた。何しろ、そこの屋根窓型の窓というのは、  
 実際は、屋根に取附けた扉であつて、街路から貯蔵物を釣り上げ  
 るのに使う小さな起重機クレーンがその上に附いていた。硝子は嵌めてな  
 く、フランス風の構造の扉ならどれも皆そうなつているようだ。  
 二枚が真中で閉まるようになつていて、寒気を遮るために、この  
 扉の片側はぴつたりと閉めてあり、もう一方の側はほんのごく少  
 しだけ開けてあつた。そこからわずかな光線が射し込んでいるだけ  
 だつたので、最初入つて来た時には何を見るにも困難であつた。  
 そして、こういう薄暗がりの中で何事でも精密さを要する作業をする能力は、どんな人間にしてもただ永い間の習慣によつてのみ徐々に作り上げることが出来るだけであつたろう。しかるに、

そういう種類の作業がその屋根裏部屋で行われていたのであつた。  
というのは、一人の白髪の男が、戸口の方に背を向け、酒店の主人  
が自分を見ながら立っている窓の方に顔を向けながら、低い腰ベ  
掛台ンチに腰掛けて、前屈みになつてせつせと靴を造つていたからで  
ある。

## 第六章 靴造り

「今日は！」とムシュー・ドフルジユは、靴を造るのに低く屈んでいる白髪の頭を見下しながら、言つた。

その頭はちよつとの間揚げられ、そして、ごく弱々しい声が、あたかも遠くで言つているかのように、その挨拶に答えた。――  
「今日は！」

「相変らず精が出るようですね？」

永い間の沈黙の後に、頭はまたちよつとの間上げられ、さつきの声が答えた。「はい、――仕事をしております。」今度は、顔

が再びがくりと垂れる前に、やつれた両眼が問いかけた人をちょっと見えた。

その声の弱々しさは哀れでもあり物凄くもあつた。幽閉と粗食も確かにそれに与つてはいたろうけれども、それは肉体的の衰弱から来る弱々しさではなかつた。その悲惨な特性は、それが孤獨でいて声を使うことがなかつたことから来る弱々しさであるといふことであつた。その声はずつとずつと以前に立てた音声の最後の弱い反響のようであつた。それは人間の声らしい生氣ある響をすつかり失つているので、かつては美しかつた色彩が色褪せて見る影もない薄ぎたない汚染しみになつてしまつたような感じを与えるのであつた。それは非常に沈んだ抑えつけられた声なので、ま

るで地下の声のようであつた。それは望みの絶えた救われない人間をよく表して**あらわ**いて、ちょうど、飢えた旅人が、曠野の中をただ独りさまようて疲れ果て、行き倒れて死ぬ前に、故郷と近親の者とを思い出す時の声はこうでもあろうかと思われるくらいであつた。

無言の作業の数分間が過ぎた。それから例のやつれた眼が再び見上げた。それは、幾分でも興味や好奇心からではなく、その眼の見て知っている唯一の訪問者が立っていた場所から、まだその人が立去つていなことを、予め、ぼんやりと無意識に知覚したからであった。

「わたしはね、」とその靴造りからじつと眼を放さずにいたドフ

アルジュが言つた。「ここへもう少し明りを入れたいんですけどね。もう少しくらいなら我慢が出来ましょうね?」

靴造りは仕事を止めた。耳をすましているようなぼんやりした様子で、自分の一方の側の床を見た。<sup>や</sup>それから、同じように、もう一方の側の床<sup>ゆか</sup>を見た。<sup>や</sup>それから、話しかけた人を仰いで見た。

「何と仰しやいましたか?」

「あなたはもう少しくらいの明りは我慢が出来ましょうね?」

「あんたが入れるというなら、わたしは我慢しなけりやならん。」

(その最後の言葉にほんのごくわずかばかりの力を入れて。)

開いている方の片扉が更にもう少し開けられ、差当りその角度で動かぬようにされた。幅の広い光線が屋根裏部屋の中へさつと

射し込み、その靴工がまだ仕上らぬ靴を膝の上に載せたまま働く手を休めている姿を見せた。彼の二三の普通の道具と、鞣<sup>なめしがわ</sup>皮のさまざまの切屑とが、彼の足もとや腰掛台<sup>ベンチ</sup>の上に散らばつていた。彼は、ぎざぎざに刈つた、しかしさほど長く延びていない白い鬚と、肉の落ちた顔と、非常に光る眼をしていた。その眼は、よし事実大きくなかったにしても、まだ黒い眉毛ともじやもじやの白髪の下で、肉が落ちて痩せこけた顔のために大きく見えたであろう。ところが、それは生れつき大きかつたので、異様に大きく見えた。黄ろいぼろぼろになつたシャツの咽<sup>のど</sup>もとが開いていて、体の萎びて痩せ衰えているのが見えた。彼の体も、古ぼけた麻布の仕事服も、だぶだぶの靴下も、身に著けているすべてのひ

どい檻襷ぼろ著物も、永い間じかに日光と外氣とにあたらなかつたために、すっかり色が褪せて、一様にくすんだ羊皮紙のような黄色になつてゐるので、どれがどれだか見分けもつきかねるくらいであつた。

彼は片手を自分の眼と光との間に揚げていたが、その手の骨までが透き通つて見えるように思われた。仕事の手を休めたまま、じつとぼんやりした眼付をしながら、彼はそうして腰掛けていた。彼は、音声を場所と結びつける習慣を失つてしまつたかのように、最初に自分のこちら側、次にあちら側と見下してからでなければ、決して自分の前にいる者の姿を見ないのであつた。まずこんな風にきよろきよろして、口を利くのも忘れてからでなければ、決し

て口を利かないのであつた。

「<sup>きょう</sup>今日のうちにその一足の靴を仕上げようというんですか？」と  
ドファルジユは、ロリー氏に前へ出るようになると手招きしながら、  
尋ねた。

「何と仰しゃいましたかな？」

「<sup>きょう</sup>今日の中にその一足の靴を仕上げるつもりなのですか？」

「仕上げるつもりだということはわたしには言えません。仕上る  
だろうと思うだけです。わたしにはわかりません。」

しかしその質問は彼に仕事のことを思い出させ、彼は再び身を  
屈めて仕事にかかつた。

ロリー氏は、令嬢を扉<sup>ドア</sup>の近くに残して、無言のまま前へ出て来

た。彼がドナルジュの傍に一二分間ばかりも立っていた頃、靴造りは顔を上げて見た。彼は別の人間の姿を見ても別に驚いた様子は見せなかつた。ただ、その姿を見ると彼の片方の手のぶるぶるしている指が脣にふらふらとあてられ（彼の脣も爪も同じ蒼ざめた鉛色をしていた）、それからやがてその手はばたりと仕事のところへ落ち、彼はもう一度靴の上へ身を屈めた。この見上げるのとこれだけの動作をするのとはほんのしばらくしかからなかつた。

「そら、あなたのところへお客様ですよ。」とムシュー・ドナルジユが言つた。

「何と仰しやいましたか？」

「お客様が来ていらっしゃるよ。」

靴造りは前のように顔を上げて見たが、しかし仕事から手を離さなかつた。

「さあ！」とドファルジユが言つた。「ここに、出来のよい靴を見ればすぐおわかりになる方が来てお出でになるのだ。お前の拵えているその靴をこの方にお目にかけなさい。旦那<sup>ムシユ</sup>、それを取つてみて下さい。」

ロリーコンティエはそれを手に取つた。

「この方に、それがどんな種類の靴か、また製造者の名前は何と  
いうのか、申し上げなさい。」

いつもよりもつと永い間をおいてから、靴造りはこう答えた。

「あんたのお尋ねになりましたのはどんなことだつたかわたしは忘れました。何と仰しやいましたのですか？」

「この方かたの御参考に靴の種類を説明してあげることが出来ないか？」と言つたのだよ。」

「それは婦人靴です。若い婦人の散歩靴です。それは今の流行のものです。わたしはその流行を一度も見たことがありませんでした。わたしは型を一つ持つてゐるのです。」彼は、束つかまの間のほんの微かな誇りの色を浮べながら、その靴をちらりと見やつた。

「それから製造者の名前は？」とドフアルジュが言つた。

その靴造りは、する仕事がなくなつたので、右手の指の節ふしを左

の掌に載せ、次には左手の指の節を右の掌に載せ、それから次には片手で鬚の生えた頬を撫で、そういうことを規則正しく一瞬も休まずに続けた。彼が口を利いた後で必ず陥る放心状態から彼を回復させる骨折は、誰か非常に虚弱な人を氣絶から回復させたり、何かの打明け話を聞くことが出来ようかと思つて、死にかかつている人間の魂を引き止めようと努めたりするのに似ていた。

「わたしの名前をお尋ねになりましたのですか？」

「いかにも尋ねた。」

「北塔百五番。」

「それだけか？」

「北塔百五番。」

吐息とも呻き声ともつかぬものうい音ねをほつと洩らすと共に、  
彼はまた身を屈めて仕事をし出しだが、やがて沈黙はまた破られ  
た。

「あなたは本職の靴造りではないのでしょうか？」と、彼をじつ  
と見つめながら、ロリー氏が言つた。

この質問をドナルジュに転嫁したがつてゐるかのように、彼  
のやつれた眼はドナルジュの方に向いた。が、その方面からは  
何の助けも来なかつたので、その眼は床ゆかを捜してから質問者に戻  
つた。

「わたしが本職の靴造りではないだろうつて？　はい、わたしは  
本職の靴造りではありませんでした。わたしは——わたしはここ

へ来てから覚えたのです。独りで覚えたのです。わたしはお許しを願つて——」

彼はそう言いかけたまま何分間もぼんやりした。その間中、あの両手の規則的な代る代るの動作を繰返していた。彼の眼は、とうとう、そこからさまよい出た元の顔へゆっくりと戻つた。その顔に止ると、彼ははつとして、眠っていた人がつい今日が覚めて、前夜の話題をまた話し出すような工合に、再び言い始めた。

「わたしはお許しを願つて独りで覚えたいと思いましたが、ずいぶん永い間かかつてやつとのことでそのお許しを得ました。その時からずっと靴を造つております。」

彼が取り上げられている靴を受け取ろうとして手を差し出した

時に、ロリー氏はなおも彼の顔をじつと覗き込みながら言つた。

「ムシユー・マネット、あなたは私のことをちつとも覚えていらっしゃいませんか？」

靴は床ゆかにばたりと落ち、彼はその質問者をじいつと眺めながら腰掛けていた。

「ムシユー・マネット、」——ロリー氏は自分の片手をドファルジユの腕にかけて、——「あなたはこの人のことをちつとも覚えていらっしゃいませんか？　この人をよく御覧なさい。私をよく御覧なさい。あなたのお心の中には、昔の銀行員や、昔の仕事や、昔の召使や、昔のことが少しも浮んで参りませんか、ムシユー・

マネット？」

その永年の間の囚人がロリー氏とドファルジユとを代る代るじ  
 いと見つめながら腰掛けているうちに、額の真中の、永い間搔  
 き消されていた、活動的な鋭い知能の徵が、彼にかぶさっていた  
 黒い霧を押し分けてだんだんと現れて来た。と、その徵は再び霧  
 に覆われ、次第に微かになり、とうとう消え去ってしまった。が、  
 それは確かにそこに現れたのであった。そして、その表情は、壁  
 に沿うて彼の姿の見られるところまでそうつと歩いて来て、今は  
 そこに彼を見つめながら立っている令嬢の、美しい若い顔にも寸  
 分の違ひなくそつくりに現れたので、——その彼女は、最初は、  
 たとい彼を近づげず彼の姿を見まいとするためではないにしても、

恐怖を交えた憐憫の情から両手をただ挙げていただけであつたのに、今は、亡靈のような彼の顔を自分の暖かな若い胸に休ませて、それを愛撫して生命と希望とに引戻してあげたいという熱望で震わせながら、その手を彼の方に差し伸べていたのであるが、——その表情は彼女の美しい若い顔にも寸分の違ひなく（もつともその性質はいつそう強かつたが）そつくりに現れたので、移り動く光のようにそれが彼から彼女に移つたのかと思われるくらいであつた。

暗黒がその表情に代つて彼に覆いかぶさつていた。彼が二人を見つめる注意が次第次第に弱くなり、その眼は陰鬱な放心状態で前のようにして床ゆかを捜し自分の周りを見した。遂に、深い長い

吐息を一つつくと、彼は靴を取り上げて、また仕事にかかりました。

「あの方かただという見分けがおつきになりましたか、ムシュー旦那？」と

ドナルジュが囁き声で尋ねた。

「つきました。一瞬間ですがね。最初はわたしはそれを全く望みがないと思いましたが、ほんの一瞬間、わたしが以前よつく知っていた顔を確かに見ました。しいつ！ わたしたちはもつと後へさがりましょう。しいつ！」

彼女は屋根裏部屋の壁のところから離れて、彼の腰掛けている腰掛け台ベンチのごく近くまで行つていた。手を差し出せば身を屈めて仕事をしている自分に触れるところにいる人の姿をも意識しない彼の様子には、何となくぞつとするようなところがあつた。

一語も話されなかつたし、何の音も立てられなかつた。彼女は彼の傍に精靈のように立つていたし、彼は仕事をしながら屈んでいた。

そのうちに、彼は手に持つてゐる道具を靴造り用の小刀ナイフに持ち替える必要が出来た。その小刀ナイフは彼女の立つている側と反対の側にあつた。それを取り上げて、再び仕事にかかるうと屈んだ時に、ふと彼女の衣服の裾スカートが目についた。彼は眼を上げて、彼女の顔を見た。傍に見ていた二人の者ははつとして前へ出た。が、彼女は片手を動して彼等を制止した。彼がその小刀ナイフで彼女を突き刺しはしまいかと、彼等は懸念したにしても、彼女は少しもしなかつた。

彼は恐しい眼付で彼女を見つめた。そして、しばらくしてから、

彼の脣は、まだ少しの声もそこから出て来はしなかつたけれども、何かの言葉を言う形をし出した。漸次に、速い苦しげな息遣いの合間合間に、こう言うのが聞えて来た。——

「これはどうしたことだらう?」

涙を顔にぽろぽろ流しながら、彼女は自分の両の手を脣にあて、それに接吻して彼に送つた。それから、その手をちょうど彼の破滅させられた頭をそこに休ませるかのように、自分の胸の上に組み合せた。

「あなたは牢番さんの娘さんではありますんね?」

「彼女は溜息をつくように言つた。『ええ。』

「あなたは誰ですか?」

彼女は、まだ自分の声の調子が<sup>あて</sup>に出来なかつたので、彼と並んでその腰掛台<sup>ベンチ</sup>に腰を掛けた。彼は尻込みした。が彼女は自分の片手を彼の腕にかけた。彼女がそうした時に奇妙な戦慄が彼を襲い、それが目に見えて彼の体中に伝わつた。彼は彼女を見つめながら、小刀<sup>ナイフ</sup>をそつと下に置いた。

長い捲毛<sup>カーリーヘア</sup>にしている彼女の金髪は、ぞんざいに搔き分けてあって、彼女の頸のところまで垂れていた。彼は手を少しづつ伸ばし、その髪を手に取り上げてじつと見入つた。そうしている最中に彼は気がふらふらとして、もう一度深い吐息をつくと、靴を造る仕事を始めた。

しかし永い間ではなかつた。彼女は彼の腕を放して、彼の肩に

手をかけた。すると彼は、あたかもその手がほんとうにそこにあ  
るのかということを確かめようとするかのように、二度か三度それ  
を疑わしげに眺めてから、仕事を下に置き、自分の頸のところへ  
手をやつて、黒くなつた一筋の紐を取り出した。その紐には摺たたん  
である襤襷の小片が結びつけてあつた。彼はそれを膝の上で気を  
つけて開けた。中にはほんの少しの髪の毛が入つていた。彼がい  
つか以前に自分の指に巻きつけて取つたらしい一筋か二筋の長い  
金髪だつた。

彼は彼女の髪の毛を再び手に取つて、それをつくづくと眺めた。  
「同じものだ。どうしてそんなことがあるはずがあろう！　あれ  
はいつのことだつたろう！　どうしてだつたかな！」

例の思いを凝すような表情が彼の額に戻つて来た時、彼はその表情が彼女の額にあるのに気がついたようであつた。彼は彼女を光の方へまともに向けて、彼女を眺めた。

「わしが呼び出されたあの晩、彼女はわしの肩に頭をあてていた。

——彼女<sup>あれ</sup>はわしの出かけるのを心配していた。わしの方は少しも心配などしなかつたのに。——それからわしが北塔へ連れて来られた時に、これがわしの袖についているのをあの人たちが見つけたのだ。『あなた方もこれはわたしに残しておいて下さるでしょうな？』これはわたしの魂の脱獄には助けになるかもしけんが、体の脱獄には決して助けになることは出来んものだから。』わしはそう言つたものだつた。わしはそれをよく覚えている。』

彼はこれだけの文句を口に出せるまでには、何度も何度も脣でその文句の形をしてみたのであつた。しかし、話そうとする言葉が出て来始めると、ゆつくりではあつたけれども、次々に続いて出て來た。

「これはどうしてだつたろうな？——あれはあなただつたのか？」

彼が恐しく不意に彼女の方に振り向いたので、もう一度、二人の傍観者ははつとした。だが、彼女は彼の手に掴まえられたまま全くじつと腰掛けていて、ただ低い声でこう言つた。「どうぞ、お願ひでござりますから、皆さま、あたくしたちの近くへお出で下さいますな、口をお利き下さいますな、お動き下さいますな！」

「おや！」と彼は叫んだ。 「あれは誰の声だつたかな？」

この叫び声を立てるに彼は両手を彼女から離し、自分の白髪のところへ上げて、気違ひのようにそれを搔きむしめた。それも次第に止んでしまつた。彼の靴造りの仕事以外のどんなことでも彼には次第に止んでゆくよう。そして彼はあの小さな包みを再び摺み、それを胸のところへしまいこもうとした。が、やはり彼女を見ていて、陰気な顔をしながら頭を振つた。

「いや、いや、いや。あなたは若過ぎる。若盛り過ぎる。そんなことはあるはずがない。この囚人がどんなになつてゐるか見て御覧。この手は彼女の知つていた頃の手ではない。この顔も彼女の知つていた頃の顔ではない。この声も彼女の聞いたことのある声

ではない。いや、いや。彼女も——またその頃のわしも——北塔で永い年月としつきがたたぬ前のことだ、——ずっとずっと昔のことだ。優しい天使さん、あなたの名前は何というのですか?」

彼の語調と拳動との和やわらいだのに喜んで応ずるよう、彼の娘は彼の前に跪いて、訴えるように両手を彼の胸のところへ差し出した。

「おお、あなたさま、いつかまた別の時に、あたくしの名前や、あたくしのお父さまがどなたでしたか、お母さまがどなたでしたか、またそのお二人のつらいつらいお身の上をどうしてあたくしがちつとも知らずにいましたか、お話申し上げましよう。けれども、今は申し上げられません。ここでは申し上げられません。こ

こで今申し上げられることは、どうかあたくしにお手をあててあたくしを祝福して下さいましとお願ひすることだけでござりますわ。あたくしに接吻して下さいまし、接吻して下さいまし！ おお、お懐なつかしいお方、お懐しいお方さま！」

彼の冷い白い頭は彼女のつやつやした髪の毛と雑り、その髪は彼を照す自由の光であるかのようにその頭を温め輝かせた。

「もしあなたがあたくしの声をお聞きになりまして、あたくしの声に——そうなのかどうかあたくしは存じません、そうであるようにと思つてるのでございますが——あたくしの声に、以前あなたのお耳にとつて美わしい音楽でありましたお声に幾らかでも似たところがございましたなら、どうかお泣き下さいまし、お泣

き下さいまし！ もしあなたがあたくしの髪にお触りになりまして、あなたがお若くて自由でいらした頃にあなたの胸にもたれた最愛の方かたのお頭つむりを思い出させるものが何でもございましたなら、どうかお泣き下さいまし、お泣き下さいまし！ もしあたくしがこれから御一緒に家庭をつくつて、出来るだけ忠実に出来るだけ真心をこめてあなたにお仕えいたしましたよと申し上げます時に、あなたのお氣の毒なお心が思い悩んでいらつしやる間、永い間見棄てられていた家庭を思いお出しになりましたなら、どうかお泣き下さいまし、お泣き下さいまし！」

彼女は彼の頸をいつそうしつかりと抱き締めて、彼を子供のように自分の胸のところで揺り動かした。

「もしあたくしが、お懐しいお懐しいお方、あなたのお苦しみはもうすみました、そのお苦しみからあなたをお救いするためになたくしはここへ参りました、あたくしたちは平和に安穩に暮すためにイギリスへ行くのです、と申し上げます時に、あなたが、御自分の有益な御生涯が無駄になりましたことや、あたくしたちの生れ故郷のフランスがあなたにたいそう意地わるであつたことを思いお出しになりましたなら、どうかお泣き下さいまし、お泣き下さいまし！ それからまた、もしあたくしが自分の名前と、生きてお出でになるあたくしのお父さまのお名前と、お亡くなりになりましたお母さまのお名前を申し上げます時に、あたくしのお氣の毒なお母さまが御慈愛からあたくしのお父さまのお苦しみを

あたくしにお隠しになりましたため、あたくしがお父さまのため  
に一日中骨を折つたことや一晩中眠らずに泣き明かしたことが一  
度もなかつたことを、あたくしの立派なお父さまの前に跪いて、  
お父さまのお赦し<sup>ゆる</sup>をお願いしなければならないのです、といふこ  
とがおわかりになりましたなら、どうかお泣き下さいまし、お泣  
き下さいまし！　お母さまのために、それから、あたくしのため  
に、お泣き下さいまし！　まあ皆さま、何て有難いことでしよう  
！　父の淨らかな涙があたくしの顔に落ちます。父の啜り泣き  
があたくしの胸に響いて来ます。おお、御覧下さいまし！　あ  
たくしたちのために神さまに感謝して下さいまし、何と有難いこ  
とでしよう！★

彼は彼女の胸の中でぐつたりとなり、その顔は彼女の胸のところに落ちていた。それは実に感動的な光景であつた。しかも、これまでに彼が受けて来た非行と苦難とを思えば、実に恐しい光景であつた。二人の傍観者は顔を蔽うたのであつた。

屋根裏部屋の静けさは永い間乱されずにいた。そして、彼の波打つ胸も震える体も、あらゆる嵐の後に必ず来るあの静穏——人間にとつては、生活という嵐が遂には鎮まつて必ずそこへ落著くあの休息と沈黙との表象——に永い間委ねられていた。それから、二人の傍観者はその父親と娘とを床から抱き起そうと前へ進み出た。父親の方はだんだんに床にすり下つていて、疲れ果てて、昏睡状態になつてそこで横わつっていた。娘の方は、片腕に父の頭を

載せておけるようにと、彼と一緒に下へうずくまつていた。そして、彼に垂れかかっている彼女の髪の毛は彼から光を除けていた。

「もし父を起さずにおいて、」と彼女は、ロリー氏が何度も鼻をかんだ後で二人の上に身を屈めた時に、ロリー氏に片手を挙げながら、言つた。「父をこの家からすぐ連れて行けるように、あたくしたちがすぐさまパリーを立つ手筈がすつかり出来ますならば

|

「だが、お考え下さい。お父さまは御旅行をなすつてもよろしいですか？」とロリー氏が尋ねた。

「父にとつてあんなに恐しいこの都にいるよりは、まだしもその方がよい、とあたくしは思いますわ。」

「それあそですよ。」と、見たり聞いたりするのに跪いていたドナルジュは、言つた。「そればかりじやありません。ムシュー・マネットは、あらゆる理由から、フランスを去られる方が一番いいんです。じゃあ、わっしは馬車と駆馬を雇つて来ましょか？」

「それは事務ですな。」とロリー氏は、すぐさま彼の几帳面な態度に返りながら、言つた。「事務をやらねばならんのでしたら、わたしがやる方がいいでしよう。」

「では、どうぞあたくしたち二人をここに残しておいて下さいまし。」とマネット嬢は言い張つた。「御覽の通り父はこんなに落著いて参りましたから、もう父をあたくしと一緒に残してお出で

になりますても御心配はございません。どうして御心配なことなどございましょう？ 誰も入つて来ませんように扉に錠を下して下さいますなら、きっと、父は、あなた方がお戻りになります時には、お出かけの時と同じように穩かにしておりますでしようよ。何にしましても、あなた方がお帰りになりますまであたくしは父を預りましょう。そしてお帰りになりましたらあたくしらちは早速父を連れ出すことにいたしましょう。」

ロリー氏もドファルジユも二人とも、このやり方は幾分気が進まず、二人の中のどちらか一人が残ることに賛成であつた。けれども、馬車と馬の手配りをしなければならぬだけではなく、旅行免状の手配りもしなければならなかつたし、それに、日も暮れよ

うとしていて、時間が切迫していたので、とうとう、ゼひしなければならない用事を大急ぎで二人に分けて、それをしに二人が急いで出かけるということになつた。

それから、闇が迫つて来ると、娘は自分の頭を父親のすぐ傍の堅い床<sup>ゆか</sup>の上に横えて、彼を見守つていた。闇はだんだんと濃くなつて來た。そして二人は静かに横わつていた。そのうちに、とうとう、壁の例の隙間から灯光が一つちらちら洩れて來た。

ロリー氏とムシュー・ドファルジユとが、すつかり旅行の準備をすませて、旅行用の外套や肩掛け膝掛けなどの他<sup>ほか</sup>に、パンと肉、葡萄酒、熱い珈琲を携えて來た。ムシュー・ドファルジユは、この食糧と、彼の持っているランプとを、靴造りの腰掛台<sup>ベンチ</sup>（その屋根

裏部屋にはそれ以外に藁蒲団の寝台が一つあるだけだった)の上に置いた。それから彼とロリー氏とは囚人を呼び覚し、助けて立ち上らせた。

彼の顔に現れた、おびえたような、茫然とした驚きの中に、彼の心の奥を読み取ることは、いかなる人智にも出来なかつたろう。彼がこれまでに起つたことを知つてゐるのかどうか、彼等が彼に言つたことを思い出せるのかどうか、彼が自分の自由になつていることを知つてゐるのかどうか、それはいかなる智慧も解くことの出来ない疑問であつた。彼等は彼に話しかけてみた。が、彼はひどくまごまごして、返事もなかなか出来ないので、彼等は彼の当惑する様にびつくりして、当分はその上彼をいじくらないこと

にしようということにした。彼は、時々両手で頭を抱えるような、前には彼に見られなかつた、狂氣じみた、我を忘れたような挙動をした。それでも、娘の声だけでも聞くのは幾分気持がよいらしく、彼女が口を利く時にはきつとその方へ振り向くのであつた。

压制に服従するのに永い間慣れていた人間に見られる柔順な態度で、彼は、彼等が飲み食いするようにと与えたものを飲み食いし、彼等が身に著けるようにと与えた外套やその他の身に纏うものを著た。彼は娘がその腕を彼の腕と組もうとするのにすぐに応じて、彼女の手を自分の両手に取つて——放さずに持つていた。

一同は下へ降り始めた。ムシュー・ドファルジユはランプを持つて真先に行き、ロリー氏はその小さな行列の殿しんがりになつた。あの

長い本階段をそう幾段も降りないうちに彼は立ち止つて、屋根をじっと見つめ、壁をじろじろ見 した。

「この場所を覚えていらつしやいますか、お父さま？ あなたはここを上つていらしたことを覚えていらつしやいますか！」  
「何と仰しやつたかな？」

しかし、彼女がその問を繰返さないうちに、彼はあたかも彼女がその問を繰返したかのよう答を呟いた。

「覚えているかつて？ いいや、覚えていない。あれはずいぶん以前のことだつたからな。」

彼が牢獄からこの家へ連れて来られたことについては少しの記憶も持つていなのは、彼等には明白になつた。彼等は彼が「北

塔百五番。一と呟くのを聞いた。そして、彼が自分の周囲を眺める時には、明かにそれは自分を永い間取囲んでいた堅固な城壁を探し求めるためであつたのだ。一同が中庭まで来ると、彼は、吊上げ橋のあるのを予期しているように、知らず識らずのうちに歩き振りを変えた。ところが、吊上げ橋がなくて、からりとしている街路に馬車が待っているのを見ると、彼は娘の手を放して、また自分の頭を抱えた。

入口のあたりには人だかりもなかつた。たくさん窓のどれにも人影は見えなかつた。街路にも偶然に通りかかっている人さえ一人もいなかつた。不自然なほどの沈黙と寂寞とがあたりを領していた。ただ一人の人間だけが見えた。それはマダーム・ドファア

ルジユであつた。——彼女は入口の側柱に凭れかかつて編物をしていて、何も見ずにいた。

かの囚人が馬車の中へ入つてしまい、彼の娘がその後に続いて入つてしまつた時に、ロリー氏は、囚人が彼の靴を造る道具との仕上つていらない靴とを哀れげに求める声を聞いて、踏台の上に足を止めた。マダーム・ドフルジユはただちに自分の夫に声をかけて自分がそれを取つて来ようと言い、編物をしながら、中庭を通つて、ランプの光の届かぬところへ歩いて行つた。彼女は急いでそれを持つて降りて来て、馬車の中へそれを手渡しした。——そしてすぐに入口の側柱に凭れかかつて編物をし、何も見ようとしなかつた。

ドナルジュは馭者台に乗つて、「城門へ！」と命じた。馭者は鞭をひゅうつと鳴らし、一同の乗つた馬車は弱い光を放つて頭上に吊り下つている街灯の下をがらがらと走つて行つた。

頭上に吊り下つてゐる街灯——立派な街になるほどますます明るく、悪い街になるほどますます薄暗く吊り下つてゐる——の下を通つて、また、灯火のついた店や、楽しげな群集や、灯光で装飾された珈琲店や、劇場の入口などの傍を通り過ぎて、市門の一つへと。そこの衛兵所の、角灯を持つた兵士たち。「免状だ、旅行者たち！」「ではこれを御覧下さい、お役人さん。」とドナルジューが、馬車から降りて、その役人たちを由々しげに離れたところへ連れてゆきながら、言つた。「これが車内の頭の白い人の

旅行免状です。この免状は、あの人と一緒に、わっしが——で引渡されまし——」 彼は声を低くした。すると衛兵たちの角灯の間にざわめきが起つた。そして、その角灯の一つが軍服を著た腕

で馬車の中へ突き入れられると、その腕に接続した眼が、不斷の日の、いや不斷の夜の眼付とは違つた眼付で、その頭の白い人を眺めた。「よろしい。通れ！」と軍服から。「御機嫌よろしゅう！」とドファルジユから。そして、だんだんと光の弱くなつてゆく頭上に吊り下つてゐる街灯がしばらく続いてゐる下を通つて、星が広くたくさん輝いてゐる下へ。

動かざる永遠の灯ともしび——その中のあるものは、この小さな地球から非常に遠く隔つてゐるので、その光線が果してこの地球をそこ

で何事でも苦しんだりしている空間中の一点として見つけたことさえあるかどうか疑わしいと学者が言っている——のその穹窿の下に、夜の影は広々とまた黒々としていた。夜が明けるまでの、冷い、眠られぬがちな時間を通じて、その夜の影は、ジャーヴィス・口リー氏——埋められていて掘り出された人と向い合つて腰を掛け、この人からどんな微妙な能力が永久に失われたのか、どんな能力が回復出来るのかと訝つ<sup>いぶか</sup>っている口リー氏——の耳に、もう一度、あの以前の問を囁いた。——

「あなたは甦りたいとお思いでしようね？」

それからまたあの以前の答を囁くのだつた。——  
「わしにはわからない。」



第二卷

黄金の糸  
こがね

## 第一章 五年後

テムブル<sup>バル</sup>閥門の傍のテルソン銀行は、一千七百八十年において  
さえ、古風な場所であつた。それはごく狭くて、ごく暗くて、ご  
く不体裁で、ごく勝手が悪かつた。その上に、その商社の社員た  
ちがその狭いのを誇りとし、その暗いのを誇りとし、その不体裁  
なのを誇りとし、その勝手の悪いのを誇りとしているという精神  
的の特質でも、それは古風な場所であつた。彼等は自分の銀行が  
狭くて暗くて不体裁で勝手の悪い点で際立つていてことを自慢さ  
えっていて、もしそれがこれほどひどくなかったならば、銀行の

品格はそれだけ低くなるだろうという、明確な信念に燃えていた。これは決して消極的な信念ではなくて、もつと便利な営業所にして彼等が閃かす積極的な武器であつた。テルソンは（と彼等は言うのだった）何もゆとりなどを必要としない。テルソンは何も明りなどを必要としない。テルソンは何も装飾などを必要としない。ノークス商会には必要かもしだぬ。ヌースークス兄弟商会には必要かもしだぬ。だが、テルソンには、有難いことには！——だ——。

こういう社員は誰でも、テルソン銀行を改築しようなどという問題を持ち出そうものなら、自分の息子でも勘当したことであろう。この点ではその銀行はこの国とよほど似ていた。この国は、

永い間非常に非難のあつた、しかし品格だけはますます備わつて来た法律や慣習を改善しようと言い出した息子たちを、はなはだしばしば勘当したのだから。

こういう次第で、テルソン銀行は意氣揚々と不便の極致になつてしまつていた。白痴のように強情な扉を低い軋り音を立てながらぐいと開けた後に、諸君はテルソン銀行の中へ二段だけ下つて降りる。そして、小さな勘定台の二つある、みすぼらしい、小さな店の中で、諸君は我に返る。そこでは、この上もなく年をとつた人たちが、諸君の小切手をちようど風がそれをさらさら音を立てさせるかのように振り動かしてみたり、また、この上もなく黒ずんだ窓の傍でその署名を調べてみたりする。その窓はフリート

街★から来る泥土をいつも雨のように浴びせられていて、その窓に附いている鉄格子と、テムブル関門<sup>バ</sup>の重苦しい影とのためにいつそう黒ずんでいたのだ。もし諸君が自分の用件で「銀行」と会う必要が生ずるならば、諸君は奥の方にある罪人の監房のようなところに入れられる。諸君がそこで空費された生涯ということについて黙想していると、やがて銀行は両手をポケットに突っ込んでやつて来る。その陰気な薄明りの中では諸君は彼を辛うじて細眼<sup>ほそめ</sup>で見ることが出来るだけだ。諸君のお金<sup>かね</sup>は虫の喰つた古い木製の抽斗<sup>ひきだし</sup>の中から出て来る。またはその中へ入つて行く。その抽斗<sup>ひきだし</sup>が開けられたり閉められたりする時に抽斗の微分子が諸君の鼻の中を舞い上つたり諸君の咽<sup>のど</sup>を舞い下つたりするのである。諸

君の銀行紙幣は、まるでそれが再びもとの檻樓<sup>ぼろ</sup>にずんずん分解しつつあるかのように、黴臭い匂いをしている。諸君の金属器類はそこらあたりのどぶ溜のようなところの中へしまいこまれる。そして悪しき交りがそれの善き光沢を一日か二日のうちに害う★のである。諸君の証券は台所と流し場とを改造した俄か造りの貴重品室の中へ入ってしまう。そしてその羊皮紙から脂肪がすっかり蝕い取られてその銀行の空気になつてしまふ。家庭の書類を入れた諸君の軽い方の箱は、階上の、いつも大きな食卓が置いてあるが決して御馳走のあつたことがないバーミサイドの部屋★へ上つて行く。そして、その部屋で、一千七百八十年においてさえ、諸君の以前の愛人や諸君の小さな子供たちによつて諸君に宛てて書

かれた最初の手紙は、アビシニアかアシャンティーにふさわしい狂暴な残忍さと兇猛さとをもつてテムブル<sup>バ</sup>関門の上に曝されている首★に、窓越しに横目で見られる恐怖から、ようやくのことでも免れるのである。

しかし、実際、その当時では、死刑に処することは、あらゆる商売や職業に大いに流行している方法であつた。そしてテルソン銀行でもそれに後<sup>お</sup>れは取らなかつた。死ということはあらゆることに対する大自然の療法である。とすればどうしてそれが法律の療法でないことがあるうか？ そういう訳で、文書偽造者は死刑に処せられた。不正な紙幣の行使者は死刑に処せられた。信書の不法開封者は死刑に処せられた。四十シリング六ペニスを

偷んだ者は死刑に処せられた。テルソン銀行の戸口にいる馬の番人が馬を曳いて逃走して死刑に処せられた。不正貨幣の鑄造者は死刑に処せられた。犯罪の全音域中の楽音を鳴らす者の四分の三は死刑に処せられた。そうしたところで犯罪防止に少しでも役に立つたという訳ではない、——事実は全くその正反対であつたと言つてもいいくらいであつたかもしがれぬ、——が、そうすることは一つ一つの事件の煩わしさを一掃（現世に関する限りでは）して、それに関係のあることで考慮しなければならないようなことを他に一切残さなかつたのだ。そういう次第で、テルソン銀行も、その全盛時代には、同時代の他の大きな営業所と同様に、非常に多くの人命を奪つたものである。だから、もしその銀行の前で打

ち落された首が、こつそりと始末されないで、テムプル関門の上にずらりと並べられていたならば、その首は、おそらく、銀行の一階が受けているわずかばかりの明りをかなりはなはだしく遮つたことであろう。

テルソン銀行のさまざまの薄暗い食器戸棚や兎小屋のようなどころに押しこめられて、この上もなく年をとった人たちがいかにも真面目まじめに事務を執つていた。彼等は青年をテルソン銀行ロンドン商社に採用した時には、その青年が老年になるまで彼をどこかに隠しておく。彼等は彼を乾酪チーズのように暗い場所に貯蔵しておくのだ。するとしまいに彼は十分にテルソン風の風味と青黴★とを帶びて來るのである。そうなつてようやく、彼は、人目に立つよ

うに大きな帳簿を調べたり、自分のズボンとゲートルとを銀行の全体の重みに加えたりして、人目に触れることを許されるのであつた。

テルソン銀行の戸外に——呼び入れられる時でなければどうあつても決して入ることのない——時には門番になり時には走使<sup>か</sup>いになる、雑役夫が一人いて、その銀行の生きた看板になつていた。彼は、使いに行つている時の他は、営業時間中にはそこにいないことは決してなかつた。そして、その使いに行つている時には、彼の倅<sup>せがれ</sup>が彼の代理をした。彼にそつくり生写<sup>いきうつ</sup>しの、十二歳になる、人相の悪い腕白小僧だ。世間の人々は、テルソン銀行が大まかなやり方でその雑役夫を使つてやつてているのだという

ことを承知していた。その銀行はいつも誰かしらそういう資格の人間を使つてやつていたのであつて、歳月がこの人間をその地位に運んで來たのである。彼の姓はクランチャーといつて、幼少の頃に、ハウinzデイツチ★の東教区教会で、代理人を立てて悪行を棄てると誓つた時に★、ジエリーという名を附け加えてもらつていた。

場面は、ホワイトフライアーズ★のハンギング・ソード小路に<sup>アレ</sup>おけるクランチャー氏の私宅であつた。時は、わが主の紀元千七百八十年、風の強い三月のある日の朝、七時半。（クランチャー氏自身はわが主の紀元のことをいつもアナ・ドミノーズと言つていた。キリスト紀元なるものはあの一般に流行している遊びの発

明された時から始つてゐるのであつて、それを発明したある婦人が自分の名をそれに与えたのだ、と明かに思い込んでいたものらしい。★)

クランチャード君の アパートメント 借間

は附近が悪臭のない場所ではなかつた。そして、たといたつた一枚だけの硝子板の嵌つてゐる物置を一室に数えるとしても、間数まかずは二つきりであつた。しかし、その二間はごくきちんと片附いていた。その風の強い三月のある日の朝、まだ時刻が早かつたのに、彼の寝てゐる部屋はもうすかり拭き掃除がしてあつた。そして、朝食の用意に並べてあるコツプや敷皿と、がたがたする檻板との間には、ごく清潔な白い布が掛けてあつた。

クランチャー君は、寛いでいるハーリクインのように、補綴<sup>つぎはぎ</sup>だらけの掛蒲団をかぶつて寐ていた★。最初は、ぐつすりと眠つていたが、だんだんと、寝床の中でのたくりつたり波打つたりし始め、遂には、例の忍返<sup>しのびがえ</sup>しを打ちつけたような髪の毛で敷シ<sup>シ</sup>布をずたずたに裂きそうにしながら、蒲団の上へぬつと起き上つた。その途端に、彼は恐しく怒り立つた声で呶鳴つた。――

「畜生、あいつめまたやつてやがるな！」

部屋の一隅に跪いていた、おとなしそうな、勤勉<sup>きんめい</sup>そうな女が、今言われたあいつとは彼女のことであるということが十分にわかるほどあわてておどおどして、立ち上つた。

「こら！」とクランチャー君は、寝床の中から片方の長靴を探し

ながら、言つた。「お前めえまたやつてやがるな。 そだろ?」

この二度目の会釈で朝の挨拶をすませると、彼は三度目の会釈として片方の長靴をその女をめがけて投げつけた。それはひどく泥だらけな長靴であつた。そして、それは、彼が銀行の時間がすんでからきれいな靴で家へ戻つて来るのに、次の朝起きる時にはその同じ長靴が粘土だらけになつてゐることがしばしばあるという、クランチャ一君の家事経済に關係のある、奇妙な事柄★を紹介し得るのである。

「何を、」とクランチャ一君は、狙つた的に中てそこなつてから自分の呼びかける人間の言い方を変えて、言つた。——「何を手てめえ前はしてやがつたんと、人に迷惑をかける奴め?」

「わたしはただお祈りを唱えていただけですよ。」

「お祈りを唱えていたと！　ひでえ阿魔あまだよ、手前てめえは！　へえつ  
くばりやがつて、おれに悪いことになるようについて祈るなんて、  
どういうつもりなんだ？」

「わたしはお前さんに悪いようになんて祈りやしませんよ。お前  
さんによいようにと祈つてたんです。」

「そうじやねえだろ。よしそうだつたにしろ、おれあそんな勝手  
な真似なんぞしてもれえたかねえ。おい！　お前めえのめえおつ母かあはひで  
え女めのだぜ、ジエリー坊。お前めえの父とうちゃんの運がよくならねえよう  
についてお祈りをするんだからな。お前めえは律義リュウイなおつ母かあを持つたも  
んだよ、お前めえはな、小僧。お前めえは信心深シニティえおつ母かあを持つたもんだ

ぞ、お前めえはよ、なあ、坊主。へえつくばつて、自分の独り息子の口からバタ附きパンをひつたくつて下さいつて祈るんだからなあ！」

小クランチャ一君（彼はシャツのままでいた）はこれをひどく怒つて、母親の方へ振り向くと、自分の食物を祈つて取つてしまふようなことは一切してくれると烈しく異議を唱えた。

「ところで、この自惚うぬぼれ女め、手前てめえはな、」とクランチャ一君は、前後撞著に気がつかずに、言つた。「手前のお祈りの値打てめえがどれだけあるだろうと思つてるんだい？ 手前のお祈りに手前のつけてる値段を言つてみろ！」

「わたしのお祈りは心の中から出て来るだけだよ、ジエリー。そ

れより他に値打つてありやしないよ。」

「それより他に値打つてありやしないだと。」とクランチャード君は繰返して言つた。「じゃあ、大して値打のねえものなんだな。

あつたつてなくつたつて、おれあもう祈つてもれえたかねえんだぞ。おれあそんなこたあ我慢が出来ねえ。おれあ手前がこそこそやってそのために不仕合せにされるなんて厭だ。手前てめえがぜひとつへえつくばらなけりやならねえんなら、手前てめえの亭主や子供のためになるようへえつくばれ。ためにならねえようにやるんじやねえぞ。もしおれに邪慳じやけんな女房さえなかつたならだ、そいからこの可哀かええ先週なんざあ、悪いように祈られたり、目論もくろみの裏をかれたり、

信心のために出し抜かれたりして、この上なしの運の悪い目になんぞ遭わねえで、お金<sup>かね</sup>を幾らか儲けてたんだ。ち、ち、畜生め！」とそれまでの間に衣服を著てしまつていたクランチャーリ君が言つた。「あの先週は、神信心だのあれやこれやの呪い事だので、おれあべんにかけられて、可哀<sup>かええ</sup>そうな実直な商売人めがこれまで出くわしたことのある中でも一番不仕合せな目に遭つたじやねえか！　おい、ジエリー坊、お前<sup>めえ</sup>著物を著てな、おれが靴を磨いてる間、時々おつ母に気をつけてろよ。そしてまたへえつくばりそうな様子がちよつとでも見えたたら、おれを呼ぶんだぜ。てえのはだ、手前<sup>てめえ</sup>、いいかい、」とここで彼はもう一度女房に話しかけて、「おれあまたあんな風にやられたかねえからなんだぞ。おれあ貸

馬車みてえに体がぐらぐらしてゐるし、阿片チンキを飲んだみてえに眠いし、体の筋はあんまり使い過ぎてるんで、もし痛みでもなからうものなら、どれがおれでどれが他人さまだかわからんねえくればなんだ。それだのにおれの懐工合はそのためにちつともよくはならねえ。で、おれあどうも、手前てめえが朝から晩まであれをやつてて、おれの懐工合がよくならねえようにしてるんじやねえかと思ふんだ。おれあそなことは勘弁がならねえ、この人に迷惑をかける奴め。さあ、手前てめえ、何とか言うことがあるかい！」

その上にまだ、「ああ！ そうだよ！ 手前てめえはそれに信心深ぶけえ人間だつたな。それなら自分の亭主や子供のためにならねえようなことはしめえな、そうだろな？ そうとも、手前はしねえとも

！」というような文句を呶鳴つたり、ぐるぐる つて いる彼の憤怒の回転砥石からその他の皮肉の火花を散らしたりしながら、ランチャー君は自分の長靴磨きや出勤準備をやり出した。そうしている間に、彼の息子は、この方の頭は父親よりは幾分柔かな忍返しを打つてあるし、その若々しい眼は父親のと同じに互にくつついていたが、言いつかた通りに母親を見張っていた。彼は時々、身支度をしている自分の寝間の物置から飛び出して来て、小さな叫び声で「おつ母かあ、お前めえつくばろうとしてるな。——おうい、父ちゃん！」と言い、そして、そういう伴いっわりの警報を発してから、親不孝なにたにた笑いを浮べながらまた自分の部屋へ飛び込んで、あの可哀そうな婦人を大いにまごつかせるのであつた。

クランチャード君の機嫌は、彼が朝食に向つた時にも、ちつともよくなつていなかつた。彼はクランチャード夫人が食前の祈祷をするのを特別の憎惡の念をもつて憤つた。

「やい、人に迷惑をかける奴め！ 手前てめえは何をしていやがるんだい？ またあれをやつてるのか？」

彼の妻は、ただ「食事前に祝福を願つた」だけだと弁明した。

「そんなこたあしてくれん！」とクランチャード君は、あたかも女房の祈願の効験でパンの塊が消え失せてゆくのが見えはしまいかと思つてでもいるようにあたりを見しながら、言つた。「おれがあ祝福してもらつて家から追ん出されたかねえんだよ。おれあ祝福で自分の食物たべものを食卓からふんだくられるなあ厭だ。じつと

してろ！」

ちつとも陽気にならなかつた宴会で一晩中起きてでもいたかの  
ように、ひどく赤い眼と怖い顔をして、ジエリー・クランチャード  
は、動物園の四つ足連中のよう<sup>よ</sup><sub>あし</sub>に食事を前にして唸りながら、朝  
食を食べるというよりも噛みちらかしていた。九時近くになると、  
彼は苛立つた顔付を和<sup>やわら</sup>げ、そして、自分の本性にかぶせられる限  
りの恥しからぬきとした外見を装<sup>よそお</sup>いながら、その日の業務に  
出て行つた。

その業務たるや、彼自身が自分のこと<sup>こと</sup>を好んで「実直な商売人」  
と称してはいたけれども、どうも商売とは言いがたいものなので  
あつた。彼の元手は、背の壊れた椅子を切り縮めて拵えた木製の

床几しょうぎ 一つだけであつた。その床几を、小ジエリーガ、父親と並んで歩きながら、銀行のテムブル関門バに一番近い窓の下のところまで毎朝運んで行くのだつた。その場所で、その雜役夫の足を寒氣と湿氣とから防ぐために、どれでも通りがかりの車から拾い取ることの出来た最初の一掴みの藁を加えれば、その床几はその日の陣所となるのだ。彼のこの持場にいるクランチヤー君は、フリート街やテムブル★によく知られていることは関門バそのものと同じくらいであつた。——また形相の悪いこともそれとほとんど同じであつた。

例のこの上もなく年をとつた人たちがテルソン銀行へ入つて行く時に自分の三角帽に手をかけて挨拶するのにちょうど間に合う

ようなど、九時十五分前に陣取つて、ジエリーは、その風の強い三月の朝、彼の部署に就いたのである。小ジエリーは、バ関門を通り抜けて侵入していないう時は、父親の傍に立つていて、自分の愛らしい目的には適當なくらいに小さい通りがかりの少年たちに、手厳しい種類の肉体的及び精神的の危害を加えてやろうとしていた。お互に非常によく似た父と子とが、銘々の両の眼が互に近よつていると同じように二つの頭を近よせながら、フリート街の朝の人通りを默然と眺めている様子は、二匹の猿にすこぶる類似していた。その類似は、成人のジエリーの方は藁を噛んでは吐き出しているのに、少年のジエリーの方は頻りにぱちぱち瞬きしている眼で父親やフリート街の他のあらゆるものを見よろきよろと

氣をつけていいるという、従属性の情況によつて減少されはしなかつた。

テルソン銀行所属の常雇の屋内小使の一人が戸口から頭をにゅつと出して、こういう指図を伝えた。――

「門番さん御用ですよ！」

「万歳、父ちゃん！ 朝っぱらにとつつきから一仕事だい！」

小ジエリーは、こう言つて父親の門出かどでを祝うと、例の床几に腰を下して、父親の疊んでいた藁に継承的な興味を持ち始め、それから考え込んだ。

「いつつも鎌さびだらけだ！ 父ちゃんの指はいつつも鎌だらけだ！」

と小ジエリーは呟いた。「父ちゃんはあんな鉄の鎌をみんなどつ

からつけて来るんだろう?  
ねえんだがなあ!」

ここじやあ鉄の錆なんてつくはずが

第二章 観物<sup>みもの</sup>

「お前はもちろんオールド・ベーリー★をよく知っているね?」

とこの上もなく年をとつた事務員の一人が走使いのジエリードに言った。

「へえい、旦那。」とジエリードはどこか強情な様子で答えた。  
「ベーリードは知っていますとも」

「あ、そうだろう。それからお前はロリーさんを知ってるな。」「ロリーさんなら、旦那、わつしはベーリードを知ってるよりはよっぽどよく知りますよ。実直な商売人のわつしがベーリードを、」

とその問題の役所へ不承不承に出頭した証人に似なくもないよう  
に、ジエリーは言つた。「知りたいと思つてるよりはよっぽどよ  
く知つてまさあ。」

「よしよし。じゃあな、証人の入つて行く戸口を見つけて、そこ  
の門番にロリーさん宛のこの手紙を見せるんだ。そうすれば門番  
はお前を入れてくれるだろう。」

「法廷へですか、旦那？」

「法廷へだ。」

クランチャヤー君の二つの眼はお互に更に少しづつ近よつて、  
「こいつあお前どう思う？」<sup>めえ</sup>と尋ね合つたように思われた。

「わつしは法廷で待つてゐるんですかい、旦那？」と彼は、眼と

眼のその相談の結果として、尋ねた。

「今言つてやるよ。門番は手紙を口リーサンに渡してくれるだろ  
う。そうしたら、お前は何でも口リーサンの目につくような身振  
りをして、あの人にお前のいる場所を見せてあげるんだぞ。それ  
からお前のしなければならんことは、あの人用事があるまでそ  
こにずっといるだけだ。」

「それだけなんですか、旦那？」

「それだけだ。あの人走使いの者を手許にほしいと仰しやるの  
だよ。これにはお前がそこにいることをあの人知らせてあるの  
さ。」

老事務員が手紙を丁寧に摺たたんで表書をした時に、クランチャード

君は、その行員が吸収紙を使う段になるまで彼を無言のまま眺めていた後に、こう言つた。――

「今朝は偽造罪を裁判するんでしようね？」

「叛逆罪さ！」

「それじやあ四つ裂き★だ。」とジエリーアは言つた。「むごたらしいことをするもんだなあ！」

「それが法律だよ。」と老事務員は、びつくりしたような眼鏡を彼に向けながら、言つた。「それが法律だよ。」

「人間に※を打ち込むなんていくら法律だつてひでえとわつしは思いますよ。人間を殺すのだつて十分ひでえが、※を打ち込むなんて全くひでえこつでさあ、旦那。」

「そんなことはちつともないさ。」と老事務員は返答した。「法律のことを悪く言うものじやない。自分の胸にあることと声にすることに気をつけるんだよ、ねえ、お前。そして法律のことは法律にまかせておくがいい。それだけの忠告をわたしはお前にしてあげるよ。」

「わっしの胸と声に宿つてるものってのは、旦那、湿氣でさあ。」  
とジエリーは言つた。「わっしの暮し方がどんなに湿つぽい暮し  
方だか、旦那のお察しに任せますよ。」

「うむ、うむ、」と老行員は言つた。「わたしたちはみんなさま  
ざまな暮しの立て方をしてるんだよ。湿っぽい暮しの立て方をし  
ている者もあれば、干涸ひからびた暮しの立て方をしている者もあるさ。

さあ、手紙だ。行つて来てくれ。」

ジエリーは手紙を受け取つた。そして、表面に見せかけているほどには内心では敬意を持たずに、「そういうお前さんだつて実入りの少い爺さんだろうよ。」と心の中で言いながら、お辞儀をして、通りすがりに自分の息子に行先を告げて、出かけて行つた。

その時代には、絞刑はタイバーン★で行われていたので、ニューゲートの外側のかの街は、その後にそこの附物つきものとなつた一の不名誉な醜名を、まだ受けてはいなかつた。しかし、その監獄は厭わしい処であつた。その中では大抵の種類の背徳や悪事が行われ、そこではいろいろの恐しい疾病が生れた。その疾病は囚人と共に法廷へ入り込んで、時としては被告席から裁判所長閣下にさ

え真直に突き進んで、閣下を裁判官席からひきずり下すこともあつた。黒い法冠をかぶつた裁判官が囚人に死の判決を宣告すると同じくらいにはつきりと自分自身に死の判決を宣告し、しかも囚人よりも先に死ぬことさえも、一度ならずあつた。その他のことについては、オールド・ベーリーは死出の旅宿のようなものとして名高かつた。そこからは、色蒼ざめた旅人たちが、二輪荷車や四輪馬車に乗つて、他界への非業の旅へと、絶えず出立したのである。もつとも二マイル半ばかりは一般公衆の街路や道路を通つて行くのだが★、それを見て恥辱とするような善良な市民は、よしあつたにしても、ごく稀であつた。——それほど習慣というものは力強いものであり、またそれほど始めからよい習慣をつけて

おくということは望ましいことなのである。オールド・ベーリー  
は、また架形台★でも名高かつた。これは賢明な昔の施設物の一  
つで、誰一人としてその程度を予知することの出来ない刑罰を課  
したものであつた。なおまた、そこは笞刑柱★でも名高かつた。  
これも懐しい昔の施設物の一つであつて、その刑の行われている  
のを見ると人をごく情深くし柔和にするのであつた。それからま  
た、そこは殺人報償金★の手広い取引でも名高かつた。これも祖  
先伝來の智慧の一断片であつて、この下界で犯すことの出来る最  
も恐しい慾得ずくの犯罪へと当然に到らしめるものであつた。結  
局、当時のオールド・ベーリーは、「何事にても現に起つてゐる  
ことはすべて正当なり。」という箴言の最良の例証なのであつた。

この格言は、かつて起つたことはすべて誤つていなかつた、とい  
う厄介な結論さえ包含しなかつたならば、ずいぶんものぐさな格  
言ではあるが、それと同時に決定的な格言であつたろうが。

この忌わしい所業の場所のあちらこちらに散らばつてゐる不潔  
な群集の中を、こそこそと道を歩くことに慣れた人間の巧妙さで  
うまく通り抜けて、例の走使いの男は自分の探してゐる戸口を見  
つけ出した。そして、そこの扉ドアについている落し戸から例の手紙  
を差し入れた。人々は、その頃は、ベツドラム★にある芝居を見  
るのに金を払つたと同じように、オールド・ベーリーの芝居を見  
るのに金を払つたものであつた。——ただ、後者のオールド・ベ  
ーリーの余興の方がずっと値段が高かつたが。だから、オールド

・ベーリーのあらゆる戸口は厳重に番人を置いてあつた。——た  
だし、犯罪人たちが入つて来る社会の戸口だけは確かにその例外  
で★、そこだけは常に広く開け放してあつたのだ。

あ

しばらくぐずぐず遅滞していた後に、扉はその蝶番のどこ  
ろでしぶしぶとほんのわずかばかり回転し、そしてジエリーカ  
ランチャー君によく法廷の中へ体からだをぎゅつと押し入れさせた。  
「何が始つてるんです?」と彼は自分の隣に居合せた男に小声で  
尋ねた。

「まだ何も。」

「何が始るところなんですか?」

「叛逆事件でさ。」

「四つ裂きの事件ですね、え？」

「ああ！」とその男はさも楽しみそうに答えた。「あいつは網代櫂★に載せて曳つぱられて行つて半殺しに首を絞められ、それから下されて自分の眼の前で薄割きにされ、それから臓腑を引き出されて自分の見ている間に焼き捨てられ、それから次には首をちよん切られ、体を四つにぶつ切られる。そいつが判決でさあ。

。

「もし有罪ときまつたら、つて言うんでしょう？」とジエリーは但書と言つたような意味で附け加えた。

「いや、なあに！ きっと有罪になりますよ。」と相手が言つた。  
「そいつあ心配するにやあ及びませんや。」

この時、クランチャーリー君の注意は、さつきの手紙を片手に持つて口リーの方へ歩いて行くのが見える門番に逸らされた。口リー氏は、仮髪<sup>かつら</sup>をかぶつた紳士たちの間に、一脚の卓子<sup>テーブル</sup>に向つて腰掛けっていた。そこから遠くないところに、囚人の弁護士である、仮髪<sup>かつら</sup>を著けた一紳士が、大東の書類を前にしていたし、また、ほどんど向い合つたところに、今一人の仮髪<sup>かつら</sup>を著けた紳士が、両手をポケットに突つ込んでいたが、この人の全注意は、クランチャーリー君がその時眺めてみた時にもその後に眺めてみた時にも、いつも法廷の天井に集中されているように思われた。ジエリーアーは荒々しい咳払いをして、顎をさすり、手で合図をした拳句、立ち上つて彼を探している口リーの目に留つた。口リー氏は静かに頷い<sup>うなず</sup>

て、そして再び腰を下した。

「あの人はこの事件にどんな関係があるんですかい？」とジエリーのさつき口を利いた男が尋ねた。

「わっしはまるで知らねえんで。」とジエリーが言つた。

「じゃあ、こんなことをお訊きしちや何だが、あんたはこの事件にどんな関係があるんですかね？」

「そいつもまるつきり知らねえんで。」とジエリーは言つた。

裁判官が入場し、それに続いて法廷内に非常なざわめきが起つてやがて鎮まつてゆき、それらのために二人の対話は中止された。ほどなく、被告席が興味の中心点となつた。今までそこに立つていた二人の看守が出て行き、やがて囚人が連れ込まれて、被告席

に入れられた。

天井を眺めている例の仮髪かつらを著けた紳士一人を除いて、その場にいる者は一人残らず、その被告を凝視した。場内のあらゆる人間の呼吸が、波のように、あるいは風のように、あるいは火のように、彼をめがけて押し寄せた。彼を見ようとして、多くの熱心な顔が柱の蔭や隅々から差し伸べられた。後の方の列にいる見物人たちは、彼の髪の毛一筋でも見逃すまいと、立ち上った。法廷の平場ひらばにいる人々は、誰に迷惑をかけようとも彼を一目見てやろうと、前にいる人々の肩に手をかけ、——彼の姿をどこからどこまで見ようと、足を爪立てて立つたり、何かの出張りの上に乗つかつたり、ないも同然のものの上に立つたりした。この後者の仲

間に中に一際目立つて、ニューゲートの忍返しを打つてある  
 塀の一小片が生きて来たように、ジエリーが立つていた。彼はこ  
 こへやつて来る途中で一杯ひつかけて来たのだが、そのビール臭  
 い息を、囚人めがけて喚き出した。<sup>いきわめ</sup>それは、囚人に向つて流れて  
 いる、他のビールや、ジン酒や、茶や、珈琲や、何やかやの波と  
 雜つた。その波は、既に、囚人の背後にある幾つかの大きな窓に  
 ぶつかつて碎けて、汚れた霧と雨になつていたのだ。

こういうすべての凝視と咆哮との対象というのは、日に焦けた  
 腮と黒眼がちな眼とをした、体格もよく容貌もよい、二十五歳ば  
 かりの青年であった。彼の身分で言えば青年紳士であった。彼は、  
 じみに、黒あるいはごく濃い鼠の服を著ていた。そして、長く

て黒っぽい彼の髪は、頸の後のところでリボンで束ねてあつた。

それは飾りのためというよりは邪魔にならぬようにしておくためだつた。心の中の感情は体のどんな覆いを通して必ず現れ出る同様に、彼の今の立場が生んだ蒼白い顔色は彼の頬の日に焦けた鳶色を通して現れていて、精神が太陽よりも力強いことを示していた。その他の点では彼は全く落著いていて、裁判官に一礼をして、静かに立つていた。

この人間を見つめたりこの人間に呶鳴つたりする人々の興味は、人間性を高めるような種類のものではなかつた。彼がこれほどの怖しい判決を受ける危険に臨んでいるのでなかつたなら——その判決の殘忍な細目の中のどれか一つでも免ぜられる見込があるの

だつたら——それだけ大いに彼は自分の魅力を失つたことであろう。あのように言語道断な切りさいなまれ方をされる宣告を受けることになつてゐる人間の姿、それが観物みものなのであつた。あのようになつてゐる男、それが人気を生み出していたのだ。種々雑多な見物人たちが、自己を欺くことにかけての自分たちのそれぞれの技巧と能力とに応じて、その興味をどんなに糊塗してみたところで、その興味は、その根底においては、食人鬼のような興味であつた。

法廷内はしいんとする！ チャールズ・ダーネーは、彼を告発した（際限のないべちやくちやしたおしゃべりをもつて）起訴に對して、昨日無罪の申立をしたのであつた。その告発というのは、

彼はわが畏くも高貴にして顕赫なる云々の君主なるわが国王陛下に対する不忠の叛逆者であつて、その理由とするところは、彼は、種々の機会に、種々の手段と方法とをもつて、フランス国王リューズが上述のわが畏くも高貴にして顕赫なる云々の陛下に對してなせる戦争★において、彼リューズを援助したのである。すなわち、彼は、上述のわが畏くも高貴にして顕赫なる云々の陛下の領土と、上述のフランスのリューズの領土との間を往復し、上述のわが畏くも高貴にして顕赫なる云々の陛下が幾何いくばくの軍隊を力ナダ及び北アメリカに送る準備をしておられるかを、邪惡にも、不忠にも、叛逆的にも、その他種々奸悪にも、上述のフランスのリューズに密告したのである、ということに對してである。

これだけのこととは、ジエリーは、いろいろの法律の用語のために髪の毛を逆立てられて頭がますます忍返しのようになりながらも、会得出来て大いに満足した。それで、前述の、幾度も幾度も前述のと言われた、チャールズ・ダーネーなる者が、彼の前で審問を受けようとしているのだということと、陪審官が就任の宣誓をしているのだということと、検事長閣下が弁論にかかるうとしているのだということを、曲りなりにもやつとのことで了解出来たのであつた。

その場にいるすべての人々の心の中で絞首され、斬首されて、四つ裂きにされていた（そして彼自身もそのことは知っていた）被告は、そうした立場にひるみもしなければ、そうした立場にあ

つて少しでも芝居じみた態度を装いもしなかつた。彼は平静にして傾聴していた。厳肅な関心をもつて弁論の開始されるのを注視していた。そして自分の前にある厚板に両手を載せたまま立つていたが、極めて自若としているので、その手は板の上に撒いてある薬草の一葉をも動かしはしなかつた。法廷には、獄舎臭と獄舎熱とに対する予防として、一面に薬草を撒き散らし酢を振り撒いてあつたのだ。

囚人の頭の上には鏡があつて、彼に光を投げ下すようになつていた。これまでに幾多の悪人や幾多の卑劣漢がその鏡に映されてしまつたのであつた。大洋がいつかはその中に沈んでいる死者を出

すことになつて、いるように★、もしその鏡がそれに映つた姿をいつか元へ戻すことが出来るならば、この厭わしい場所は實に物凄い幽靈屋敷となることであろう。恥辱不名誉という思いが、それのために鏡はそこに置いてあつたのだが、その囚人の心にもちらりと浮んだのかもしれない。それはともかく、彼は姿勢をちよつと変えると、自分の顔に射した一条の光に気づいて、上を見た。そして鏡を見た時に彼の顔はさつと赧らみ、彼の右の手は薬草を押し除けた。

その動作は、偶然、彼の顔を、法廷の彼の左手に当る側へ向かせたのであつた。彼の眼と同じ高さのあたりに、裁判官席のそこの隅に、二人の人が腰掛けていて、彼の視線はただちにその人た

ちに留まつた。それが非常に突然であつたし、また非常にひどく彼の顔付が変つたので、彼に向けられていたすべての眼が、今度はその二人の方へ振り向いた。

見物人は、その二人の人物が、二十歳を少し出た若い婦人と、明かに彼女の父親である一紳士とあることを知つた。その紳士というのは、頭髪の真白な点と、顔に一種名状しがたい強さがある点とで、極めて目に立つ外貌の男であつた。強さと言つても活動的な強さではなくて、沈思黙考しているような強さであつた。

この表情が現れている時には、彼はあたかも老人であるかのように見えた。が、その表情が搔き動かされて消え去る時——ちょうど今も彼が自分の娘に話しかける際にたちまちそうなつたように

——には、彼はまだ人生の盛りを越えていない立派な男に見えるようになった。

彼の娘は彼の傍に腰掛けながら、片手を彼の腕に通し、片方の手をその腕に押しつけていた。彼女は、この場の光景の恐しさと、囚人に対する同情とで、父親にひしと寄り添っていた。彼女の額には、被告の危難以外の何ものも見ないほどの一心の恐怖と同情とが、ありありと現れていた。それが極めて目に立ち、極めて力強く飾らずに表れていたので、今まで被告に対して何の憐憫の情も持たずにじろじろ見ていた連中も、彼女のためにさすがに心を動かされた。そして、「あの人たちは何者だろう?」という囁きが拡まつた。

走使いのジエリーは、それまで自己特有の流儀に自己特有の観察をしていて、夢中の余りに自分の指についている鉄鎌をしゃぶり取つていたが、その二人が何者であるかを聞こうとして頸を差し伸ばした。彼の近くにいた群集が、その質問を、その親子の一一番近くにいる傍聴者の方へだんだんと押し送つていた。そしてその傍聴者のところからそれはいつそうのろのろと押し送られて戻つて来て、ようやくジエリーのところに着いた。――

「証人だとさ。」

「どちら側の？」

「反対側の。」

「どつち側に反対の？」

「被告側にだつてさ。」

検事長閣下が絞首索を縄い、首斬斧を研<sup>な</sup>ぎ、処刑台に釘を打ち込まんがために立ち上つた時に、裁判官は、ずうつと見<sup>そ</sup>していいた眼を元へ戻し、自分の座席で反り返つて、自分の手中にその生<sup>と</sup>命を握つている人間をじつと眺めた。

### 第三章 当外れ

検事長閣下は陪審官に向つて次のようなことを告げなければならぬと言つた。諸君の面前にいる被告人は、年こそ若いが、死刑に価する叛逆の術策では極めて老獴である。彼が吾々の公敵と通信していることは、今日や昨日からのことではなく、昨年や一昨年からのことさせない。被告が、それよりももつと永い間、秘密の用務を帶びてフランスとイギリスとの間を往復する習慣にあつたことは確実であつて、その用務については彼は何等明白な説明をすることが出来ないのである。もしも叛逆行為なるものが

栄えるのがその自然であるならば（幸いにもそういうことは決してないのであるが）、彼の用務が真に邪悪であり有罪であることはそのまま発見されずすんだかもしれない。ところが、天帝は、恐怖にも動かされず非難にも動かされない一人の人間の心にそのことを知らせて、彼をして被告の画策の性質を探出させ、嫌惡の念に打たれて、その画策を陛下の首席国務大臣ならびに尊敬すべき枢密院に暴露させたもうたのである。この愛国者は諸君の前に出頭させられるであろう。彼の立場及び態度は概して崇高である。彼は被告の友人であつたのであるが、幸いにしてかつまた不幸にして被告の非行を見破すると、もはや腹心の友とは認め得ないそこの叛逆者を、国家の聖なる祭壇に捧げようと決心したのである。

古のギリシア  
いにしえ

ギリシアやローマにおけるが如く、わが英國にももし公共の恩人に対する彫像を贈る法令が發布されるならば、この輝ける市民は確かにそれを受けるであろう。が、そういう法令が發布されていないので、彼はおそらくはそれを受けることはあるまい。美德というものは、詩人たちが古来述べているように（そういう詩の幾多の文句を陪審官諸氏が一語一語舌端に諳んじておられるであらうこと）自分はよく知っているが、——と検事長が言うと、陪審官たちの顔は彼等がそういう詩句については少しも知らぬことに気がついていささか疚しいような色あらわを表した）、ある意味では伝染するものであり、愛国心、すなわち國を愛する心として知られているかの赫々たる美德はとりわけそうである。清淨潔白な

一点の非難すべきところもない、国王陛下のためのこの証人、陛下の御事に言及するのはいかに些細なことであつても名誉であるが、この証人の示した氣高い龜鑑は、被告の従僕に伝染し、彼の心に、その主人の卓子テーブルの抽斗ひきだしやポケットを調べ、主人の書類を隠匿しようという、神聖な決意を生ぜしめたのである。自分

(検事長閣下) はこの賞讃すべき従僕に加えられる若干の誹謗を聞くことを覚悟している。が、全体から言つて、自分はこの従僕を自分の(検事長閣下の)兄弟姉妹よりも好み、彼を自分の(検事長閣下の)父母よりも以上に尊敬するのである。自分は陪審官諸氏に来つて同じようになされよと確信をもつて要求するものである。この二人の証人の証言は、やがてここに提出されるであろ

うところの彼等の発見した文書と共に、被告が、陛下の兵力と、その海陸における配慮と戦備とについての明細書を所持していたことを示すであろう。しかして、彼がそのような情報を敵国へ常習的に送っていたということに何等の疑いをも残さないであろう。これらの明細書が被告の手蹟のものであるということは証明出来ない。が、それはどちらでもよろしいのである。実際、それは、被告が警戒手段に巧妙なることを示すものとして、起訴にはかえつて好都合なのである。その証拠書類は五箇年前まで遡り、被告が既に、英國軍隊とアメリカ人との間に行われた實に最初の戦闘の時日から数週間以前に、そういう有害な任務に従事していたことを示すであろう。これらの理由によつて、陪審官諸氏は、忠誠

なる陪審官であるがゆえに（諸君がそうであること自分は知つてゐる）、また責任を重んずる陪審官であるがゆえに（諸君がそつてあることを諸君自らが知つておられる）、諸君の好むと好まざるとにかかわらず、断然この被告を有罪と決し、彼を殺さなければならぬのである。この被告の頭の刎ねられない限り、諸君は決して枕を高うして眠つてはいることが出来ないであろう。諸君の妻が枕を高うして眠つてはいるという考え方をも忍ぶことが出来ないであろう。諸君は諸君の子供たちが枕を高うして眠つてはいるという思いをも堪えることが出来ないであろう。要するに、諸君にとつても諸君の妻子にとつても、もはや枕を高うして眠るなどということとは決してあり得ないのである、と。検事長閣下は、順々

に彼の考え得られるあらゆるものとの名にかけて、また彼が既に被告をもう死んでいるも同然と考えているという彼の厳肅な誓言に基いて、その被告の首を陪審官たちに請求することによつて、論告を終えたのであつた。

検事長の論告が終ると、法廷内ががやがやして來た。それはあたかも雲霞のような大きな青蠅の群むれが、その囚人がまもなくどうなるかということを見越して、彼の身辺に群つているかのようであつた。それがまた静まつた時に、かの一点の非難すべきところもない愛国者が証人席に現れた。

次席検事閣下が、それから、彼の指導者の指導に従つて、かの愛國者を審問した。名はジョン・バーサツド、紳士である。彼の

純潔な精神の物語は検事長閣下がさつき述べたところと寸分の違ひもなかつた。——それに何か欠点があつたとすれば、おそらく、いさきか寸分の違いもなき過ぎたことであろう。彼はその高潔な胸中の重荷を卸してしまつたので、つましげに引下つたであるが、ロリー氏から遠くないところに腰掛けている、書類を前にした、あの仮髪かつらを著けた紳士が、彼に二三の質問をしたいと請うたのであつた。向い合つて腰掛けている例の仮髪かつらの紳士は、まだやはり法廷の天井を眺めていた。

君はかつて自分で間諜スペイをやつていたことがあるか? ★ いいや、自分はそういう卑劣なてこすりを軽蔑する。君は何によつて衣食しているか? 自分の財産によつてだ。君の財産はどこにある

か？ どこにあるかは正確に記憶していない。その財産は何であるか？ 何も他人に関係のあることではない。君はその財産を相続したのか？ そうだ、相続したのだ。誰からか？ 遠縁の親戚から。非常に遠縁か？ かなり遠縁である。監獄に入つたことがあるか？ 確かにない。債務者監獄に入つたことは一度もないか？ そんなことが今の件とどんな関係があるのかわからない。債務者監獄に入つたことは決してないか？ ——さあ、もう一度問う。決してないか？ ある。何度か？ 二三度。五六度ではないか？ あるいはそうかもしれない。何の職業か？ 紳士だ。人から蹴られたことがあるか？ あつたかもしれない。たびたびあつたか？ いいや。階段から蹴落されたこと★があるか？ 断然ない。

一度階段の頂上のところで蹴られて、自分勝手に階段を落ちたことがある。その時は博奕<sup>ばくち</sup>でごまかしをやつたために蹴られたのか？ そういうような意味のことを、自分にそういう乱暴を加えた酔っ払いの嘘つきが言つた。がそれはほんとうではない。それがほんとうではないということを誓うか？ きつぱりと。賭博でごまかしをやつて生活したことがあるか？ 決してない。賭博をやつて生活したことがあるか？ 他の紳士<sup>ほか</sup>のする程度以上ではない。被告から金を借りたことがあるか？ ある。返したことがあるか？ ない。被告と親交があると言つても、それは実際のところはごくちよつとした交際で、乗合馬車や宿屋や郵船などの中では被告に無理に押しつけた交際ではないか？ いいや。その明細書を被

告が持つてゐるのを見たということは間違いないか？ 確かだ。

その明細書についてはそれ以上のことは知らないのか？ 知らない。例えは、君はそれを自分で手に入れたのではなかつたか？

そうではない。この証言によつて何かを得ようと期待しているのではない？ いいや。いつも政府に雇われて金かねを貰つて、他人

を罠に陥れることを仕事にしているのではないか？ とんでもな

いことだ。それとも何かためにしようとしているのではないか？

とんでもないことだ。それを誓うか？ 幾度でも。全くの愛国心という動機以外には動機はないのか？ ちつともない。

かの謹直な従僕、ロジヤー・クライは、非常な速度でさつさと宣誓しては証言して行つた。自分は四年前から誠実にかつ純樸に

被告に奉公していたのである。カレー通いの郵船の中で、自分は被告に向つて小用足したを雇うつもりはないかと尋ねた。すると被告は自分を雇つたのである。自分はお情に小用足しを使つてくれと頼んだのではない。——そういうことは思いもよらぬことだ。まもなく、自分は被告を怪しいと思うようになり、彼を監視し始めた。旅行中、彼の衣服を整頓する際に、何回となく自分はこれと似た明細書が被告のポケットにあるのを見たことがある。自分はここにある明細書を被告の机の抽斗から取り出したのである。自分が最初にそれをそこに入れておいたのではない。自分は、被告がこれと同じ明細書をカレーでフランスの紳士たちに見せ、またこれと似た明細書をカレーとブーローニュ★との両地でフラン

スの紳士たちに見せて いるのを見た。自分は自分の国を愛するから、それを忍ぶことが出来ず、密告をしたのである。自分は銀製の急須を盗んだという嫌疑をかけられたことは一度もない。芥子壺に関して中傷されたことはあるが、しかしそれは鍍金めつきの品に過ぎないことがわかつた。自分はさつきの証人を七八年来知つてゐる。それは単に暗合に過ぎない。自分はこれを特に不思議なものであるから。とは考えない。暗合というものは大抵不思議なものであるから。また、自分の場合でもまた眞の愛国心が唯一の動機であるということも、自分は不思議な暗合とは考えない。自分は眞の英国人であり、自分のような者の多からんことを希望するものである。

青蠅がまたぶんぶん唸つた。そして検事長閣下はジャーヴイス

・口リー氏を呼んだ。

「ジャーヴィス・口リー氏、あなたはテルソン銀行の事務員だね？」

「そうです。」

「一千七百七十五年の十一月のある金曜日の夜、あなたは用向でロンドンとドーザーとの間を駅遞馬車で旅行しましたか？」

「しました。」

「その駅遞馬車には他に誰か乗客がありましたか？」

「二人ありました。」

「その二人は夜の間に途中で降りましたか？」

「降りました。」

「口リ一氏、被告を見なさい。被告はその二人の乗客の中の一人ではなかつたか？」

「そうであつたとお請合<sup>うけあ</sup>いは出来ません。」

「被告はその二人の乗客の中のどちらかに似てはいませんか？」  
「二人ともすつかり身をくるんでおりましたし、真<sup>まっくら</sup>暗な晩でしたし、それに私たちは皆一向に口も利きませんでしたので、それさえもお請合<sup>うけあ</sup>いは出来ません。」

「口リ一氏、もう一度被告を見なさい。被告がその二人の乗客のしていたように身をくるんでいると仮定して、彼のかつぶくと身長とに、彼がその中の一人でありそうにもないと思わせるようなところがありますか？」

「いいえ。」

「口リー氏、あなたは被告がその中の一人ではなかつたとは誓わないんですね？」

「それは誓いません。」

「それでは少くともあなたは彼がその中の一人であつたかもしぬと言われるんですね？」

「そうです。ただ一つ違いますのは、その二人とも——私と同様に——追剥を怖がつてびくびくしておりますと記憶いたしますが、この被告には小胆な様子がございません。」

「あなたはいかにも臆病らしく見える人間というのを見たことがありますか、口リー氏？」

「確かにそういう人間を見たことがあります。」

「ロリー氏、もう一度被告を見なさい。あなたの確かに知つておられるところでは、あなたは以前に彼に逢つたことがありますか？」

「あります。」

「いつですか？」

「私はそれから数日後にフランスから帰ろうといたしましたが、カレーで、被告が私の乗つておりました定期船に乗船して参りましたして、私と一緒に航海をいたしました。」

「なんじ何時に彼は乗船しましたか？」

「夜半少し過ぎに。」

「真夜中にだね。そんな時ならぬ時刻に乗船した乗客は被告一人だけでしたか？」

「偶然にも被告一人だけでした。」

「『偶然にも』などということはどうでもよろしい、ロリー氏。  
その真夜中に乗船した乗客は被告一人だけだったのですな？」

「そうでした。」

「あなたは一人で旅行していたのですか、ロリー氏、それとも誰か連れがありましたか？」

「二人の連れがありました。紳士と婦人です。その二人はここにおられます。」

「その二人はここにおられるのだね。あなたは被告と何か話をし

ましたか？」

「ほんとしません。天候は荒れておりましたし、その航海は長くかかるて海が荒れましたので、私はほんと岸から離れて岸に著くまで長椅子ソーフアに寝てきましたのです。」

「ミス・マネット嬢！」

さつきも場内のすべての眼がその方へ振り向き、今また再び振り向けられた、かの若い婦人は、自分の腰掛けていた場所に立ち上つた。彼女の父親も一緒に立ち、自分の片腕に彼女の片手を通したままにしていた。

「ミス・マネット嬢、被告を御覧なさい。」

そういう同情と、またそういう真心のこもつた若さと美しさと

に対することは、その被告にとつては、場内のすべての群衆と対するよりも遙かにつらいことであった。いわば自分の墓穴の縁に彼女と共に別になつて立つてしているので、じろじろと見つめているすべての人の好奇心の眼は、しばらくの間は、彼に全くじつとしているように力をつけることが出来なかつた。彼の右の手は前にある薬草をあわてて搔き分けて空想の中で庭園の花壇にした。そして息遣いを落著かせてしつかりさせようと/or>する彼の努力のために脣はぶるぶる震え、その脣からは血の気がさつと心臓へ戻つた。

例の大きな蟻のぶんぶん唸る音がまた高まつた。

「ミス・マネット嬢、あなたは以前に被告に逢つたことがありますか？」

「はい。」

「どこで？」

「ただ今お話に出ました定期船の中で。同じ折に。」

「あなたは今話に出た若い御婦人ですね？」

「はあ！ ほんとに不仕合せなことに、さようなのでござります！」

彼女の同情から出たその悲しげな聲音<sup>こわね</sup>は、裁判官が幾分荒々しく「あなたに尋ねられた質問に答えればよろしい。それについて意見がましいことを言つてはならぬ。」と言つた時の、彼のあまり音楽的でない声の中に消されてしまった。

「マネット嬢<sup>ミス・マネット</sup>、あなたはイギリス海峡を渡る時のその航海中に被告と何か話をしましたか？」

「はい。」

「それを思い出して御覧なさい。」

深い静けさの中で、彼女は弱い声で言い始めた。――  
 「あの紳士が乗船なさいました時に――」

「あなたは被告のことと言つておられるのか？」と裁判官は眉を  
 颽ひそめながら尋ねた。

「はい、閣下。」

「では被告と言いなさい。」

「被告が乗船して参りました時に、被告は、私の父が、「と彼女  
 は傍に立っている父親に自分の眼を愛情をこめて向けながら、  
 「たいそう疲労していまして、体からだもひどく弱つておりますのに、

目を留めました。父はずいぶん衰弱しておりましたので、私は父を外の空気のあたらないところへ連れて参りますのはよくないと存じまして、船室の昇降段の近くの甲板の上に父のために寝床を拝えておきました。そして、父の世話をするために、私は父の傍の甲板に坐つていたのでございます。その晩は私ども四人の他に乗客はございませんでした。被告は、親切に、私に私のいたしましたよりも上手に父を風や寒さに当てないようにするにはどうしたらよいか教えてあげてもよろしいかと申してくれました。私は、港の外へ出ますと風がどんなに吹くものか存じませんでしたので、それを上手にするにはどうしたらよろしいのかわからなかつたのでござります。被告は私に代つてそれをしてくれました。被告は

私の父の様子についても大変優やさしく親切に言つて下さいましたが、きっとほんとうにそう思われたのだと私は思つております。こんな風にして私たちは言葉をかわ交し始めたのでございました。

「ちよつと話の途中ですが。被告は一人だけで乗船したのですか？」

「いいえ。」

「何人被告と一緒にいましたか？」

「フランスの紳士が二人でした。」

「三人で一緒に相談していましたか？」

「フランスの紳士たちが御自分たちの船に乗つて陸へ引揚げなければならなくなる最後の時まで、その三人は一緒に相談していら

つしゃいました。」

「この明細書に似た何かの書類が、彼等の間で遣り取りされていませんでしたか？」

「何か書類がその人たちの間で遣り取りされておりました。けれどもどんな書類だか私は存じません。」

「形や寸法がこれに似ていましたか？」

「そうかもしません。でもほんとうに私は存じませんの。その人たち私は私のごく近くでひそひそ話をしながら立つていらしたのですがありますけれども。と申しますのは、その人たちは船室の昇降段の一番上のところに立つていらしたのですから。それはそこに吊してありましたランプの光を使うためなのでした。そのランプ

ンプは暗いランプでしたし、それにその人たちはごく低い声で話していらっしゃいましたので、私にはその人たちの言つていらっしゃることは聞き取れませんでしたし、またその方たちが書類を見ていらっしゃるということだけしか見えなかつたのでござります。」

「では、被告の話したことについて言つて下さい、マネット嬢。<sup>ミス・マネット</sup>」

「被告は、私の父に対して親切で、好意を持つて、いろいろ世話ををして下さいましたように、私にも打解けて何でも話して下さいました。——それは私の頼りない境遇から起つたことでございました。——しようが。私は、」とわつと泣き出して、「今日あの方に御迷惑をおかけして、あの方に恩を仇<sup>あだ</sup><sub>かた</sub>で返すようなことがなければよい

がと存じます。」

青蠅がぶんぶん唸る。

「マネット嬢、もし被告が、あなたがそれを述べることがあなたの義務であり——あなたの述べなければならない——またあなたがどうしてもそれを述べずにいる訳にはゆかない——ところの証言を非常に気が進まぬながら述べておられるのだ、ということを完全に理解していないとするなら、彼はここにいる者の中でそのことを理解していないただ一人の人間です。どうか先を続けて下さい。」

「被告は、私に、自分はある面倒なむずかしい性質の用事で旅行しているのだが、その用事はいろいろの人に迷惑をかけることに

なるかも知れない、だから自分は変名を使つて旅行しているのだ、と話しました。また、自分はその用事のために数日前にフランスへ行つて来たのだが、これから先も永い間そのために折々フランスとイギリスとの間を行つたり来たりすることになるかも知れない、と申しました。」

「被告はアメリカのことについて何か言いましたか、<sup>ミス・マネット嬢</sup>？」  
「詳細に述べなさい。」

「被告はあの戦争がどうして起るようになつたかということを私に説明してくれようといたしました。そして、自分の判断し得る限りでは、あれはイギリス側が間違つた愚かな戦争をやつたのだ、と申しました。また、常談のように、たぶんジョージ・ウォシン

トンは歴史上ジョージ三世とほとんど同じくらいの偉大な名声を残すだろう★、と言い足しました。でも、その言い振りには少しも悪気はございませんでした。それは、笑いながら、時間を紛らすために、話されたのでございます。」

芝居の非常に興味のある場面で、多くの眼の注がれている主役俳優の顔に、何か強く目立つ表情が現れるたびに、その表情は見物人に無意識の中に模倣されるものである。彼女がこの証言を述べている時にも、また、それを裁判官が書き留めている間彼女が言葉を切っている合間に、その証言が弁護士に与える印象がよいか悪いかを注視している時にも、彼女の額<sup>ひたい</sup>は痛々しいまでに懸念と緊張とを現した。すると、法廷内の到る処で傍聴者の間にそれ

と同じ表情が現れた。裁判官がジョージ・ウォシントンについてのあの恐しい異端の言を聞いて、自分の控書から顔を上げてぎろりと眼を光らせた時には、そこにいた人々の額の大部分は、この証人を映す鏡となつたと言つてもよいくらいであつた。

検事長閣下はこの時裁判長閣下に、念のためと、また形式上から、この若い婦人の父マネット医師を呼び出すことを必要と認める、ということを知らせた。それで彼が呼び出された。

「<sup>ドクター・マネット</sup>マネット医師、被告を見なさい。あなたはいつか以前に彼に逢つたことがありますか？」

「一度だけ。彼がロンドンの私の寓居へ訪ねて来ました時に。約三年か、三年半ばかり前。」

「あなたは彼があの郵船にあなたと同船した乗客に相違ないと認めることや、あるいはあなたの令嬢と彼との会話について話すことが出来ますか？」

「閣下、私にはどちらも出来ません。」

「あなたがそれをどちらも出来ないということには何か特別の理由がありますか？」

彼は、低い声で、答えた。「あります。」

「あなたは、あなたの生國で、公判も、告発さえも受けずに、永い間の監禁を受けるという不幸な目に遭われたのですか、マネツト・ドクターマネット医師？」

彼は、あらゆる人の心を動かす語調で、答えた。「永い間の監

禁でした。」

「あなたは今問題になつてゐる折に釈放されたばかりだつたのですか？」

「皆が私にそう申しております。」

「その折の記憶が少しもありませんか？」

「少しも。私が監禁の身で靴造りに従事しておりましたある時――それがいつであるかということさえ私には言えないのであります――その時から、ここにおります可愛い娘と一緒に自分がロンドンに暮しているのだと気がつきました時まで、私の心は白紙なのです。お恵み深い神さまが私の心の力を回復して下された時には、娘は私とごく親しくなつておりました。しかし、どんな

風にして親しくなつて来たのかということを申し上げることさえ  
私には全く出来ないので。それまでの経路については少しも記  
憶がありません。」

検事長閣下は腰を下し、そしてその父と娘とは一緒に腰を下し  
た。

一つの奇妙な事柄がその次にこの事件に生じた。目下の目的は、  
被告が、まだ逮捕されない誰がある共犯者と共に、五年前の十一  
月のその金曜日の晩にドーヴィー通りの駅逕馬車に乗つて出かけ  
たが、人目をごまかすために、夜よなか中にある土地で馬車を降り、そ  
こには足を留めずに、そこから約十二マイルかそれ以上も後戻り  
して、兵営と海軍工廠とのある処まで行き、そこで情報を蒐集し

た、ということを証拠立てることなのであつた。で、一人の証人が呼び出されて、被告はその兵営と海軍工廠とのある町のある旅館の食堂に、誰か他の人間を待ちながら、ちょうどその必要な時刻にいた男に違いない、ということを鑑定されることになった。

例の被告の弁護士はこの証人にいろいろ対質訊問★をしていたが、この証人がその時より以外のどんな機会にも被告を見たことが一度もないということの他には、何一つ得るところがなかつた。この時、これまでずつと法廷の天井を眺めていた例の仮髪<sup>かつら</sup>の紳士が、小さな紙片に一二語書いて、それを捻<sup>ひね</sup>つて、その弁護士に投げてやつた。弁護士は、訊問の次の合間にその紙片を開いて見ると、非常な注意と好奇心とをもつて被告をうち眺めた。

「君はそれが確かに被告であつたということを十分に確信していると今一度言えますね？」

その証人はそれを十分に確信していると言つた。

「君はこれまでに誰でも被告に非常に似た人を見たことがありますか？」

被告と見違えるくらいに似た人は見たことがない（と証人が言ったのであるが）とのこと。

「では、あの紳士、あそこにいるわたしの同僚を、」とさつき紙を投げてよこした男を指さしながら、「よく見たまえ。それから次に被告をよく見たまえ。どう思います？ 二人は互に非常に似ていやしませんか？」

二人をそうして見比べてみると、その同僚弁護士の風采が放埒などというほどではないにしても無頓著でじだらくなのを差引すれば、二人が互に非常に似ていることは、証人ばかりではなく、その場に居合せたすべての人を驚かすに十分であつた。裁判長閣下が、<sup>かつら</sup>仮髪を脱ぐようにその同僚弁護士に命じて頂きたいと請われて、あまり快くもなさそうな承諾を与えると、二人の似ていることはますます目立つようになつた。裁判長閣下は、ストライヴァー氏（被告の弁護人）に向つて、では吾々は次にはカートン氏（彼の同僚弁護士の名）を叛逆罪の<sup>かど</sup>廉で審理しなければならないのか？と尋ねた。けれども、ストライヴァー氏は裁判長閣下に答えて、そうではない、しかし、自分はその証人に、一度あつた

ことは二度あるものかどうか、もし証人が彼の軽率を示すこういう例証をもつと前に見ていたなら、今のような確信を持つたかどうか、現にそれを見た上でも、今のような確信を持つかどうか、云々、ということを答えてもらいたいのだ、と言つた。その訊問の結果は、この証人を瀬戸物の器<sup>うつわ</sup>のように粉碎し、この事件における彼の役割を無用のがらくたとしてしまって打ち碎いたのであつた。

クランチヤー君は、ずっと今までの証言を聴きながら、この時分までには自分の指から全く一昼食<sup>ランチ</sup>分くらいの鉄鎌を食べてしまつていた。彼は、今度は、ストライヴアーリ氏が被告側の申立をきつちりした一著の衣服のように陪審官に合せて造つてゆくのを、

傾聴しなければならなかつた。ストライヴアー氏は陪審官たちに次のことを証示した。愛国者と称せられるバーサツドはお傭い間諜<sup>パイ</sup>で、友を売る人間であり、他人の血を売る鉄面皮な商人であり、呪うべきユダ★からこの方<sup>かた</sup>この地上に現れた最大悪党の一人であり——そのユダに彼は確かに顔も幾らか似ている、ということ。

謹直な従僕と称せられるクライは彼の友人で同類であり、またそうであるに恥じぬものである、ということ、この二人の事実捏造者で偽証者が自分たちの喰い物にしようとして被告に油断のない眼を注いでいた訳は、被告はフランス生れであるので、フランスにおける何かの家庭問題のためにそのようにイギリス海峡を渡つて幾度も往復しなければならなかつたからであり、——もつとも、

その家庭問題というのが何であるかは、彼の近親の人々に對する考慮から、被告には、生命を賭しても、打明けることが出来ないのである、ということ。陪審官諸氏の現に見られたようにあの若い婦人をあのように苦しめて述べさせ、彼女から じ取り揃ぎ取つたところのあの証言は、誰でもそういう風に出会つた若い紳士と若い淑女との間にありがちな、ほんのちよつとした無邪気な慇懃と礼儀とを意味するだけであつて、何にもならぬものであり、

——ただ、ジョージ・ウォシントンに関するあの言葉だけは例外であるが、それとても全く余りに途方もないあり得べからざる言葉があるので、怪しきからぬ常談としての見地より以外の見地で見らるべきものではない、ということ。最も下等な国民的反感と恐

怖心とを利用して人気を博そうとするこの企てが失敗すれば、政府における一つの弱点となるであろうから、検事長閣下は極力努力されたのである、ということ。さりながら、この企てには、余りにしばしばこのような事件を醜悪化するところの、またこの国の国事犯裁判に充満しているところの、あの陋劣で破廉恥な性質の証拠の他には、何等拠るべきものがないのである、ということ。しかし、ここまで彼の弁論が進んで来た時に裁判長閣下は言を挟んで（あたかも彼の言つたことが真実ではなかつたかのようにしかつめらしい顔をしながら）、自分はこの法官席に坐つていて、そういうあてつけを忍ぶことは出来ない、と言つた。

ストライヴァー氏はそれから自分の方の数人の証人を呼び出し、

そしてクランチャード君は、次には、検事長閣下がストライヴァードとクライドがさつき陪審官に合せて造つた衣服をそつくり裏返しにしてゆくのを、傾聴しなければならなかつた。検事長閣下は、バーサードとクライドが彼の考えていたよりも百倍も善良であり、被告が百倍も悪人であることを述べ立てた。最後に、裁判長閣下自身が立つて、その衣服を時には裏返しにしたり、また時には表返しにしたりしたが、だいたいにおいて、それを被告の屍衣になるようにてきぱきと裁つて型をつけて行つた。

それから今度は、陪審官たちが審議するために向うへ向き、例の大蠅がまた群つて來た。

これまであのように永い間法廷の天井を眺めながら腰掛けてい

たカートン氏は、この騒ぎの中にあつてさえ、座席も変えなければ姿勢も変えなかつた。彼の同僚弁護士のストライヴァー氏は、自分の前にある書類を一纏めにしながら、近くに腰掛けている人々と私語したり、時々は陪審官の方を心配そうにちらりと見たりしていたし、すべての観客は多少とも移動したり、新たに集団を造つたりしていたし、裁判長閣下でさえ、その席から立ち上つて、壇上をゆつくりと往つたり来たりして歩いていて、観衆の心に裁判長も興奮しているのではなかろうかと疑わせないではなかつたのに、この一人の男だけは、<sup>やぶ</sup> 破けた弁護士服は半ば脱げかかつたまま、また、きちんとしていないその<sup>かつら</sup> 仮髪はちょうどさつき脱いだ後に彼の頭の上に偶然載つかつたようにかぶり、両手はポケツ

トに入れ、眼は終日そうであつたように天井に向けたまま、反り  
 返つて腰掛けているのだった。彼の態度に何となく特に無頓著な  
 ようなところのあるのが、彼を不体裁に見せたばかりではなく、  
 疑いもなく彼と被告との間に存するあの強い類似（それは、二人  
 が見比べられた時には、彼が一時だけ眞面目<sup>まじめ</sup>になつたために、強  
 められたのであつた）を非常に減じたので、見物人の多数の者た  
 ちは、今彼に注目すると、その二人がそんなに似ているとは思え  
 なかつたはずだがと互に言い合つたくらいであつた。クランチヤ  
 ー君はその考えを自分のすぐ隣の者に話して、それからこう言い  
 足した。「あの男なんかにやあ弁護の口なんざ一つも手に入りつ  
 こねえつてことにや、わつしは半ギニー賭けたつていいでさあ。

一つだつて手に入りそうな奴にや見えやしねえ。そうでしよう？」  
 だが、このカートン氏は、場内の細かなことを、見掛よりはも  
 つと呑込んでいたのだつた。というのは、マネット嬢の頭が父親  
 の胸へがくりと垂れた時に、彼は、それを見つけて、聞き取れる  
 声で「守衛！　あすこの若い婦人を介抱してあげろ。あの紳士に  
 手伝つて外へ連れ出してあげるんだ。あの婦人が倒れようとして  
 いるのがわからんか！」と言つた最初の人であつたから。

彼女が連れ去られた時に、人々は彼女を大いに不憫がつた。ま  
 た彼女の父親に大いに同情した。自分の監禁の時代を思い出させ  
 らることは、彼には明かに非常な苦痛であつたのだろう。彼は  
 訊問を受けた時に強烈な内心の動搖を色に現した。そして、彼を

老人に見えさせるあの思いに沈んだような考え方んでいるような様子は、それ以来ずっと、重苦しい雲のように、彼に蔽いかかつていたのであつた。彼が出て行つた時に、向き直つてちょっと待つていた陪審官は、陪審長を通じて発言した。

彼等は意見が一致しないので、退廷して協議したいと希望した。

裁判長閣下は（たぶん例のジョージ・ウォシントンの件を心に思い浮べていたのであろう）彼等の意見が一致しないということに幾分驚いた様子を示したが、監視附きで退廷してもよろしいという意向を告げて、自分も退廷した。公判は終日続き、やがて法廷内のランプともが点され出した。陪審官は永い間退席しているだろうという噂が立ち始めた。見物人たちは飲食しにぼつりぼつりと去

り、囚人も被告席の後の方へ引下つて、腰を下した。

ロリー氏は、さつきあの若い婦人とその父親とが出た時に外へ出て行つていたが、この時再び入つて来て、ジエリーを手招きした。ジエリーは、興味が弛んで人が減つていたので、容易く彼の近くへ行くことが出来た。

「ジエリー、お前何か食べたいなら、食べに行つてもいいよ。だが、遠くへは行かないようにな。陪審官が入つて来る時には間違いなく聞いていてほしいのだ。ちよつとでも陪審官に遅れちゃいけないよ。その評決をお前に銀行まで持つて帰つてもらいたいんだからね。お前はわたしの知つてる中じや一番足の疾い使いだから、わたしそりはずつと前にテムブル関門<sup>バ</sup>に著くだろう。」

ジエリーエはちょうど指の節<sup>ふし</sup>で触れられるだけの幅<sup>ひたい</sup>の額<sup>ひたい</sup>をしていた。それで彼はこの通牒と一シリングとを受けたしに指の節を額に触れた★。ちょうどその時にカートン氏がやつて来て、口リー氏の腕に手をかけた。

「あの御婦人はいかがですか？」

「非常に苦しんでおられます。が、お父さんがいたわつておられますし、法廷から出たのでそれだけ気分がよいようですよ。」

「僕が被告にそう話してやりましょう。あなたのような体面を重んずる銀行員が、公然と被告と口を利いているのを見られては、よくないでしようからねえ。」

口リー氏は、あたかも自分が心の中でその点を考えていたこと

に気づいたかのように、顔を赧らめた。それでカートン氏は被告人席の外側の方へ歩いて行つた。法廷の出口もその方向にあつたので、ジエリーは体中を眼にし、耳にし、忍<sup>しのびがえ</sup>返<sup>返</sup>しにしながら、その後について行つた。

「ダーネー君！」

囚人はすぐに進み出て來た。

「君はもちろんあの証人のマネット嬢<sup>ミス・マネット</sup>の様子を聞きたがつてているだろうね。あの人はやがてよくなるよ。君の見たのはあの人の興奮の一番ひどい時だつたんだから。」

「私がその原因であつたことを非常にすまなく思つています。私の代りにあなたからある方<sup>かた</sup>に、私の熱心な感謝と一緒に、そう伝

えていただくことは出来ないでしようか？」

「ああ、出来るよ。君が頼むなら、伝えてやろう。」

カートン氏の態度はほとんど横柄と言つてもいいくらいに無頓著であつた。彼は、囚人から半ば身をそむけて、被告人席に片肱で凭れかかりながら、立つていた。

「ぜひお頼みします。私の心からの感謝を受けて下さい。」

「ダーネー君、」とカートンは、やはり半ばだけ彼の方へ向きながら、言つた。「君はどうなると思つていてるかね？」

「最悪の事を予期しています。」

「そう予期しているのが一番賢明だし、また一番ありそうなことだね。だが、陪審官たちが退出したことは君に有利だと僕は思う

な。」

法廷の出口にぶらぶらしていることは許されなかつたので、ジエリーは、それ以上は聞かずに、その二人——容貌では互に實に似ていながら、態度では互にまるで似ていない——兩人とも上にある鏡に姿を映しながら相並んで立つている——を後に残して出て行つた。

階下の盜賊や悪漢などの雜沓しているような廊下では、一時間半という時間は、羊肉パイとビールとの助けを藉りて過してさえ、のろのろとたつて行つた。その嗄れ声の走使しゃがはしりづかいは、それだけの食事をとつた後に一つの長腰掛に窮屈そうに腰掛けながら、ついうとうと居睡りしかけたが、その時、声高なざわめきの声が

起り、法廷へと続く階段を人々がどつと潮のよう<sup>うしお</sup>に速く駆け上つて行くので、彼もその中に一緒に運ばれて行つた。

「ジエリー！ ジエリー！」彼が戸口のところまで行くと、ロリ一氏はそこで既に彼を呼んでいた。

「ここです、旦那！ 戻つて来ますなあまるで戦争でさあ。ここにおりますよ、旦那！」

ロリ一氏は人込みの間から一枚の紙を彼に手渡しした。「大急ぎでな！ お前受け取つたか？」

「へえ、旦那。」

その紙に急いで書いてあつたのは「放免」という語であつた。

「もしかんたがもう一度あの『甦る』<sup>よみがえ</sup>つて伝言<sup>ことづて</sup>を出して下すつ

たんなら、「とジエリーはぐるりと向き変つた時に呴いた。「わ  
つしも今度はあんたの言う意味がわかつたんだがなあ。」

彼はオールド・ベーリーをすっかり出てしまうまでは、それ以外に何かを言う機会は、あるいは何かを考える機会さえも、なかつた。なぜなら、群集は彼の足をさらいそうなくらいの猛烈な勢でどつと押し出していたし、あてはず当の外れた青蠅が他の腐肉を捗し求めに四方へ散つてゆくかのように、蠅の喰るような声高いうわあつという声が街路へ流れ出ていたからである。

## 第四章 祝い

法廷の薄暗い灯火のついている廊下から、終日そこで煮られていた人間の蒸煮肉(シチュー)の最後の滓かすが濾し取られている時に、マネット医師と、その娘のリューシー・マネットと、被告人の弁護の依頼者の口リー氏と、被告の弁護人のストライヴァー氏とが、チャールズ・ダーネー氏——今釈放されたばかりの——を取囲んで、彼が死から免れたことに祝詞を述べていた。

そこよりはもつとずっと明るい明りで見ても、面貌の理智的な、举止の端正なマネット医師が、パリーのあの屋根裏部屋にいた靴

造りだと認めることは、むずかしかつたであろう。けれども、誰でも彼を二度目に見ると、おやつと思つて彼を見直さずにはいられなかつたろう。もつとも、そうしたところで、まだ、彼の低い沈んだ声の物悲しい調子や、何も明かな原因もなしに発作的に彼に覆いかぶさる放心状態までは、観察する機会は来なかつたであろうが。ただ一つの外部からの原因、それは彼のあの永年の間の永引いた苦しみに話が触れることであつたが、それはいつでも——さつきの公判の時のように——彼の魂の奥底からそういう状態を喚び起すのであつた。が、一方、その状態はまたその性質上ひとりでに起つて、彼の上に暗雲を曳いて來ることもあつた。それは、彼の身の上をよく知らない人々にとつては、まるで、三百マ

イルも離れたところにある本物のバステイユ★が夏の太陽を受けて彼の上に投げかける影を見たかのように、不可解なことだつた。

彼の心からこの陰鬱な物思いを払い除ける魅力を持つてゐるのは彼の娘だけであつた。彼女は、彼をその災難の彼方かなたの過去と、その災難の此方こなたの現在とに結びつける黄金こがねの糸であつた。そして彼女の聲音、彼女の顔の明るさ、彼女の手の接触は、ほんんどいつも、彼には強い有益な効力を持つていた。絶対にいつでも、という訳ではない。彼女にも自分の力の及ばなかつた場合もあるのを思い起すことが出来たからである。が、そういう場合はわざかでちよつとしたものであつたので、彼女はそんなことはもうす

んでしまつたものと信じていたのであつた。

ダーネー氏は熱情と感謝とをこめて彼女の手に接吻し、それからストライヴィアーレ氏の方へ振り向いて、彼に厚く礼を言つた。ストライヴィアーレ氏は、三十を少し越しただけだが、実際よりは二十歳も老けて見える、太つた、大声の、赭ら顔の、ざつくばらんな

男で、

敏<sup>デリカシ</sup>

感などというひけめは一切持ち合せていなかつた。

人<sup>ひとなか</sup>中へも会話へも他人を肩で押し分けて（精神的にも肉体的にも）割込んでゆく押の強いたちであつた。それは、彼が実生活でも他人を肩で押し分けて出世してゆくことを十分証拠立てているのだつた。

彼はまだ仮髪<sup>かつら</sup>と弁護士服とを著けていた。そして、人のいい口

リーフをその一団からすっかり押し出してしまって、自分のさつきの弁護依頼人に向つて肩を張つて、言つた。「わたしは君を立派に救い出してあげたんで嬉しいですよ、ダーネー君。あれはどうも不埒な告発でした。實に不埒なものでした。だが、そのためにはかえつてうまくゆきそうだつたんですね。」

「私は一生御恩に著ます、——二つの意味で。」と彼のさつきの弁護依頼人が、相手の手を取りながら、言つた。

「わたしは君のためにわたしの全力を尽したんです、ダーネー君。  
そしてわたしの全力は他の人に劣らんつもりですがね。」

「劣るどころかずっと優っていますよ。」と明かに誰かが言わなければならぬところだつたので、ロリー氏がそれを言つた。た

ぶん、少しの私心もなかつたという訳ではなく、もう一度元のところへ割込もうという私心的な目的もあつてのことらしかつた。

「あなたはそうお考えですかね？」とストライヴィアー氏は言つた。  
 「なるほど！」あなたは一日中出席しておられたんだから、御存じのはずだ。それに、あなたは事務家ですからなあ。」

「ところでその事務家としまして、」とロリー氏が言つた。彼は、その法律に精通した弁護士に先刻その一団から肩で押し出されたようにして、今度はその一団の中へ肩で押し戻されていたのである。——「その事務家としまして、私はマネットドクター・マネット先生にお願いいたしたいんですが、この会議をこれで打切りにして、私どもみんなを家うちへ帰させていただきたいのですね。リューシーさんは工

合がお悪いようですし、ダーネー君は恐しい目に遭われたのです  
し、私どもは疲れ切つておりますから。」

「御自分だけのことを話しなさい、ロリーサン。」とストライヴ  
アーが言つた。「わたしはまだしなけりやならん夜の仕事がある  
んだ。御自分だけのことを話しなさい。」

「私は、自分のためと、」とロリー氏は答えた。「それからダーネー君に代つて、申すのです。それからリューシーさんにも代つて、それからまた——。リューシーさん、あなたは私が私どもみんなに代つて話してもいいとお考えになりませんか？」彼はきつぱりと彼女にそう尋ねて、彼女の父親にちらりと目をやつた。

彼の顔はダーネーをひどく詮索的な眼付で見つめていわば凍つ

たようになつていた。そのじつと見入つた眼付はだんだんと深まつて、嫌悪と疑惑との蹙め顔となり、恐怖の色をさえ交えた。そういう奇妙な表情を浮べたまま彼の思いは彼からふらふらと脱け出ていたのだ★。

「お父さま。」とリューシーは、自分の手をそつと彼の手に載せながら、言った。

彼は幻影をゆつくりと払い除けて、彼女の方へ振り向いた。

「あたしたちはお家うちへ帰りましようか、お父さま？」

長い息をつきながら、彼は答えた。「うむ。」

放免された囚人の友人たち★は、彼がその晩釈放されることはあるまいと考えて、——そう考えたのは彼自身が発頭人なのであ

つたが、——もう散り散りになつてしまつていた。廊下の灯火はほとんど全部消され、鉄の門はぎいっと軋り音を立てて鎖されかけ、その氣味の悪い場所は、明日の朝、絞首台や、架刑台や、笞刑柱や、焰鉄やきがねなどの興味が再び見物人を集めるまでは、人気がなくなつてしまつた。リューシー・マネットは、父親とダーネー氏との間に挟まれて歩きながら、戸外へ出た。一台の貸馬車が呼び止められて、父と娘とはそれに乗つて去つて行つた。

ストライヴァー氏は廊下で皆と別れて、肩で風を切つて衣裳室へと引返して行つてしまつていた。その一団に加わりもせず、また彼等の中の誰とも一語を交かわしもせずに、壁の蔭の一番暗いところに凭れかかつていたもう一人の人間は、黙々として皆の後から

ぶらぶらと出て行つて、馬車が馳せ去るまで見送つていた。彼はそれからロリー氏とダーネー氏とが鋪道に立つてゐるところまで歩いて行つた。

「やあ、ロリーさん！ 事務家ももう今じやあダーネー君と口が利けるようになつたという訳ですかな？」

誰一人としてこの日の弁論におけるカートン氏の役割について少しでも感謝の意を表した者はなかつた。誰一人としてそれを知りもしなかつた。彼は法服を脱いでいたが、そのために別段風采がよくなつてゐるという訳でもなかつた。

「事務家の心が善良な直情と事務上の体面との二つに分れる場合に、その人がどんなつらい思いをするものかということが君にわ

かれば、君も面白がるんだろうがね、ダーネー君。」

ロリー氏は顔を赧くして、むきになつて言つた。「あなたはさつきもそのことを仰しやいましたね。会社などへ勤めているわれわれ事務家は、自分が自分の思い通りにならんのですよ。われわれは自分自身のことよりももつと会社のことを考えなくちやあならんのです。」

「わかつてますとも、わかつてますとも。」とカートン氏は無頓著に答えた。「そう怒つちやいけませんよ、ロリーさん。あなたが人に劣らない善い人だつてことは、僕は少しも疑いませんよ。いや、人より以上に、と言つてもいいでしょう。」

「それにですな、実際、」とロリー氏は、相手の言うことにも構

わざに、言い続けた。「わたしにはあなたがそういう事柄にどういう関係がおありになるのか全くのところわからんのです。わたしはあなたよりはよっぽど年長者だから、それに免じて言わしてもらえるならですな、そういうことがあなたの関する事務だとはわたしには全くわからんのです。」

「事務ですって！ とんでもない、僕には事務なんてものはありますやしませんよ。」とカートン氏が言つた。

「事務がないとはお気の毒なことですな。」

「僕もそう思います。」

「もしもありでしたら、」とロリー氏は言い続けた。「たぶんあなただつてそれに身をお入れになるでしようがね。」

「いやいや、どういたしまして！——身を入れるものですか。」  
とカートン氏が言つた。

「えつ、何ですつて！」と、彼の冷淡さにすっかりかんかんになつて、ロリー氏は叫んだ。「事務は非常に結構なものですし、また非常に尊敬すべきものです。それでですな、事務上から拘束を受けて黙つていたり差控えていたりしなければならないとしても、ダーネー君のような寛大な青年紳士は、その辺の事情を大目に見られることなどはちゃんと心得ておられるのです。ダーネー君、おやすみなさい。御機嫌よう！あなたが今日命拾いをされたのはこれから順調な幸福な生涯を送られるためであるようにと思ひますよ。——おうい、轎かご★だ！」

その弁護士にと同様にたぶん自分自身にも少し腹を立てて、口  
リー氏はせかせかと轎に乗つて、テルソン銀行へと担がれて行つ  
た。ポルト葡萄酒★の匂いをぶんぶんさせて、全くの素面しらふとは見  
えないカートン氏は、この時笑い声を立てて、ダーネーの方へ振  
り向いた。――

「君と僕どが落合うとはこれあ不思議な　り合せだ。自分にそつ  
くりの人間どこで二人だけでこの鋪しきいし石の上に立つてゐるなん  
て、君にとつても不思議な晩に違ひないだらう?」

「私にはまだ、」とチャールズ・ダーネーが答えた。「この世へ  
戻つたような気が十分しないのです。」

「そいつあ不思議じやないよ。何しろ君があの世の方へだいぶ

遠くまで行きかけたのはついさつきのことだからな。君は気が遠くなっているようなのに口を利いているね。」

「私は確かに気が遠くなりそうな気がしてきました。」

「それなら一体どうして君は食事をしないんだ？ 僕は、あの馬鹿野郎どもが君をどちらの世界に置いたものか——この世か、それともどこか別の世か——と頭をひねっている間に、食事をしたのさ。うまい食事をさせてくれる一番近くの飲食店へ案内しようか。」

腕と腕とを組み合せながら、彼は相手の男をひっぱつて、ラツドゲート・ビル★を下つてフリート街に出て、それから、廊道を上つて一軒の飲食店へ入つた。そこで二人は小さな一室に案内さ

れ、チャールズ・ダーネーは上等のあつさりした食事と上等の葡萄酒とでまもなく力を恢復していた。その間カートンは同じ卓子に向つて彼と向い合せに腰掛けていて、前に自分の別なポルト葡萄酒の罐を置き、例の半ば横柄な態度をすつかり現していた。「君はもうこの世の人間に戻つたような気がするかね、ダーネー君？」

「私はまだ時間と場所については恐しく混乱していますが、それくらいの気がするほどには気分がよくなりました。」

「それはさぞかし御満足だろうね！」

彼は苦々しげにそう言つて、また自分の杯に一杯に注<sup>つ</sup>いだ。それは大きな杯であつた。

「ところが僕はだ、僕の何よりの願いは、自分がこの世のものだ  
 ということを忘れないということなんだ。この世は僕にとつては  
 ——こんな酒を除けばだね——何のいいところもないし、また、  
 僕もこの世にとつてはそうなんだ。だから、その点では僕たちは  
 大して似ちやあいないんだな。いや、そればかりか、僕たちはど  
 の点でも大して似ていないうな気がして來たよ、君と僕とはね

。

「<sup>ひるま</sup><sup>きうつ</sup>眞間の感情の激動で頭が乱れてもいたし、粗野な振舞のこの生  
 写しの人間と一緒にそこにいるのが夢のように思れもするので、  
 チャールズ・ダーネーはどう答えていいかまごついた。で、どう  
 とう、何も答えなかつた。

「さあ、もう君の食事もすんだのだから、」とカートンはやがて言つた。「なぜ君は健康を祝きないのさ、ダーネー君？　なぜ君は乾杯をしないんだい？」

「何の祝杯を？　何の乾杯を？」

「なあに、そいつあ君の口先まで出でているさ。そうあるべきだよ、そうに違ひないよ。そうだということは僕は誓つてもいいぜ。」

「では、  
マネツト嬢に！」  
ミス・マネット

「では、  
マネツト嬢に！」  
ミス・マネット

その乾杯をしている間相手の顔をまともに眺めていたカートンは、自分の杯を肩越しに壁に投げつけた。杯は粉微塵に碎けた。  
それから、彼は呼鈴を鳴らして、別のを持つて来いと言いつけた。

「あれなら暗がりで手を貸して馬車に乗せてやりがいのある美人だね、ダーネー君！」と彼は、新たな杯に酒を注ぎ込みながら、言つた。

ちよつと眉を顰めて簡単に「そう。」と言うのがその答であつた。

「あれなら同情されたり泣いてもらつたりされがいのある美人だよ！ どんな気持がするかなあ？ ああいう美人の同情と憐憫の対象になるのなら、命がけで裁判されるだけの値打があるかね、ダーネー君？」

もう一度ダーネーは一言も答えなかつた。

「あの女<sup>ひと</sup>は、僕が君の伝<sup>ことづて</sup>言<sup>こと</sup>を伝えてやつたら、それを聞いてと

ても喜んでいたよ。いや、なあに、あの女ひとが喜んでいる素振りを見せたという訳じやあないんだがね。喜んでいたろうと僕が推量しているのさ。」

こう言われたことから、ダーネーは、この不愉快な相手が昼間の難関で我から進んで自分を助けてくれたことを、折よく思い出した。それで彼は話をそこへ向けて、彼にその礼を言つた。

「僕はどんな礼だつて言つてほしくもなければ、言つてもらうだけの資格もないのさ。」というのがその無頓著な応答だつた。

「第一に、あれは何でもないことだし、第二には、僕はなぜあんなことをしたのか自分でもわからないんだ。ダーネー君、僕は君に一つ尋ねたいことがあるんだがね。」

「どうぞ。あなたの御親切な御尽力に対してわずかな返礼ですが。  
。」

「君は僕が君に特別に好意を持つてていると思うかね？」

「全くのところ、カートン君、」と相手は妙に度を失つて返答した。「私はそんなことを考えてみたことがないんです。」

「でも今ここで考えてみたまえ。」

「あなたはいかにも私に好意を持つておられるように振舞われました。が、好意を持つておられるとは私は思いません。」

「僕も自分が好意を持つているとは思わないんだ。」とカートンが言つた。「僕は君の頭のよさにすこぶる敬服するようになつたよ。」

「それについて、「」とダーネーは、呼鈴を鳴らしに立ち上りながら、言い続けた。「そのために、私が勘定を持つて、私たちがどちら側とも悪感情なしでお別れすることは、差支えがないようにしたいのですね。」

カートンが「そりやあちつとも差支えはないとも！」と答えたので、ダーネーは呼鈴<sup>ベル</sup>を鳴らした。「君は勘定を全部持つか？」とカートンが言つた。肯定の返事をすると、「じやあこれと同じ葡萄酒をもう一パイント★おれに持つて来てくれ、給仕。それから十時になつたらおれを起しに来てくれ。」

勘定書を払うと、チャールズ・ダーネーは立ち上つて、カートンにおやすみを言つた。その挨拶には返答せずに、幾らか嚇すよ<sup>おど</sup>

うな挑戦するような態度で、カートンも立ち上つて、それから言った。「最後にもう一言だ、ダーネー君。君は僕が酔つ払つてい」と思ふかね？」

「あなたはだいぶお飲みになつたと私は思いますがね、カートン君。」

「思うつて？ 君は僕が飲んでいたことは知つてゐるじゃないか。」

「そう言わなければならぬのでしたら、私はそのことを知つています。」

「ではなぜ飲むかつてことも序に知らしてあげよう。僕はね、失望した奴隸なんだよ、君。僕は誰一人だつて好きでもなければ気

にもかけないし、また誰一人だつて僕を好きでもなければ気にもかけやしないんだ。」

「たいそう遺憾なことです。あなたは御自分の才能をもつと有効に御利用出来ますでしよう。」

「そうかもしだんさ、ダーネー君。そうでないかもしだんさ。だが、君は酒を飲まんからつていい気になつてちやいけないぜ。どんなことになるか君だつてわかりやしないんだからね。おやすみ！」

一人だけになると、この不思議な人物は蠟燭を取り上げて、壁に懸っている鏡のところへ行き、それに映る自分の姿を綿密にうち眺めた。

「お前はあの男に特別に好意を持つてゐるのか？」と彼は自分自身の姿に向つて呟いた。「お前に似てゐる男だからといつて特別に好意を持たなければならん訳があるのかい？ 人に好意を持つなんてことはお前の柄がらじゃない。それはお前も承知してゐるはずだ。えい、畜生め！ 何というお前の変り果てようだ！ お前の堕落しない前の姿と、お前のなれたかもしだれない姿を見せてくれた男だからといって、その男を好くというのは立派な理由さね！」  
あの男と位置を換えてみろ。そうしたら、お前はあの男と同じようにあの青い眼で見つめられたり、あの男と同じようにあの不安そうな顔で同情されたりしたろうか？ さあ、いいか。遠慮なくあからさまに言つてみろ！ お前はあいつを憎んでゐるのだ。」

彼は心の慰めを一パイントの葡萄酒に求めて、それを数分のうちにすっかり飲み尽すと、それから両腕の上に突つ伏して寐込んでしまった。彼の髪の毛は卓子テーブルの上に乱れかかり、蠅燭の長い蠅垂れが彼の上にたらたらと滴り落ちるのだつた★。

## 第五章 豺 やまいぬ

その頃は飲酒の時代であつて、大抵の人は豪飲したものだつた。時がその後そういう習慣に齋した改善は極めて著しいものであつたので、その頃の一人の男が完全な紳士としての体面を穢さずに、平生よく一晩のうちに飲んだ葡萄酒やポンス★の量を、控目に述べても、今日では、馬鹿馬鹿しい誇張と思われるほどであろう。法律家という智的職業階級も、その大酒の習癖にかけては、確かに他のいかなる智的職業階級にもひけを取らなかつた。また、もう既にすんずん他人を肩で押し除けて手広く儲けのある商売をや

つて いるストライヴア－氏も、その道にかけては、法曹界の酒気抜きの競争にかけてよりも以上に、彼の同輩たちにひけを取りはしなかつた。

オールド・ベーリーの寵児であり、普通刑事裁判所の寵児であるストライヴア－氏は、自分の登つて来た梯子の下の方の段を用心深くも切り落し始めていた。普通刑事裁判所もオールド・ベーリーも今ではその寵児を特に腕を差し伸べて招かねばならなくなつた。そして、民事高等裁判所★の裁判長の面貌の方へ肩で他人を押し除けて突き出でているストライヴア－氏の血色のよい顔が、ちようど庭一面に生い繁つた仲間のけばけばしい花の間から太陽をめがけてぐつと伸び出でている大きな向日葵<sup>ひまわり</sup>のように、仮髪<sup>かつら</sup>の花

壇★からにゅつと現れ出ているのが、毎日のようく見受けられたのであつた。

一頃、ストライヴァー氏は口達者で、無遠慮で、敏捷で、大胆な男ではあるが、弁護士の伎倆の中で一番目立ち、一番必要なものの一つであるところの、山なす陳述記録から要点を抜き出すというあの才能を持つていない、ということは法曹界で評判であつた。しかし、このことについては著しい進歩が彼に現れて來た。仕事が多くなればなるほど、その精髓を掴む彼の能力が増して來るようと思われた。そして、夜どんなに晩くまでシドニー・カートンと一緒に痛飲していくも、彼は翌朝には必ず自分の要点をちゃんと心得ていた。

人間の中でも一番怠惰な、一番前途の望みのないシドニー・カートンは、ストライヴァーには大切な味方であつた。この二人がヒラリー期からミケルマス期までの間に★一緒に飲んだ酒の量は、王の軍艦一隻でも浮べられそうなくらいであつた。ストライヴァーは、いつも両手をポケットに突っ込んで、法廷の天井ばかり見つめているカートンがいなくては、どこででも、決して事件を引受けはしなかつた。彼らは巡回裁判★にも一緒に出かけた。そしてそこでさえも彼等のいつも通りの酒宴を夜晚おそぞくまで続けるのだった。そして、夜がすっかり明け放れてから、カートンが、どちらか何かのように、こそそとひよろひよろと自分の下宿へ帰つてゆくのが見られるという噂が伝わつた。遂に、そういう事柄に

興味を持つてゐるような連中の間には、シドニー・カートンは決して獅子にはなれないだろうが、非常に立派な豺★やまいぬであるということや、彼はそういう賤しい資格でストライヴァーに奉仕しているのだということが、噂され始めたのであつた。

「十時ですよ、旦那。」と彼がさつき起してくれと頼んでおいた飲食店の男が言つた。——「十時ですよ、旦那。」

「ううん、どうしたつて？」

「十時ですよ、旦那。」

「何だつていうんだい？ 夜の十時だつていうのか？」

「そうですよ、旦那。あなたさまが起してくれつてわたしに仰しやいましたんで。」

「ああ！ そうだつたな。よし、よし。」

何度もまたうとうとと眠りかけようとするのを、給仕が続けざまに五分間も炉火を搔き　　して手際よく妨げたので、彼はとうとう立ち上つて、帽子をひよいと頭にのつけて、外へ出た。彼は道を曲つてテムブルへ入り、そして、高等法院どおり通と書館どおり通の鋪道を二回ばかり歩調正しく歩いて元気を回復してから、ストライヴァーの事務室に入つて行つた★。

この二人の協議には一度も加わつたことのないストライヴァーの書記はもう帰つてしまつていて、ストライヴァー御本人が扉ドアを開けた。彼はスリッパを穿き、ゆつたりした寝衣を著て、もつと寛ぐために咽のどもとをむき出しにしていた。彼の眼の周りには、ジ

エフリーズ★の肖像画からこの方かた、法律家仲間のすべての酒客に見られる、また、画の技巧でさまざまに違うが、いずれの飲酒時代の肖像画にも認められる、あの幾らか氣違けちがいじみた、不自然な、ひからびた斑点があつた。

「少し遅いぜ、記憶の名人。」とストライヴァーが言つた。

「ほほいつもの時間だよ。十五分くらい遅いかもしだんな。」

二人は、書物がずらりと列んで、書類が取散らかっている、すけた一室へ入つた。そこには炉火があかあかと燃えていた。炉側棚には湯沸しが湯気を立てていたし、ばらばらに撒き散らばつてゐる書類の真中に、一つの卓テーブル子がぴかぴかと光つていて、その上にはたくさんの葡萄酒と、ブランディーと、ラム酒と、砂糖

と、レモンなどが載せてあつた。

「君は一罐やつて来たようだね、シドニー。」

「今晚は二罐だつたろう、確か。僕は今まで昼の弁護依頼人と一緒に食事をしていたんだ。いや、あの男の食事をするのを見ていたつて言うかな。——どつちだつて同じことさ！」

「君があの顔の似ているところへ持つて行つたのはね、シドニー、あれは素敵な論点だつたよ。どうして君はあんなとこを掴ませたんだい？ いつあんなことを思い付いたのかね？」

「おれはあいつはずいぶん美男だなと思つたんだ。それから、おれだつて運がよかつたら、奴と同じぐらいの人間になれてたううと考えたんさ。」

ストライヴァー氏はその年に似合わぬ布袋腹を揺がせるほどに笑つた。「君にして幸運か、シドニー！ 仕事にかかるんだ、仕事にかかるんだ。」

大いに不機嫌な顔をしながら、豺は自分の衣服を寬げて、隣室に入つて行つたが、冷水の入つている大きな水差と、洗盤と、一枚のタオルとを持つて戻つて來た。そのタオルを水に浸して、少し絞しぼると、彼は見るも物凄い工合にそれを摺たたんで頭の上にのつけて、卓テーブル子に向つて腰を掛け、それから言つた。「さあ、用意が出来たぞ！」

「今夜の煮詰め仕事は大してないよ、記憶の名人。」とストライバー氏は、書類を見ながら、陽気に言つた。

「どれだけ？」

「たつた二口さ。」

「むづかしい奴を先にくれ。」

「ほら、それだよ、シドニー。どしどしやるんだ！」

獅子は、それから、酒の載つている卓子の一方の側にある長椅子に背を凭れかけてゆつたりと構えた。豺の方は、そのもう一

方の側にある、書類の散乱している自分自身の卓子に向つて、

酒罐と杯とがすぐに手の届くところに腰掛けた。二人とも頻りに

酒の卓子に手を出したが、その出し方は銘々で違つていた。獅

子の方は、大抵は両手を腰の帯革(バンド)にかけて凭れていて、炉火を眺めたり、時々は何か手軽な方の書類をいじつたりしていた。豺は、

眉を蹙めて一心不乱の顔をしながら、仕事にすっかり夢中になつてゐるので、自分の杯を取ろうと差し伸べる手に眼をくれさえしないくらいで、——その手は、脣へ持つてゆく杯に当るまでには、一分かそれ以上もそのあたりを探りさぐることがたびたびあつた。

二度か三度、当面の問題がひどくこんがらかつて来たので、豺もどうしても立ち上つて、例のタオルを改めて水に浸さなければならなくなつた。こうして水差と洗盤のところへ巡礼すると、彼はどんな言葉でも言い現せないくらいの奇抜な濡れ頭巾をかぶつて戻つて來るのであつた。その奇抜さは、彼が氣懸りそうな眞面目まじめくさつた顔をしているので、なおさら滑稽なものになつた。

とうとう豺は獅子のためにこぢんまりした食事を纏めてしまつ

て、それを獅子に差し出しにかかった。獅子はそれを細心の注意をしながら食べ、それに自分の扱り好みもし、自分の意見も加えた。すると豺はそのいずれにも助力してやつた。その食事がすつかり風味されてしまうと、獅子は再び腰の帯革<sup>バンド</sup>に両手を突つ込み、ごろりと横になつて考え込んだ。豺は、それから、なみなみと注いだ一杯の酒で咽<sup>のど</sup><sub>うるお</sub>を潤したり、頭のタオルを取替えたりして元気をつけると、二番目の食物を集めにかかつた。それも同じような風にして獅子に与えられ、それが片附いたのは時計が朝の三時を打つた時だつた。

「さあ、これですからんだんだから、シドニー、ポンスを一杯注<sup>つ</sup>ぎたまえよ。」とストライヴィアー氏が言つた。

豺は、また湯気の立つていたタオルを頭から取つて、体をゆすぶり、欠伸をし、ぶるぶると身震いしてから、言われる通りにした。

「今日のあの検事側の証人の件じや、シドニー、君は実にしつかりしてたね。どの質問もどの質問も手応えがあつたからねえ。」

「おれはいつだつてしつかりしてるさ。そうじやないかね？」

「僕はそれを否定しないよ。何が君の御機嫌に触つたんだい？まあボンスをひつかけて、機嫌を直したまえ。」

不満らしくぶつぶつ言いながら、豺は再び言われる通りにした。

「昔のシユルーズベリー学校★時代の昔の通りのシドニー・カートンだね。」とストライヴァーは、現在と過去の彼を調べてでも

みるよう<sup>一</sup>に彼の上に頭を頷かせながら、言つた。「昔の通りのぎ<sup>シ</sup>  
 いこばつ<sup>一</sup>たんのシドニーだね。今上つて<sup>一</sup>いるかと思えばもう下つ  
 て<sup>一</sup>いる。今元氣かと思えばもうしょげてる！」

「ああ、ああ！」と相手は溜息をつきながら答えた。「そうだよ  
 ！ 相も變らぬ運り合せ<sup>めぐあわ</sup>の、相も變らぬシドニーさ。あの頃でさ  
 え、おれは他の子供たちに宿題をしてやつて、自分のは滅多にや  
 らなかつたものだ。」

「なぜやらなかつたんだい？」

「なぜだかわかるものか。おれの流儀だつたんだろうよ。」

彼は、両手をポケットに突つ込み両脚を前にぐつと伸ばしたま  
 ま、炉火を眺めながら、腰掛けていた。

「カートン、」と彼の友人は、あたかも炉側格子はその中で不屈の努力が鍛えられる熔鉱炉であつて、昔のシユルーズベリー学校時代の昔の通りのシドニー・カートンのためにしてやれる唯一の思遺りのある仕打は彼をその熔鉱炉の中へ肩で押し込んでやることであるかのように、威張り散らすような風で彼に向つて肩肱を張つて、言つた。「君の流儀はなつていない流儀だし、いつだってそうだつたんだ。君は氣力でも意思でも奮い起すつてことがない。僕を見たまえ。」

「おやおや、これあたまらん！」とシドニーは、今までよりは気軽な機嫌のよい笑い声を立てながら、応答した「君のお説教は御免だよ！」

「僕はこれまでやつて來たことをどんな風にやつて來たかね？」  
とストライヴァーが言つた。 「僕は今やつていることをどんな風  
にやつているかね？」

「僕に給料を払つて手伝わせてやつてるつてとこも少しはあるよ  
うだね。 だが、 僕にそんなことを言つたつて、 風かぜに言つてるよう  
なもので、 無駄だよ。 君はやろうと思うことはやる人間だ。 君は  
いつだつて最前列にいたんだし、 僕はいつだつて後の方にいたん  
だ。」

「僕が最前列へ出るには出るようにならなければならなかつたんだ。  
僕だつて最前列に生れついたんじゃないよ。 そうだろう？」

「僕は君の誕生の儀式に立会つたんじゃないさ。 だが、 どうも僕

の思うところじや君はそこに生れついたらしいな。」とカートンが言つた。そう言つて、彼はまた声を立てて笑い、それから二人とも一緒に笑つた。

「シユルーズベリー時代の前だつて、シユルーズベリー時代だつて、シユルーズベリー時代から後今までだつて、」とカートンは言葉を続けた。「君は君の列に就いていたし、僕は僕の列に就いていたんだ。僕たちがパリーの学生街の学生同志で、フランス語だの、フランス法律だの、その他<sup>ほか</sup>大してためにもならなかつたフランスのパン屑みたいな学問だのを齧<sup>かじ</sup>つていた頃でさえ、君はいつもだつて存在を認められていたし、僕はいつだつて——存在を認められなかつたんだ。」

「で、それは誰のせいだつたのだい？」

「確かに、それが君のせいでなかつたとは僕には請合<sup>うけあ</sup>えないんだ。君はいつだつてぶつかつて割込んで押し除けて突き進んで、ちつとも休まずにいるものだから、僕はどうしても銙びついてじつとしているより他<sup>ほか</sup>に機会<sup>ほか</sup>がなかつたのだ。だが、夜も明けかけようつてのに、昔のことなんか話してるのは、陰気くさいな。僕の帰る前に何か他の話をしてくれよ。」

「それならだ！　あの美しい証人のために僕と乾杯したまえ。」とストライヴァーは自分の杯を挙げて言つた。「君の嬉しい話になつたろう？」

明白にそうではなかつた。というのは彼はまた陰鬱になつて来

たから。

「美しい証人と。」と彼は自分の杯の中を覗き込みながら呟いた。  
 「おれには今日<sup>きょう</sup>昼から夜へかけてずいぶん証人があつたが。君の  
 言う美しい証人とは誰だい？」

「あの絵のように美しい医者の娘さんの、マネット嬢さ。」  
 「あの女が美しい？」

「美しかあないかね？」

「ないね。」

「だつて、君、あの女は満廷讚美<sup>まとう</sup>の的だつたぜ！」

「満廷讚美<sup>まとう</sup>の的がなんだい！ 誰がオールド・ベーリーを美人の  
 審査員にしたのだね？ あれは金髪のお人形というだけさ！」

「君は知らないだろうがね、シドニー、」とストライヴアー氏が、鋭い眼で彼を見ながら、また片手で自分の血色のよい顔をゆつくりと撫でながら、言つた。——「君は知らないだろうがね、僕はある時、君がその金髪のお人形に同情を寄せていたものだから、その金髪のお人形に何事が起つたか素速く見つけたんだ、と思つてたくらいなんだよ。」

「何事が起つたか素速く見つけたつて！ 人形だろうが人形でなからうが、一人の女の子が人の鼻先から一二ヤードのところで気絶したんならだね、望遠鏡なしにだつて見えようじやないか。おれは君と乾杯はするが、美人だということは否定するよ。さあ、これでもうおれは飲みたくない。帰つて寝るとしよう。」

主<sup>あるじ</sup>が蠟燭を持って彼の後から階段のところまで送つて出て、彼が階段を降りるのを照してやつた時、夜明<sup>よあけ</sup>の光はもうそこの汚れた窓から寒そうに覗き込んでいた。彼がその建物から外へ出ると、空気は冷くて陰氣で、空はどんよりと曇り、河★は仄暗くくすみ、あたりの光景は生氣のない沙漠のようであつた。そして砂塵の渦巻が朝風に吹かれてくるくるくるくると つていた。それはまるで沙漠の砂が遠い彼方<sup>かなた</sup>で捲き上つて、それのこちらへと進んで来る最初の砂塵がこの市を覆い始めたようでもあつた。

裡<sup>うち</sup>には精根が尽き果て、周囲は一面に沙漠に囲まれて、この男はひつそりした台地を横切つてゆく途中でじつと立ち止つた。そして一瞬間、立派な野心と、克己と、堅忍との蜃氣楼が、自分の

眼前の曠野に横わるのを見た。その幻影の美わしい都には、夢の  
ような桟敷があつてそこには生命の果実が熟して下つており、希望の泉  
があつて彼の見えるところできらきら光つていた。それもほんの  
一瞬間で、すぐに消え失せてしまった。彼は井桁形に建てられた  
家の高い部屋まで攀じ上ると、顧みられぬがちの寝台(ベッド)の上に衣服  
のままで身を投げかけ、その枕は徒らな涙で濡れるのであつた。

物淋しげに、物淋しげに、太陽は昇つた。立派な才能と立派な  
情緒とを持ちながら、それを適當な方面に働くことが出来ず、自分  
自身の裨益にも自分自身の幸福にもすることが出来ず、自分  
の身を枯らす害虫に気づいていながら、それにわが身を蝕むにま

かせて諦めている男、その昇る太陽はこの男よりも物淋しいもの  
を照さなかつた。

## 第六章 何百の人々

マネット医師の静かな住居は、ソホー広場★から遠からぬ閑静な街の一劃にあつた。四箇月という月日の波があの叛逆罪の公判の上を乗り越えてしまつて、公衆の興味と記憶ということから言え巴、それを遠く海の方へ押し流してしまつていた頃の、ある天氣のよい日曜日の午後、ジャーヴィス・ロリー氏は、自分の住んでいるクランクンウェル★から出かけて、医師と食事を共にしに行く途中、日当りのいい街々を歩いて行つた。ロリー氏は、何度か事務上の事だけに専念することにした後に、結局医師の友人に

なつてしまつたのだつた。そしてその閑静な街の一劃は彼の生活の中の日当りのいい部分となつた。

その天氣のよい日曜日に、ロリー氏は、午後早く、習慣上の三つの理由で、ソホーの方へ歩いていたのだ。第一に、天氣のよい日曜日には、彼は晚餐の前に医師とリューシーと一緒に散歩に岡かけることがたびたびあつたからだし、第二に、都合のよくない日曜日には、彼は家族の友人として彼等と一緒にいて、話をしたり、読書をしたり、窓の外を眺めたり、漫然とその日を過したりする習慣であつたからだし、第三に、彼は自分の解かねばならぬいちよつとしたむずかしい疑問を持つていたのだが、医師の家庭の習わしから考へて、その時がそれを解くに好適な時だというこ

とを知つていたからであつた。

医師の住んでいるその一劃ほど風変りな一劃は、ロンドン中にも見出せそうになかつた。その一劃には通り抜ける路がなかつた。それで、医師の住居の前面の窓からは、いかにも浮世を離れたようなのんびりした様子の漂つてゐる街の氣持のいい小さな通景を見渡すことが出来た。オックスフォード街道★の北には、その頃は建物がほとんどなかつた。そして、今はなくなつてしまつたその野原には、喬木が繁り、野生の草花が生え、山櫨さんざいが花を開いていた。だから、田舎の空気は、あてどもなくさまよつてゐる宿なし乞食のように教区へ弱々しく入り込んで来ないで、自由に元氣よくソホーを吹き流れるのであつた。そして、あまり遠くもな

いところに、よく日の当る南向きの塀がたくさんあつて、季節にはその塀のところで桃の実が熟するのだつた★。

夏の光は朝の間だけその一劃にぎらぎらと射し込んだ。が、街々が暑くなる頃には、その一劃は日蔭になつた。もつとも、日蔭と言つても、そこの向うにきらきら光る日の輝きも見られないほど引込んだ日蔭ではなかつたが。そこは、静かで落著いてはいるが氣の晴れる、涼しい場所であり、不思議によく物音を反響する箇所であり、騒擾の街からの全くの避難港であつた。

そういうような碇泊所にはきまつて船が静かに泊つてゐるはずであり、また事実泊つていた。医師は大きなひつそりした家の二つの階を借りていた。この家では、昼間<sup>ひるま</sup>はいろいろの職業が営ま

れていることであつたが、しかしいつの昼でもさほど物音も聞えず、その物音も夜になればみんな差控えられた。一本の篠<sup>す</sup>懸<sup>すかけ</sup>の樹が緑の葉をさらさらと鳴らしている中庭を通つて行ける裏手の一つの建物の中では、教会のオルガンが造られているということであつたし、また銀が浮彫を施されているということであつたし、それにまた金がある不可思議な巨人によつて打ち延べられてゐるということであつた。この巨人は表広間の壁から金色<sup>こんじき</sup>の片腕を突き出していて★、——あたかも、自分は自分をこのようないに高価な金属に打ち換えてしまつたのだが、訪問者も片つ端から同じ風に金に変えてやるぞと嚇<sup>おど</sup>しつけてでもいるかのようであつた。このようなさまざまな商売にしても、階上に住んでいると

いう噂の一人きりの間借人にとっても、階下に事務所を持つていて、  
という話の魯鈍な馬車装具製作人にとっても、いつでもほとんど音  
も立てなければ姿も見せなかつた。時としては、ちゃんと上衣を  
著込んだ風来の職工が広間を横切つて行つたり、あるいは見慣れ  
ぬ人がそこらを覗き込んだり、あるいは中庭を隔てて遠くからか  
ちんかちんという金物の音が聞えたり、例の金色こんじきの巨人のとこ  
ろからとんとんと打つ音が聞えたりすることがあつた。けれども、  
こういうことは、家の背後の篠懸の樹の中にいる雀と、家の前の  
街の一劃の反響とが、日曜日の朝から土曜日の晩まで思いのまま  
に振舞つてゐる、という法則を証明するために必要な、除外例に  
過ぎなかつた。

マネット医師は、この住居で、彼の昔の評判を知っているとか、また彼の身の上話が口から口へと伝えられるうちにその評判よみがえが蘇つたのを聞いたとかして、彼の許へやつて来る患者を、迎えた。彼の科学上の知識と、精巧な実験を行う時の彼の用意周到さと熟練とのために、彼には他の方面でも相当の依頼者が出来た。で、彼は必要なだけの収入は得られたのであつた。

以上のこととは、ジャーヴィス・ロリー氏が、その天気のよい日曜日の午後、その一劃にある閑静な家の戸口の呼鈴ベルを鳴らした時に、彼の知つており、考えており、気づいていた範囲内のことであつたのである。

「マネット先生ドクター・マネットは御在宅?」

もうお帰りになるはずのこと。

「リューシーさんは御在宅？」

もうお帰りになるはずとのこと。

「<sup>ミス・プロス</sup>プロスさんは御在宅？」

たぶんいらっしゃるだろうが、しかし、お入り下さいと言つていいのか、いらっしゃいませんと言つた方がいいのか、それについてのプロスさんの意向を予想することは、女中には確かに出来ないとのこと。

「わたしは心やすい者だから、」とロリー氏は言つた。「二階へ上らしてもらうとしよう。」

医師の令嬢は、自分の生れた国のことは少しも知らなかつたの

に、その国の最も有用で最も愉快な特徴の一つである、わずかな資力を大いに利用するというあの才能を、その国から生れながらに享けているように見えた。家具は質素なものではあつたが、ただその趣味と嗜好とにだけ価値のあるいろいろの小さな装飾で立ちたせてあつたので、その効果は氣持のよいものであつた。室内の一番大きな物から一番小さな物に至るまでのあらゆるものとの配置、色彩の配合、些細なものの節約や、巧妙な手際や、明敏な眼識や、優れた感覚などで得られた優雅な多種多様さと対照、そういうものはそれ自身としても非常に快いものであると同時に、それの創案者をも非常によく表していたので、ロリーリー氏があたりを見しながら立つてみると、椅子<sup>アラワ</sup><sub>テーブル</sub>子までが、この時分まで

には彼にはすっかりおなじみになつていたあの一種特別の表情★  
のようなものを浮べながら、彼に、お気に入りましたか？と尋ねて  
いるように思われるほどであった。

一つの階には三つの室があつた。そして、その室と室とを通ずる扉は空気がどの室をも自由に吹き抜けられるようにと開け放してあつたので、ロリー氏は、自分の周囲のどこにも目につくその空想上の類似★にこにこしながら眼を留めて、一室から次の室へと歩いて行つた。最初の室は一番上等の室で、そこにはリューシーの小鳥と、草花と、書物と、机と、裁縫台と、水彩絵具の箱とがあつた。二番目の室は医師の診察室で、食堂にも使われていた。中庭の例の篠懸の樹のさらさらと動く葉影で絶えず変化する

斑模様まだらをつけられている三番目の室は、医師の寝室であつて、——その室の一隅には、今は使われていない靴造りの腰掛台ベンチと道具箱どが、パリーの郊外サン・タントワヌのあの酒店の傍の陰惨な建物の六階にあつたとほぼ同じようにして、置いてあつた。

「どうも驚くなあ、」とロリーグ氏はあたりを見すの<sub>や</sub>めて、言つた。「あの人あんな自分の苦しみを思い出させるものを身の周りに置いとくなんて！」

「何だつてそんなことに驚くんですか？」という不意の問が彼をびくりとさせた。

その問は、彼がドーヴィアのロイアル・ジョージ旅館ホテルで初めて知り合つて、その後その時よりは親しくなつていた、例の腕つ節

の強い、荒っぽい、赭い顔の婦人、プロス嬢★の発したものであつた。

「わたしはこう思っていたんですがねえ——」とロリー氏が言い出した。

「ふうん！ 思つてたんですつて！」とプロス嬢が言つた。それでロリー氏は言葉を切つた。

「お変りありませんか？」とその時その婦人は——鋭く、だがあたかも彼に對して何も惡意を抱いていないということを示すつもりであるかのように——尋ねた。

「有難う、達者な方です。<sup>ほう</sup>」とロリー氏は柔軟に答えた。「あんたはいかがですか？」

「自慢するほどのことはちつともございませんよ。」とプロス嬢が言つた。

「ほんとに？」

「ええ！ ほんとにですよ！」とプロス嬢は言つた。「私はお嬢さまのこととつても困つてゐるんですもの。」

「ほんとに？」

「後生ごしょうですからその『ほんとに』の他ほかに何とか言つて下さいよ。でないと私氣が揉めて死にそうですから。」とプロス嬢が言つた。彼女の性質は（その体格とは違つて）短い方だつた。

「じゃあ、全くですか？」と口リリー氏は言い直しとして言つた。

「『全くですか』だつていやですが、」とプロス嬢が答えた。

「少しはましですわ。そなんですよ、私とつても困つているんです。」

「その訳を伺えますかな？」

「私は、お嬢さまに少しもふきわしくない人たちが何十人と、お嬢さまの世話を焼きにここへやつて来てもらいたくはないんですの。」とプロス嬢が言つた。

「そんな目的で何十人とほんとやつて来るんですか？」

「何百人とね。」とプロス嬢が言つた。

自分の最初に言い出したことが疑われると、いつでも必ずそれを誇張するというのが、この婦人（彼女の時代より前でもそれより後でも他にもそういう人々はあるのであるが）の特徴なのであ

つた。

「おやおや！」と口リー氏は、自分の思い付くことの出来た中でも一番安全な言葉として、そう言つた。

「私がお嬢さまと御一緒に暮して来ましたのは——いいえ、お嬢さまが私と一緒に暮しになりました、私にお給金を下さいましたのは、と申さなければならないんで、もし私が何も頂戴しなくても自分なりお嬢さまなりを養つてゆけるのでしたら、決して決して、お嬢さまにそんなお給金を出していただくようなことはおさせしなかつたんですが、——その一緒に暮しになりましたのは、お嬢さまがまだ十歳とおの時からでした。ですから、ほんとうにとてもつらいんですの。」とプロス嬢が言つた。

何がとてもつらいのかはつきりとはわからないので、ロリー氏は自分の頭を振り動かした。自分の体からだのその重要な部分を、何にでもぴったりと合う魔法の外套のようなものとして使つたのである。

「お嬢さんにちつともふさわしくないいろんな人たちが、始終やつて来るんですからねえ。」とプロス嬢が言つた。「あなたがそれをお始めになつた時だつて——」

「わたしがそんなことを始めたつて、ミス・プロスさん？」

「あなたがお始めになつたじやありませんでしたか？　お嬢さんのお父さまを生き返らせたのはどなたでした？」

「ああ、そうか！　あのことがその始めたつたと言うんなら——

「」と口リー氏が言つた。

「あのことはそれの終りだつたとも言えないでしようからね？」

今申しましたようにね、あなたがそれを始めになつた時だつて、ずいぶんつらかつたんです。と言つて、私はマネット先生に何も難癖なんくせをつけるんじやありません。ただ、かたの方だつてああいうお嬢さまにはふさわしくないということだけを別にすればですがね。でもそれはかたの方の咎とがじやあございませんわ。どんな人にとって、どんな場合でも、そんなことは望むのが無理なんですからね。ですけれども、かたの方の後から（かたの方だけは私我慢してあげるんですが）、お嬢さまの愛情を私から取り上げてしまいに、大勢の人たちがやつて来るのは、ほんとうに二倍にも三倍にもつ

らいことですわ。」

ロリー氏はプロス嬢の非常に嫉妬深いことを知っていた。が、彼はまた、彼女が表面<sup>うわべ</sup>は偏屈ではあるが、その実は、自分たちが失つてしまつた若さに対して、自分たちがかつて持つたことのなかつた美しさに対して、自分たちが不幸にも習得することの出来なかつた芸能に対する、自分たち自身の陰鬱な生涯には一度も射さなかつた輝かしい希望に対する、純粹な愛情と欽仰とから、喜んで自分を奴隸にしようとする、あの非利己的な人間——それは女性の間にのみ見出される——の一人であるということも、この時分には知つていた。彼は世間をよく知つていたので、そういう真心の誠実な奉仕に優るものは世の中には何ものもないというこ

とを知つていた。そのように尽された、そのように金錢ずくの穢けがれを少しも持たないそういう奉仕に、彼は極めて高い尊敬の念を持つていたので、彼は、自分だけの心の中で作つてある応報の排列表★——吾々は皆そういう排列表を多少とも作つているのであるが——の中では、プロス嬢を、天質と人工との両方によつて彼女とは比べものにならぬほど美しく粧うてゐる、テルソン銀行に預金を持っている多くの淑女たちよりも、下級の天使たちによほど近いところに置いていたのであつた。

「お嬢さまにふさわしい男は一人だけしかいなかつたのですし、これからだつてそうでしよう。」とプロス嬢は言つた。「その男というのは私の弟のソロモンでした。もしあれが身を持崩して

いませんでしたらばですがねえ。」

また始つた。ロリー氏がいつかプロス嬢の身の上をいろいろと尋ねてみたところが、彼女の弟のソロモンというのは、賭博の賭金にするために彼女の持っていたものを何もかも一切捲き上げて、無一文になつた彼女を少しも気の毒とも思わないでそのまま見棄てて行つてしまつた無情な無頼漢である、という事実が確かになつたのであつた。そのソロモンをプロス嬢がそのように信じ切つている（そういうちよつとした身の誤りのためにその信用はいささか減つてはいたが）ということは、ロリー氏には全く常談事とは思えなかつた。そしてまた、そのことは彼が彼女に好感を抱くについて大いに効力があつたのだつた。

「わたしたちは今のところ偶然二人きりだし、二人とも事務の人間だから、」と彼は、二人が応接室へと引返して、そこで打解けた気持で腰を下した時に、言つた。「私はあんたにお尋ねしたいんだが、——先生ドクターは、リューシーさんと話される時に、あの靴を造つておられた頃のことを仰しやつたことがまだ一度もないかね？」

「ええ、一度も。」

「それだのにあの腰掛台ベンチとあの道具とを自分の傍に置いておかれ るんだね？」

「ああ！」とプロス嬢は頭を振りながら答えた。「でも私はあのかた方が心の中でもその頃のことを思つていらつしやらないとは申し

ませんよ。」

「あんたはあの人があの頃のことによほど考えておられると思いませんか？」

「思います。」とプロス嬢が言つた。

「あんたの想像するところでは——」とロリー氏が言いかけようと、プロス嬢がその言葉をこう遮つた。――

「何だつて想像なぞしたことは一度もありません。想像力なんてちつともないんです。」

「こりやあ間違つたな。では、あんたの推測するところでは——あんただつて時には推測ぐらいはするね？」

「時々はね。」とプロス嬢が言つた。

「あんたの推測するところでは、」とロリー氏は、彼女を親切そうに見ながら、例のきらきらした眼に笑いを含んだ光を閃かして、言い続けた。「マネット（ドクター・マネット）先生は、御自分があんなに迫害されたことの原因や、またたぶんその迫害者の名前などについても、あの永い年月（としつき）の間ずっと、何か御自分の御意見を持つておられた、と思しますかね？」

「私は、そのことについては、お嬢さまが私にお話下さいましたことの他（ほか）には、何も推測したことありません。」

「で、そのお嬢さまのお話では——？」

「お嬢さまは先生がそれについて御意見を持つていらっしゃると思つてお出でです。」

「ところで、わたしがこんなにいろんなことを尋ねるのに腹を立てないで下さいよ。わたしはただの気の利かない事務家だし、あなたも婦人の事務家なんだからね。」

「気の利かないですか？」とプロス嬢はつんとして尋ねた。

その謙遜な形容詞を使わなければよかつたと思いながら、ロリー氏は答えた。「いや、いや、いや。確かにそうじやないとも。

で、事務のことに戻るとして。——マネットドクター・マネット先生が、どんな罪も

犯したことがないに違いないのに、そうだということはわれわれはみんな十分に確信しているんだが、それなのに、その問題に決して触れようとされないというのは、不思議じやあないですか？

あの人は昔わたしと事務上の関係があつたし、今はお互に懇意

になつてゐるとはいへ、わたしは自分のために言うのではない。

あの人があんなに心から愛著しておられ、またあの人あんないから愛著しておられる、あの美しいお嬢さんのために言つてい  
るつもりなんだがね？　とにかく、プロスさん、わたしがあんた  
とこんな話をしようとするのは、好奇心からするのではなくつて、  
心配のあまりにするのだ、ということを信じてもらいたいのだが  
。

「そうね！　私にわかつております限りでは、と申してもわざか  
なことでしようがねえ、」とプロス嬢は、その弁解の語調のため  
に心を和やわらげて、言つた。「あの方かたはその話には何でもかんでも一  
切触れるのを怖こわがつていらつしやるんですよ。」

「怖がつて？」

「なぜ怖がつていらつしやるかつてことはよつくわかる、と思う  
んですが。それは恐しい思い出ですもの。それにまた、あの方かたが  
正氣をなくされましたのもそれから起つたことですもの。どんな  
風にして正氣をなくしたのか、またどんな風にして正氣に戻つた  
のかということを御自分では御存じないので、あの方かたには自分が  
また正氣をなくしないつてことはどうしてもはつきりと請合うけあえな  
いんでしょう。このことだけだつてその話はあの方かたには気持がよ  
くはないんだろうと、私はそう思うんです。」

これは口リー氏が予期していたより以上の意味深長な言葉であ  
つた。「なるほど。」と彼は言つた。「だから考えるのも恐しい

んだね。それにしてもだ、<sup>ミス・プロス</sup>プロスさん、わたしの心の中には疑いが一つ残っているんですね。そういう気持を御自分の心の中に始終押し隠しておられるということはマネット先生のためにいいかどうか、ということなんだ。実際、その疑いのために、またその疑いから時々私の心に起る不安のために、わたしはこの現在の打明け話をする気になつたのだが。」

「どうともしようがないんでしょうね。」とプロス嬢が頭を振りながら言つた。「そのことにちょっとでも触れるとなると、あの方はじきに工合が悪くなるんですもの。うつちやつてそのままにしておく方がいいんでしょうね。つまり、厭でも応でも、うつちやつてそのままにしておくより他はないんでしょう。時々、あの

方かたは真夜中まよなかにお起きになりましてね、御自分のお部屋の中を往つたり来たり、往つたり来たりしてお歩きになるのが、この上のあそこにいる私どもに聞えることがよくあります。お嬢さまは、そんな時には、あの方かたのお心が昔の牢屋の中を往つたり来たり、往つたり来たりしてお歩きになつてゐるのだとお思いになるよう に、今ではなつていらっしゃいます。で、急いである方かたのところへお出でになりまして、お二人で御一緒に、そのまま往つたり來たり、往つたり来たりして、あの方かたのお心が落著くまで、お歩きになるんですよ。しかしあの方かたはお嬢さまに御自分のじつとしておられぬことのほんとうの原因を一言も決して仰しやいませんし、それでお嬢さまもあの方かたにそのことを口にしないのが一番いいと

気づいてお出でです。で、黙つたまま、お二人は御一緒に往つたり来たり、往つたり来たりして歩いていらつしやいますと、そのうちに、お嬢さまの愛情とそうして連立つていらつしやることとある方かたは正氣にお返りになるんです。」

プロス嬢は自分は想像力を持つていないと言つたにもかかわらず、彼女が「往つたり来たりして歩く」という文句を何度も何度も繰返したのを見ると、何か一つの悲しい思いに一本調子に絶えず悩まされている苦痛を感じしていることがわかり、そのことは彼女がその想像力なるものを持つていてことを証明しているのだった。

その一劃は不思議によく物音を反響する一劃であるということ

は既に述べた。ちょうど、今彼方かなたこなた此方と疲れた足取りで歩くという話が出たので、そのために起つたのかと思われるほどに、こちらへとやつて来る足音が、鳴り響くようにその一劃に反響し始めた。

「そら、お帰りですわ！」とプロス嬢が、その会談を打切りにして立ち上りながら、言つた。「もうすぐに何百つて人が押し掛け来ますよ！」

そこはその音響学上の性質から言つて實に珍しい一劃で、實に一種特別な耳のような場所であつたので、ロリー氏が開けてある窓のところに立つて、足音の聞えた父と娘との来るのを待つていると、彼等が決して近づいて来ないのでなかろうかというよう

な気がするのであつた。その足音が向うへ行つてしまつたかのよう、さつきの反響が消え失せたばかりではない。決してやつて来ない他の足音の反響がその代りに聞えて来て、それが間近に来たかと思うとそれつきり消え失せてしまうのだつた。けれども、父と娘とはどうとう姿を見せた。そしてプロス嬢はその二人を出迎えるために表戸口のところに待ち構えていた。

たとい荒っぽくて、赭ら顔で、怖い顔付ではあつても、プロス嬢が、自分の大好きな令嬢が二階へ上るとその帽子を脱がせて、それを自分のハンケチの端でちよつと手入れをして直し、埃ほこりを吹き払つてやつたり、いつでもしまわれるように彼女のマントを摺たたんでやつたり、彼女の豊かな髪の毛を、自分自身がもしこの上も

なく虚榮心の強いこの上もなく美しい女であつたなら、自分の髪の毛にあるいは持つたかもしれないほどの誇らしさで、撫でつけてやつたりしているのは、見ていて氣持のよいものであつた。その彼女の大事な令嬢が、彼女を抱擁して彼女にお礼を言い、自分のためにそんなにまで面倒をみてくれることに不服を言つているのもまた、見ていて氣持のよいものであつた。——もつとも、その不服を言うのだけはほんの常談に言つてみただけであつた。でなければ、プロス嬢は、ひどく氣を悪くして、自分自身の部屋にひつこんで泣き出したことであろう。医師が、その二人を傍から見て、言葉や眼付でプロス嬢に彼女がどんなにリューシーを甘やかしているかということを言つてゐるが、その言葉や眼付には普

ロス嬢に劣らぬほど甘やかしているところがあるし、もし出来るものならそれより以上に甘やかしたがつてているようなのもまた、見ていて気持のよいものであつた。ロリー氏が、例の小さな仮髪かつらをかぶつてこういうすべての様子をにこにこ顔で眺めて、晩年になつて独身者の自分に途を照して一つの家庭に導いてくれた自分の運星に感謝しているのもまた、見ていて気持のよいものであつた。しかし、こういう有様を何百の人々は見に来はしなかつた。そしてロリー氏はプロス嬢の予告の実現されるのを徒らに期待していたのであつた。

食事時になつたが、それでもまだ何百の人々は来ない。この小さな家庭の切  
しでは、プロス嬢は台所の方面を引受けていて、

いつもそれを驚くほど見事にやつてのけた。彼女のこさえする食事は、ごく質素な材料のものでありながら、非常に上手に料理して非常に上手によそつてあり、半ばイギリス風で半ばはフランス風で、趣向が非常に気が利いていて、どんな料理も及ばないくらいであつた。プロス嬢の交際というのは徹底的に実際的な性質のもので、彼女は、何枚かの一シリング銀貨や半クラウン銀貨で誘惑されて料理の秘訣を自分に知らしてくれそうな貧窮したフランス人を捜して、ソホーやその近隣の区域を荒し るのであつた。そういうおちぶれたゴール人の子孫★たちから、彼女は實に不思議な技術を習得していたので、そこの家婢である婦人と少女なぞは、彼女を、一羽の禽、一疋の兎、菜園にある一二種の野菜を取つて

来させて、そういうものを何でも自分の好きなものに変えてしま  
うような、女魔法使か、シンダレラの教母★のように思い込んで  
いるほどであつた。

日曜日には、プロス嬢は医師の食卓で食事をすることにしてい  
たが、しかしその他の日には、台所か、それとも三階にある自分  
自身の室——そこは彼女のお嬢さまの他ほかにはかつて誰一人も入る  
ことを許されたことのない青い部屋★であつたが——かで、人知  
れぬ時刻に食事することを、どうしてもやめなかつた。この日の  
食事の際には、プロス嬢は、彼女のお嬢さまの楽しい顔と彼女を  
喜ばそうとする楽しい努力とに応じて、よほど打うちくつろ寛ひろいでいた。  
だから、その食事もまた非常に楽しかつた。

その日は蒸暑い日であつた。それで、食事がすむと、リューシーは、葡萄酒を篠懸の樹の下に持ち出して、みんなそこへ出て腰掛けることにしましよう、と言い出した。すべてのことが彼女次第であり、彼女を中心にして回転していたので、皆はその篠懸の樹の下へ出て行つた。そして彼女は特にロリー氏のために葡萄酒を持つて行つた。彼女は、しばらく前から、ロリー氏のお酌取りの役を引受けっていたのだ。そして、皆が篠懸の樹の下に腰掛け話をしている間も、彼女は彼の杯を始終一杯にしておくようにした。あたりの建物の何となく神秘的に見える裏手や横面がそこで話している彼等を覗いていたし、篠懸の樹は彼等の頭上でその樹のいつものやり方で彼等に向つて囁いていた。

それでもまだ、何百の人々は姿を見せなかつた。彼等が篠懸の樹の下に腰掛けている間にダーネー氏が姿を見せた。が彼はたつた一人であつた。

マネット医師は彼を懇ろに迎えた。またリューシーもそうした。しかし、プロス嬢は俄かに頭と体とにひきつりを起して、家の中へひつこんだ。彼女がこの病気に罹ることは珍しくなかつた。そして彼女はその病氣のことを行解けた会話の時には「痙攣の発作」と言つていた。

医師は体の工合がこの上もなくよくて、特別に若々しく見えた。彼とりユーシーとの類似はこういう時には非常に目立つた。そして、彼等が並んで腰を掛け、彼女は彼の肩に凭れ、彼は彼女の椅

子の背に片腕をかけている時に、その似ているところを見比べてみるのは極めて愉快なことであつた。

彼は、いろいろの問題にわたつて、非常に決活に、絶えず話していた。「ちよつと伺いますが、マネット先生、<sup>ドクター・マネット</sup>」とダーネー氏が、彼等が篠懸の樹の下に腰を下した時に、言つたが、——それは、ちょうどその時ロンドンの古い建築物ということが話題になつていたので、自然その話を続けて言つたのだつた。——「あなたはロンドン塔★をよく御覧になつたことがおありますか?」

「リューシーと二人で行つて來たことがあります。だがほんの通りすがりに寄つただけです。興味のあるものが一杯あるなどいうことがわかるくらいには、見物して來ました。まあ、それつくら

いのところです。」

「あなた方も御存じのように、私はあすこへ行つていたことがあります  
が★、」とダーネーは、幾らか腹立たしげに顔を赧らめは  
したけれども、微笑を浮べながら、言つた。「見物人とは別の資  
格でいたのですし、またあすこをよく見物する便宜を与えられる  
ような資格でいたのもありませんでした。私があすこにいまし  
た時に珍しい話を聞かされましたよ。」

「どんなお話をしたの?」とリューシーが尋ねた。

「どこか少し改築している時に、職人たちが一つの古い地下牢を  
見つけたんだそうです。そこは、永年の間、建て塞がれて忘れら  
れていたんですね。そこの内側の壁の石にはどれにもこれにも、

囚人たちの刻みつけた文字が一面にありました。——年月日だの、名前だの、怨みの言葉だの、祈りの言葉だのですね。その壁の一  
角にある一つの隅石に、死刑になつたらしい一人の囚人が、自分  
の最後の仕事として、三つの文字を彫つておいたそうです。何か  
ごく貧弱な道具で、あわただしく、しつかりしない手で彫つてあ  
るんです。最初は、それは D.I.C. と読まれたのですがね。ところ  
が、もつと念入りに調べてみると、最後の文字は G だとわかり  
ました。そういう頭文字かしらもじの姓名の囚人がいたという記録も伝説  
もなかつたので、その名前は何というのだろうかといろいろ推測  
されたんですが、どうもわからなかつたのです。とうとう、その  
文字は姓名の頭文字ではなくて、 DIG ★ という完全な一語では

なかろうか、と言ひ出した者がいました。で、その文字の刻んである下の床ゆかをごく念入りに調べてみたんです。すると、一つの石か、瓦か、鋪しきいし石の破片のようなものの下の土の中に、小さな革製の函ケースか囊かの塵になつたものと雜まじつて、塵になつてしまつた紙が見つかつたんだそうですよ。その誰だかわからぬ囚人の書いておいたことは、もうどうしたつて読めっこないでしよう。が、とにかくその男は何かを書いて、牢番に見つからないようにそれを隠しておいたんですね。」

「おや、お父さま、」とリューシーが叫んだ。「御氣分がお悪いんですね！」

彼は片手を頭へやつて突然立ち上つていたのだ。彼の挙動と彼

の顔付とはみんなをすつかり驚かせた★。

「いいや、悪いんじやないよ。大粒の雨が落ちて来たんでね、それでびっくりしたのだ。みんな家へ入つた方がよからうな。」

彼はほとんど即時に平静に返つた。大粒の雨がほんとうに降つていて、彼は自分の手の甲にかかるつている雨滴を見せた。しかし、彼はそれまで話されていたあの発見のことに関するてはただの一言も言わなかつた。そして、みんなが家の中へ入つて行く時に、ロリー氏の事務家の眼は、チャールズ・ダーネーに向けられた医師の顔に、それがかつてあの裁判所の廊下でダーネーに向けられた時にその顔に浮んだと同じ異様な顔付を、認めたか、あるいは認めたような気がしたのであつた。

だが、彼は非常に速く平静に返つたので、ロリー氏は自分の事務家的な眼を疑つたほどであつた。医師が広間にある例の金色の巨人の腕の下で立ち止つて、自分はまだ些細なことに驚かぬようになつていない（いつかはそうなるにしても）ので、さつきは雨にもびくりとしたのだ、と皆に言つた時には、彼はその巨人の腕にも劣らぬくらいにしつかりしていた。

お茶時になり、プロス嬢はお茶を入れながら、また痙攣の発作を起した。それでもまだ何百の人々は来なかつた。カートン氏がぶらりと入つて来たのだが、しかし彼でやつと一人になつただけだ。

その夜はひどく暑苦しかつたので、扉や窓を開け放しにして腰

掛けっていても、みんなは暑さに耐えられなかつた。茶の卓子テーブルが片附けられると、一同は窓の一つのところへ席を移して、外の暗澹とした黄昏たそがれを眺めた。リューシーは父親の脇に腰掛けていた。ダーネーは彼女の傍に腰掛けていた。カートンは一つの窓に凭れていた。窓掛カーテンは長くて白いのであつたが、この一劃へも渦巻き込んで来た夕立風が、その窓掛カーテンを天井へ吹き上げて、それを妖怪の翼のようにはたはたと振り動かした。

「雨粒がまだ降つているな、大粒の、ずつしりした奴が、ぱらりぱらりと。」とマネット医師が言つた。「ゆつくりとやつて来ますな。」

「確實にやつて来ますね。」とカートンが言つた。

彼等は低い声で話した。何かを待ち受けている人々が大抵そういうように。暗い部屋で電光を待ち受けている人々がいつもそうするように。

街路では、嵐の始らないうちに避難所へ行こうと急いでゆく人々が非常にざわざわしていた。不思議によく物音を反響するその一劃は、行つたり来たりしている足音の反響で鳴り響いた。だが本物の足音は一つも聞えては来なかつた。

「あんなにたくさん的人がいて、しかもこんなに淋しいとは！」  
と、皆がしばらくの間耳を傾けていてから、ダーネーが言つた。  
「印象的ではございませんか、ダーネーさん？」とリューシーが尋ねた。「時々、私は、夕方などにここに腰掛けておりますと、

空想するんでございますが、——けれども、今夜は、何もかもこんなに暗くつて厳かなので、馬鹿げた空想なぞちよつとしただけでも私ぞつとしますの。——

「私たちにもぞつとさせて下さい。どんな空想だかどうか私たちに知らしていただきたいものですねえ。」

「あなた方には何でもないことに思われますでしょう。そういう幻想は、私たちがそれを自分で作り出した時だけ印象的なのだと、私はいますわ。それは他人さまにお伝えすることが出来ないものなんですよ。私時々夕方などにひとりきりでここに腰掛けて、じいっと耳をすまして聴いておりますと、あの反響が、今に私どもの生活の中へ入つて来るすべての足音の反響だと思われて来ます

の。」

「もしさうなるとすると、いつかはわれわれの生活の中へ大群集が入つて来る訳だ。」とシドニー・カートンが、いつものもつくりした言い方で、口を挟んだ。

足音は絶間がなかつた。そしてその急ぐ様はますます速くなつて來た。この一劃はその足の歩く音を反響し更に反響した。窓の下を通ると思われるものもあり、室内を歩くと思われるものもあり、来るものもあり、行くものもあり、突然止むものもあり、はたと立ち止るものもあり、すべては遠くの街の足音であつて、見えるところにあるものは一つもなかつた。

「あの足音がみんな私たちみんなのところへ来ることになつてい

るのですか、<sup>ミス・マネット</sup>嬢、それとも私たちの間であれを分けることになるのですか？」

「私存じませんわ、ダーネーさん。馬鹿げた空想だと申し上げましたのに、あなたが聞かしてくれと仰しやいましたんですもの。私がその空想に耽りますのは、私が独りきりであります時なので、その時は、その足音を私の生活と、それから私の父の生活の中へ入つて来る人たちの足音だと想像したのでございました。」

「僕がそいつを僕の生活の中へ引受けてあげますよ！」とカートンが言つた。「僕は文句なしで無条件でやります。やあ、大群集がわれわれに迫つて来ますよ、<sup>ミス・マネット</sup>嬢。そして僕には彼等が見えます、——あの稻光<sup>いなびかり</sup>で。」彼がこの最後の言葉を附け加

えたのは、窓に凭れかかっている彼の姿を照した一条の鮮かな閃光がぴかりと輝いた後であった。

「それから僕には彼等の音が聞える！」と彼は、一しきりの雷鳴の後で、再び附け加えた。「そら、来ますよ、速く、凄じく、猛烈に！」

彼の前兆したのは雨の襲来と怒号とであつて、その雨が彼の言葉を止めさせた。その雨の中ではどんな声でも聞き取れなかつたからである。忘れがたいくらいの猛烈な雷鳴と電光とがその激湍のようないい雨と共に始つた。そして、轟音と閃光と豪雨とは一瞬の間断もなく続いて、夜半になつて月が昇つた頃にまで及んだ。

セント  
聖ポール寺院★の大鐘が澄みわたつた空氣の中で一時を鳴らし

た頃、ロリー氏は、長靴を穿いて提灯を持ったジエリーアーに護衛されて、クラークンウエルへの帰途に就いた。ソホーとクラークンウエルとの途中には处处に淋しい路があつたので、ロリー氏は、追剥の用心に、いつでもジエリーアーをその用事に雇つておいたのだ。もつとも、いつもはこの用事はたつぱり二時間も早くすんでしまうのであつたが。

「何という晩だつたろう！ なあ、ジエリーアー」とロリー氏が言った。「死人が墓場からでも出て来かねないような晩だつたね。」

「わつしは、そんなことになりそうな晩てえのは、自分じや見たことがありませんよ、旦那。——また、見たいとは思いませんや。」とジエリーアーが答えた。

「おやすみなさい、カートン君。」とその事務家は言つた。「おやすみなさい、ダーネー君。わたしたちはいつかもう一度こういう晩を御一緒に見ることがありますようかなあ！」

おそらく、あるだろう。おそらく、人々の大群集が殺到しつつ怒号しつつ彼等に追つて来るのをもまた、見ることがあるだろう。

## 第七章 都会における 貵族 モンセーニュール

宫廷において政権を握っている大貴族の一人であるモンセーニュール★は、パリーの宏大な邸宅で、二週間目ごとの彼の接見リセプションヨン会ヨンを催していた。モンセーニュールは、彼には聖堂中の聖堂ソドであり、その外の一続きの幾間かにいる礼拝者の群ムレにとつては最も神聖な処の中でも最も神聖な処である、彼の奥マの間にいた。モンセーニュールは彼のチヨコレート★を飲もうとしているところであつた。モンセーニュールは非常に多くのものを易々と嚥み下すやすくだことが出来たので、少数の氣むずかし屋には、フランスをまでず

んずん嘸み下しているのだと想像されていた。だが、彼の毎朝のチヨコレートは、料理人の他に四人の強壯な男の手を藉りなくては、モンセーニユールの咽へ入ることさえも出来なかつた。

そうだ。その幸福なるチヨコレートをモンセーニユールの脣へまで持つてゆくには、四人の男が要るのであつた。その四人ともぴかぴかときらびやかな装飾を身に著け、その中の頭かしらの者に至つては、モンセーニユールの範を垂れたもうた高貴にして醇雅な様式と競うて、ポケットの中に二箇よりも少い金時計が入つていては生きてゆくことが出来ないのであつた。一人の侍者はチヨコレート注器つぎを神聖な御前へと運ぶ。二番目の侍者はチヨコレートを特にそれだけのために携えている小さな器具で攪拌して泡立たせる。

三番目の侍者は恵まれたるナフキンを捧呈する。四番目の侍者（これが例の二箇の金時計を持つてゐる男）はチヨコレートを注ぐのである。モンセニユールにとつては、こういう四人のチヨコレート係がかりの侍者の中の一人が欠けても、この讃美にみちた天の下で彼の高い地位を保つことは出来ないのであつた。もし彼のチヨコレートが不名誉にもわずか三人の人間に給仕されるようなことがあつたならば、彼の家名の穢れははなはだしいものであつたろう。二人であつたなら彼は憤死したに違ひない。

モンセニユールは昨晩もささやかな晚餐に出かけたのであつた。その席では喜劇と大歌劇グランド・オペラとが極めて楽しく演ぜられた。モンセニユールは大概の晩はささやかな晚餐に出かけて、嬌艶

な来会者たちに取巻かれるのであつた。モンセーニュールは極めて優雅で極めて多感であらせられたので、喜劇や大歌劇グランド・オペラは、退屈な国家の政務や国家の機密に与つてゐる彼には、全フランスの窮乏よりも遙かに多く彼を動かす力があつた。フランスにとつては幸福なことだ。同じようなことが、フランスと似たようなのに恵まれてゐるあらゆる国々にとつて常にそうであるように！

（一例としては）国を売つた陽気なステュアート★のあの遺憾な時代のイギリスにとつて常にそうであつたようだ。

モンセーニュールは總体から見た公務について一つの真に高貴な意見を持つていた。その意見というのは、一切のものをしてそれ自身の路を進ましめよ、というのであつた。箇々の公務につい

ては、モンセーニュールはそれとは別のやはり真に高貴な意見を持つていた。それは、一切のものはことごとく彼の路を歩まねばならぬ——彼自身の権力と財囊とを肥す方へ行かねばならぬ、というのであった。總体から見たものと箇々のものとを含めて彼の快樂については、モンセーニュールはまた別のやはり真に高貴な意見を持っていた。それは、この世は彼の快樂のために造られたのだ、というのであった。彼の法則の本文は（原文とは代名詞一つだけ變っているが、それは大したことではない）こうなつていった。「モンセーニュール曰<sup>い</sup>いけるは、地とこれに盈<sup>み</sup>てる物はわがものなり。★」

それにもかかわらず、モンセーニュールは、卑俗な財政困難と

いうことが彼の公私両方の財政に這い込んでいるのに、ようようにして気がついて来た。それで、彼は、その両方面の財政に関しては、やむをえず収税請負人★と結託したのであつた。公の財政に関しては、モンセーニュールはそれを全くどうすることも出来なかつたので、それゆえ誰かそれをどうにか出来る者に任さなければならなかつたからであるし、私の財政に関しては、収税請負人は富裕であつて、モンセーニュールは代々の非常な奢侈と浪費との結果として貧しくなりつつあつたからである。そこで、モンセーニュールは、修道院にいる彼の妹を、彼女が身に著け得る最も廉価な衣装である面紗ヴエールをかぶる★のが差迫つてゐるのを断ることわにまだ時がある間に、そこから連れ戻して、家柄は賤しいがすこ

ぶる富裕な一人の収税請負人に、褒美として彼女を与えたのであつた。この収税請負人は、頭部に黄金の林檎のついた身分相応な杖を携えながら、今、外側の室の来客の中にいて、人々に大いに平身低頭させていた。——もつとも、モンセーニュール一門の優秀な人種だけは常にその例外で、その連中は、彼の妻もその中に含めて、最も高慢な侮蔑の念をもつて彼を見下<sup>みくだ</sup>していたのである。

その収税請負人は豪奢な男であった。三十頭の馬が彼の厩舎にいたし、二十四人の家僕が彼の広間に控えていたし、六人の侍女が彼の妻に侍していた。掠奪と徵発との出来る限りはひたすらそれをのみやるということを公言している人間として、この収税請負人は、——彼の婚姻関係がいかに社会道徳に貢献するところが

あつたにしても、——当日モンセーニュールの邸宅に伺候した貴顕縉紳の間にあつては、少くとも最も現実性に富んだ人物であった。

なぜなら、その室にいる者たちは、見た目には美しくて、当代の趣味と技巧とでなし得る限りのあらゆる意匠の装飾で飾られてはいるけれども、実際は、健実な代物ではなかつたからである。

どこか他の処にいる（そしてそれは、貧富の両極端からほとんど等距離にあるノートル・ダムの展望塔がその両方ともを見られないくらいに遠く隔つてもいない処なのであるが）檻樓ぼろう<sub>ナイトキャツ</sub>と寝

帽ぼうとを著けた案山子たちと幾分でも関聯して考えると、その室にいる者たちは極めて氣持の悪い代物であつたろう、——もしモ

ンセーニュールの邸宅で誰かそういうことを考えてみる人間があつたとするならばであるが。軍事上の知識に欠けている陸軍士官たち。船の觀念を少しも持っていない海軍士官たち。政務の概念をも持たぬ文官たち。好色な眼をし、放縱な舌でしゃべり、更に放縱な生活をしている、最悪の世俗的な世界の人間である、鉄面皮な僧侶たち。そのすべての者たちは彼等のそれぞれの職務に全然不適当であり、そのすべての者たちがその職務に適しているような風をして恐しい嘘をついているが、しかしそのすべての者たちは近いか遠いかの別はあれモンセーニュールの仲間の者であり、それゆえに何かが得られる限りのあらゆる公職に嵌め込んでもらつた者なのである。こういう連中は何十何百とまとめて数えなけ

ればならぬいくらいいたのであつた。モンセーニュールや國務とは直接には関係のない、しかしそうかと言つて眞実な何等かのものにも一切等しく関係のない、あるいは何等かの現世の正しい目的に向つて何等かの真直な道を通つて旅して過す生涯にも関係のない人々も、それに劣らず夥しかつた。ありもせぬ架空の病氣に高価な治療を施して大財産をつくつた医者どもが、モンセーニュールの控の間まで、彼等の閑雅な患者たちに向つてにこにこと微笑の愛嬌を振り撒いていた。國家を犯している小さな悪弊に対するあらゆる種類の救済策を發見していながら、ただの一つの罪惡でも根絶しようと本氣でとりかかるという救済策だけは知らない山師どもが、モンセーニュールの接見会リセプションで、人の心を迷わす彼等

の諱語たわごとを手当り次第の人間の耳に注ぎ込んでいた。言葉で世界を改造している、また天に攀じ登るためのバベルの骨牌塔かるた★を築いている不信心な哲学者たちは、モンセーニュールによつて招集されたこの驚歎すべき会合で、金属の変質ということに著目している不信心な化学者たちと話をしていた。最上等のお仕込を受けた申分のない紳士たち、この最上等のお仕込なるものは、その注意すべき時代にあつては——かつまたそれ以後今日までもそうであるが——人間的な興味のある自然な問題には一切無関心になるというその結果によつて識別されることになつていたのであるが、そういう紳士たちは、モンセーニュールの邸宅において、最も模範的な倦怠状態にあつた。こういうさまざまな名士たちがパ

リ一という立派な世界で彼等の後に残して来た家庭の有様に至つては、そこに集つたモンセーニュールの信者たちの中にまじつてゐる間諜スパイ——それはその優雅な来客の半分ほども占めていたが——でも、その社会の天使たち★の中に、態度や容姿で自分が母であるということを自認しているたつた一人の人妻さえ見つけ出すことがむずかしい、ということがわかつたほどであつたろう。実際、一人の厄介な生物をこの世の中へ生み出すというだけの所業——それだけでは母という名前を事実として示すまでには行つていないのである——を除いては、母などというものは上流社会には知られていないのであつた。百姓の女たちが野暮な赤ん坊などというものを傍において、育て上げるのであつて、六十歳の嫗嫗

なお婆さんたちは二十歳の時のように盛装し晩餐をとるのであつた。

非現実性という癪患がモンセーニュールに伺候するあらゆる人間を醜くしていた。一番外の方の室には、世の中の事態が幾分悪化しつつあるという漠然たる不安を数年前から心の中に抱いていた、半ダースの例外的な人々がいた。その事態を匡正する一つの有望な方法として、その半ダースの人間の中の半分は、痙攣教徒★という奇異な宗派の信者になつていた。そして、その時でさえ、自分たちが、口から泡を出し、暴れあばり、呶鳴り、その場で類癇★に罹つて——それによつて、モンセーニュールを導くための未来へのすこぶるわかりやすい指道標を建てるのであるが——みせ

たものかどうかと、心の中で考えているところであった。こうい  
う苦行僧の他に、別の宗派へ飛び込んで行つた他の三人がいた。  
その宗派というのは、「真理の中心」がどうのこうのという譴たわご  
語とで事態を矯正しようとするとするものであつた。すなわち、人間は  
真理の中心から離れてしまつてゐる——それは大して論証を必要  
としない——が、またその円周の外へは出ていない、だから、人  
間は、断食することと精靈を見ることとによつて、その円周の外  
へ飛び出さぬようにしていなければならぬし、またその中心へ押  
し戻されさえしなければならぬ、ということを主張したのであつ  
た。従つて、こういう連中の間では、精靈との談話が大いに行わ  
れ、——そして、それには、決して明瞭になつては来なかつたた

くさんの御利益ごりやくがあつたのである。

しかし、幾分心の慰めにもなろうというのは、モンセーニュールの大邸宅に集つたすべての来客が一点の欠点もない服装をしていることであつた。もしも最後の審判日が盛装デー日であるといふことが認められさえしたならば、そこに集つた者は誰も彼も永遠に正しいものとなれたことであろう。のように縮らして髪粉をつけて、びんと立てた頭髪や、人工的に保持され修飾されているあのようく美しい顔色や、あのようく見るも華美な佩劍や、嗅覚に対するあのようく鋭敏な配慮をもつてすれば、確かにどんなものでもいつまでもいつまでも保たせることが出来るであろう。最上等のお仕込を受けた申分のない紳士たちは、彼等がものうげに動く

たびにちりんちりんと鳴る小さな垂れ下っている飾物を身に著けていた。こうした黄金の拘束物は貴金属の小さな鈴のように鳴り響いた。そして、その鳴り響く音や、絹や金欄や上質の亞麻のさらさら擦れる音などのために、そこの空気の中には、サン・タントワヌと彼のがつがつした飢餓とを遠くへ吹き飛ばしてしまうほどの激動があつたのだ。

服装こそはあらゆるものを作成しめるに用いられる唯一の間違いのない護符であり呪文であつた。各人は決して終ることのない仮装舞踏会のために衣服を著けているのであつた。テュイルリーの宮殿★から、モンセニユールと全宮廷とを経て、議院や、法廷や、すべての社会（あの案山子たちだけを除

いて）を経て、その仮装舞踏会は下賤な死刑執行吏にまで及んだ。その死刑執行吏でさえ、かの呪文に遵つて、「頭髪を縮らし、髪粉をつけ、金モールの上衣、扁底靴★、白絹の靴下を著用して」職務を執行せよと命ぜられていたのだ。絞首刑や車輪刑★——斧鉄の刑は稀であった——の時には、ムシュー・パリー★、とムシュー・オルレアンやその他の彼の地方の同業者たちの間では監督派流儀に★彼をそう言つたのであるが、そのムシュー・パリーは、そういう優美な服装で職を司つたものである。そして、そのキリスト紀元千七百八十年にモンセーニュールの接見会リセプションに集つた賓客たちの中で、頭髪を縮らし、髪粉をつけ、金モール服を著、扁底靴を穿き、白絹靴下を穿いた一校刑史に根ざしたある制度★が、

余人ならぬ自分たちの運の星の消えるのを見ることになろうとは、誰がおそらく思ったことであろう！

モンセーニュールは彼の四人の侍者の重荷を卸してやつて彼のチヨコレートを飲んでしまうと、最も神聖な処の中でも最も神聖な処の扉ドアをさつと開かせて、現れ出でた。すると、何という従順、何という阿諛追従、何という卑屈、何というあさましい屈従！

体からだと心との平伏については、その方法ではもう少しも天帝に対しうることが残されていなくらいであつた。——それが、モンセーニュールの礼拝者たちが天帝を決して煩わさなかつた★いろいろな理由の中の一つであつたのかもしれない。

ここでは約束の一言を授け、かしこでは一つの微笑を贈り、一

人の幸福な奴隸には一片の耳語を恵み、別の幸福な奴隸には片手の一振りを与えるながら、モンセーニュールはにこやかに彼の部屋部屋を通り過ぎて、真理の円周の遠い果<sup>はて</sup>までも行つた。そこまで行くと、モンセーニュールはくるりと向を変え、また引返して来て、そうしているうちにしかるべき時がたつと自分を例のチヨコレート妖精たちの手によつて自分の聖堂の中へ閉じこめさせてしまつて、それきり姿を見せなかつた。

見世物が終つて、そこの空気中の例の激動はほんの小さな嵐になり、例の貴金属の小さな鈴はちりんちりん鳴り響きながら階下へ降りて行つた。まもなくすべての群集の中でただ一人の人物だけがそこに残された。その男は、帽子を腕の下に、喫煙草入れを

片手に持ちながら、鏡の間あいだをゆっくりと通つて出口の方へ行つた。  
 「貴様なんぞは、」とこの人物は、彼の途中にある最後の扉ドアのところで立ち止つて、例の聖堂の方角へ振り向きながら、言つた。  
 「悪魔に喰くわれてしまえ！」

そう言うと、彼は足の埃ほこりを振り払うように指から喫煙草を振り払い、それから静かに階下へと歩いて降りた。

彼は、立派な服装をした、態度の尊大な、精巧な仮面のような顔をした、六十歳ばかりの男であつた。透き通るよう蒼白い顔。いずれもはつきりとした目鼻立ち。それに浮べた動かぬ表情。鼻は、他の点では美しい恰好をしているが、両方の鼻孔の上のところがごく微かに撮まれたようになつていた。その二つの圧搾した

ようなところ、あるいは凹みに、その顔の示す唯一の小さな変化は宿っているのだつた。その凹みは、時としては頻りに色を変えることがあつたし、また何か微かな脈搏のようなもののために折々拡がつたり縮まつたりした。そんな時には、それはその容貌全体に陰険と残忍との相を与えたのだつた。注意して吟味してみると、そういう相を助長するその容貌の能力は、口の線と、眼窩の線とが、余りにはなはだしく水平で細いということの中にあるのであつた。それにしても、その顔の与える印象から言えば、それは美しい顔であり、また非凡な顔であつた。

この顔の持主は階段を降りて庭に出ると、自分の馬車に乗り込み、馬を走らせて去つた。リセプション接見会では彼と話をした人は多くは

なかつた。彼は皆とは離れて狭い場席に立つていたし、またモンセーニュールも彼に対してもつと温かい態度を示してもよかりそうなものであつた。そういう次第であつたから、彼には、平民どもが自分の馬の前でぱつと散つて、時々は轢き倒されそうになつて危く免れるのを見るのは、かえつて愉快であるらしかつた。

彼の馭者はまるで敵軍に向つて突撃するかのように馬車を駆つた。しかも、馭者のその狂暴な無鉄砲さは、主人の顔に阻止の色を浮べさせたり、脣に制止の言葉を上させたりすることがなかつた。

馬車を激しく駆るという貴族の乱暴な風習が、歩道のない狭い街路では、ただの庶民を野蛮的に危険な目に遭わせたり不具にしたりするという苦情が、その聲<sup>つんぽ</sup>の都会と嘸<sup>おし</sup>の時代とにおいてさえ、

時折は聞き取れるようになることがあつた。しかし、そんな苦情を二度と考え方直すほどそれを気にかける者はほとんどいなかつた。そして、このことでも、他のすべてのことにおけると同様に、みじめな平民たちは自分たちの難儀を自分たちの出来る限り免れるようにするより他はなかつたのである。

烈しいがらがらがたがたという音を立てながら、今の時代では了解するのに容易ではないほどの不人情な思いやりのなさで、その馬車は幾つもの街をまつしぐらに駆け抜け、幾つもの街角を飛ぶように走り曲つて行き、女たちはその前で悲鳴をあげるし、男たちは互に掴まつたり子供たちをその通路の外へ掴み出したりした。とうとう、一つの飲用泉の近くのある街角のところへ走りか

かつた時に、馬車の車輪の一つが気持悪くちよつとがたつき、<sup>また</sup>数<sup>あ</sup>多の声があつと大きな叫び声をあげ、馬どもは後脚で立つたり後脚で飛び上つたりした。

この馬が飛び立つという不便なことがなかつたなら、馬車はおそらく止らなかつたであろう。馬車がそれの轢いた負傷者を置去りにしてそのまま駆けてゆくということはよくあることであつたし、どうしてそんなことのないはずがあろう？　しかし、びつくりした側<sup>そばづかえ</sup>仕<sup>仕</sup>はあたふたと降り、馬の轡や手綱には多数の手がかかつた。

「何の故障か？」と馬車に乗つている方<sup>かた</sup>が、静かに顔を外に出して見ながら、言つた。

寝帽ナイトキャップをかぶつた一人の脊の高い男が馬の脚の間から包みのようなものを抱え上げ、それを飲用泉の台石の上に置いて、泥土ろづちのところへ坐つて、その上に覆いかぶさりながら野獸のよう泥どに咆えていた。

「御免下さりませ、侯爵さま！」と檻樓を著た柔順な一人の男が言つた。「子供でござります。」

「どうしてあの男はあのような厭わしい声を立ててているのじや？あの男の子供なのか？」

「失礼でござりますが、侯爵さま、——可哀そうに、——さようでござります。」

飲用泉は少し離れたところにあつた。というのは、街路は、そ

れのあるところでは、十ヤードか十二ヤード四方ほどの広さに拡がっていたからである。その脊の高い男が突然地面から起き上つて、馬車をめがけて走つて来た時、侯爵閣下は一瞬剣のつかにはつと手をかけた。

「殺された！」とその男は、両腕をぐつと頭上に差し伸ばし、彼をじつと見つめながら、氣違いじみた自暴自棄の様子で、言つた。  
「死んじやつた！」

人々は周りに寄り集つて、侯爵閣下を眺めた。彼を眺めている多くの眼には、熱心に注意していることの他には、どんな意味も現れてはいなかつた。目に見えるほどの威嚇や憤怒はなかつた。また人々は何も言いはしなかつた。あの最初の叫び声をあげた後

には、彼等は黙つてしまつたし、そのままずつと黙つていた。口を利いた例の柔順な男の声は、極端な柔順さのために活氣も氣力もないものであつた。侯爵閣下は、あたかも彼等がほんの穴から出て来た鼠でもあるかのように、彼等一同をじろりと眺めし

彼は財布を取り出した。

「お前ら平民どもが、」と彼が言つた。「自分の体や子供たちに氣をつけていることが出来んというのは、わしにはどうも不思議なことじやがのう。お前たちの中の誰か一人はいつでも必ず邪魔になるところにいる。お前たちがこれまでにわしの馬にどれだけの害を加えたかわしにもわからぬくらいじや。そら！ それをあ

の男にやれ。」

彼は側仕に拾わせようとして一枚の金貨を投げ出した。すると、すべての眼がその金貨の落ちるのを見下せるようにと、すべての頭が前の方へ差し延べられた。脊の高い男はもう一度非常に氣味悪い叫び声で「死んじやつた！」と喚いた。

彼は別の男が急いでやつて来たために言葉を止めた。他の者たちはその男のために道を開けた。<sup>あ</sup>この男を見ると、その可哀そうな人間はその男の肩に倒れかかって、しゃくりあげて泣きながら、飲用泉の方を指さした。その飲用泉のところでは、何人かの女たちがあの動かぬ包みのようなものの上に身を屈めたり、それの近くを静かに動いたりしていた。だが、その女たちも男たちと同様

に黙つていた。

「おれにはすっかりわかつてゐるよ、すっかりわかつてゐるよ。」と  
 その最後に来た男が言つた。 「しつかりしろよ、なあ、ガスパー  
 ル★！ あの可哀そうなちつ小ちやなおもちや玩具の身にとつてみれば、生  
 きてるよりはああして死ぬ方がまだしもましなんだ。苦しみもせ  
 ずにじきに死んだんだからな。あれが一時間でもあんなに仕合せ  
 に生きていたことがあつたかい？」

「おいおい、お前は哲学者じやのう。」と侯爵が微笑ほほえみながら言  
 つた。 「お前は何という名前かな？」

「ドフルジユと申します。」

「何商売じや？」

「侯爵さま、酒屋で。」

「それを拾え、哲学者の酒屋。」と侯爵は、もう一枚の金貨をその男に投げ与えながら、言つた。「そしてそれをお前の勝手に使うがよいぞ。それ、馬だ。馬に異状はないか?」

群集をもう一度見て遣しもされずに、侯爵閣下は座席に反り返つて、過つて何かのつまらぬ品物を壊したが、その賠償はしてしまつたし、その賠償をするくらいの余裕はちゃんとある紳士のような態度で、今まさに馬車を駆つて去ろうとした。その時に、彼のゆつたりとした気分は、突然、一枚の金貨が馬車の中に飛び込んで来て、その床の上<sup>ゆか</sup>でちやりんと鳴つたのに、搔き乱された。「待て!」と侯爵閣下は言つた。「馬を停めておけ! 誰が投げ

おつたのか？」

彼は、ちよつと前まで酒屋のドファルジユが立っていた場所に眼をやつた。が、その場所にはさつきのあの哀れな父親が鋪石の上に俯向になつてひれ伏していて、その傍に立つてゐる人の姿は編物をしてゐる一人の浅黒いがつしりした婦人の姿であつた。

「この犬どもめが！」と侯爵は、しかし穩かな語調で、例の鼻の凹みのところだけを除いては顔色も変えずに、言つた。「わしは貴様らを誰だろうと構わずにわざと馬に踏みにじらせて、貴様らをこの世から根絶やしにしてくれたいのじやわい。もしどの悪党が馬車に投げつけおつたのかわからうものなら、そしてその盜賊めが馬車の近くにいようものなら、そやつを車輪にかけて押し潰

してやるのじやが。」

彼等はずいぶん怖氣おじけづいていたし、それに、そういうような人間が、法律の範囲内で、またその範囲を越えて、彼等に對してどんなことをすることが出来るかとの経験は、ずいぶん久しい間のつらいものであつたので、一つの声も、一つの手も、一つの眼さえも、挙げる者がなかつた。男たちの中には、一人もなかつたのだ。しかし、編物をしながら立つてゐる例の婦人だけはきつと見上げ、侯爵の顔を臆せずに見た。それに気を留めることは侯爵の威嚴に関わることであつた。彼の侮蔑を湛えた眼は彼女をちらりと眺め過し、他のすべての鼠どもをちらりと眺め過した。それから再び座席に反り返つて、「やれ！」と命じた。

彼は馬車を駆らせて行つた。そして他の馬車が後から後へと続々と馳せ過ぎて行つた。大臣、国家の山師、収税請負人、医師、法律家、僧侶、グランド・オペラ大歌劇、喜劇、燦然たる間断なき流れをなした全仮装舞踏会は、馳せ過ぎて行つた。例の鼠どもはそれを見物しに彼等の穴から這い出して来ていた。そして彼等は幾時間も幾時間も見物していた。軍隊と警官隊とがしばしば彼等とその美観との間を通つて行つて、障壁を作り、彼等はその障壁の背後へこそこそと逃げ、その間からそつと隙見したのだつた。さつきの父親はずつと前に自分のあの包みを取り上げるとそれを持つて姿を隠してしまい、その包みが飲用泉の台石の上に置いてあつた間に附着していた女たちは、そこに腰を下して、水の流れる

のと仮装舞踏会が馬車で走つてゆくのとを見守つていたし、——編物をしながら一際きわ目立つて立つていた例の一人の婦人は、運命の如き堅実さをもつてなおも編物をし続けていた。飲用泉の水は流れて行つた。かの馬車の迅速な河は流れて行つた。昼は流れて夜となつた。その都會の中の多くの生命は自然の法則に従つて死へと流れ入つて行つた。歳月の流れは人を待たなかつた。鼠どもは再び彼等の暗い穴の中でくつつき合つて眠つていた。仮装舞踏会は晩餐の席で輝かしく照されていた。万物はそれぞれの進路を流れて行つた。

## 第八章 田舎における 貴族 モンセニユール

美しい風景。そこには穀物が実つてはいるが、豊かではない。  
 麦のあるべき処にみすぼらしいライ麦の畠。みすぼらしい豌豆えんどう  
 や蚕豆そらまめの畠、ごく下等な野菜類の畠が小麦の代りになつてゐる。  
 非情の自然にも、それを耕している男女たちに見ると同様に、不  
 承不承に生長してゐるように見える一般的な傾向——諦めて枯れ  
 てしまおうとする元氣のない気風。

侯爵閣下は、四頭の駆馬と二人の馭者とによつて嚮導された、  
 彼の旅行馬車（それはいつもの馬車よりは軽快なものであつたか

もしかつた)に乗つて、嶮しい丘をがたごとと登つていた。侯爵閣下の面上の赤味は彼の立派な駢の非難になるものではなかつた★。それは内から起つたものではなかつた。それは彼の意力ではどうにも出来ぬ一つの外的の事情——沈みゆく太陽のためになつたものであつた。

旅行馬車が丘の頂上に達した時にその落陽は非常に燦然と車内へ射し込んで來たので、中に乗つている人は真紅色に浸された。「もうじきに、」と侯爵閣下は自分の手をちらりと眺めながら言つた。「薄らぐじやろう。」

事実、太陽は地平線に近く傾いていたので、その瞬間に没しかけた。重い輪止わどめが車輪にかけられて、馬車が雲のような砂すなぼこり埃埃

を立て燃<sup>もえがら</sup>殻<sup>がら</sup>のような臭いをさせながら丘を滑り下つている時、真赤な夕焼は急速に薄くなつて行つた。太陽と侯爵とは共に下つて行つたので、輪止が取り外された時には夕焼はもう少しも残つていなかつた。

しかし、そこには、断崖をなしたところも廣々としたところもある起伏した土地、その丘の麓にある小さな村、その向うの広い見晴しと高台、教会堂の塔、風車、狩猟をするための森、牢獄として使われている堡壘が上に立つてゐる断崖などが残つていた。

夜が近づくにつれて暗くなつてゆくこういうすべてのものを、侯爵は、いかにも家路に近づいてゐる者のような様子で、ぐるりと見<sup>くわ</sup>した。

その村にはただ一筋の貧乏くさい街路があつて、そこには貧乏くさい酒造場や、貧乏くさい製革所や、貧乏くさい居酒屋や、駅馬の継替えのための貧乏くさい厩舎や、貧乏くさい飲用泉や、普通の通りのすべての貧乏くさい設備があつた。そこにはまた貧乏くさい村民もいた。その村民は皆貧乏であつた。彼等の中には、

戸口に腰を下して、夕食の用意に貧弱な玉葱などを細かく裂いている者も多く述べたし、また、飲用泉のところで、葉だの、草だの、何でもそういうような土から出来るもので食べられるいろいろの小さなものの洗つている者も多くいた。彼等を貧乏にさせたものの意味深い証拠も欠けてはいなかつた。國への租税、教会への租税、領主への租税、地方税や一般税が、その小さな村の嚴かおごそ

な撻に従つて、こちらへ払いあちらへ払いしなければならなかつたので、遂には、どんなものであろうととにかく村というものが呑み込まれずに残つてゐるということが、不思議なくらいであつた。

子供はあまり見かけられなかつたし、犬は一匹も見えなかつた。  
 大人の男や女について、この世で彼等の選ぶことの出来る道は次の予想の中に述べられていた。——すなわち、製粉所の下にある小さな村で、命を支えられる限りの最低の条件で生きてゆくか、それとも、断崖の上に高く聳え立つてゐる牢獄の中で監禁されて死んでゆくかだ。

先頭に立つた一人の従僕に先触れされて、また、あたかも侯爵

が蛇髪復讐女神★たちに供奉されてやつて来たかのように、馭者

フュアリ

たちの鞭が夕暮の空氣の中で彼等の頭の周りを蛇のように絡まってひゅうひゅうと鳴る音に先触れされて、侯爵閣下は旅行馬車に乗つたまま宿駅の門のところで停つた。そこは飲用泉の近くであつて、農夫たちはしていた仕事を中止して彼を眺めた。彼も彼等を眺め、そして、彼等のうちに、貧苦に窶れた顔や姿が徐々に確実に削り落されているのを、そうと気づきはしなかつたが、目にした。その彼等の顔や姿が削り落されていることが、フランス人は瘦せているということをイギリス人の迷信にしたのであつたが、その迷信はそういう事実のなくなつた後も百年近くまで続いているのである。

侯爵閣下が、彼自身と同類の連中が宮廷のモンセーニュールの前にうなだれたように、彼自身の前にうなだれている柔順な顔——ただ、その相違は、これらの顔は単に耐え忍ぶためにうなだれているのであって御機嫌を取るためではない、ということであつたが——をずっと見やつた時、一人の白髪しらが雜まじりの道路工夫がその群に加わつた。

「あいつをここへ連れて来い！」と侯爵は従僕に言つた。

その男は帽子を片手にして連れて来られた。すると、他の連中は、あのパリーの飲用泉のところにいた人々と同じような工合に、周りに寄り集つてじつと見ながら聞耳を立てた。

「わしは途中でお前の傍を通つたようじやが？」

「閣下、仰せの通りでござります。お途中で手前めの傍をお通り遊ばしました。」

「丘を登つてゐる時と、丘の頂と、二度じやな?」

「閣下、仰せの通りでござります。」

「お前は何をあんなにじいつと見ておつたのか?」

「閣下、手前はあの男を見ておりましたのでござります」

。」

彼は少し身を屈めて、自分のぼろぼろになつた青い帽子で馬車の下を指した。他の者どもも皆身を屈めて馬車の下を見た。

「どの男じや、豚め? そしてお前はなぜそこを見ておるのじや?」

?」

「御免下さりませ、モンセーニュール閣下。奴はその歯止沓★——輪止

はどめぐつ

★——輪止

の鎖にぶら下つておりましたんで。」

「誰がじや？」とその旅行者が問うた。

「モンセーニュール閣下、あの男のことで。」

「この阿呆どもめは悪魔にさらわれてしまふがいい！ その男は何という名前か？ お前はこの辺の者を一人残らず知つておるじやろう。そやつは誰だつたのじや？」

「へえ、モンセーニュール閣下！ そいつはこの辺の者じやござりませな

んだ。生れてからこつち、手前はそいつを一度も見たことがござりませなんだ。」

「鎖にぶら下つておつたと？ 息を詰らすためか？」

「御免を蒙りまして申し上げますが、それが不思議なところでございましたよ、閣下。モンセーニュール。そいつの頭は仰向にぶら下つておりました、——こんな風に！」

彼は馬車に對して横になるように体からだを向むけ、反そり返かみつて、顔を空の方へ振り向け、頭をだらりと下げた。それから、体を元へ戻して、帽子をいじくつて、ぴょこんと一つお辞儀をした。

「そやつはどんな様子をしておつたか？」

「閣下モンセーニュール、その男は粉屋よりも真白でござりました。すつかり埃ほこりをかぶつて、幽靈のように白くつて、幽靈のように脊が高く★つて！」

この画のような言い方はそこにいた小さな群集に非常な感動を

惹き起した。が、すべての眼は、他の眼と珣せもせずに、侯爵閣下を眺めた。たぶん、彼には良心を悩ます幽靈などというものがいるかどうかということを観察するためであつたのだろう。

「なるほど、お前はでかしおつたわい。」と侯爵は、こういう虫けらどもを相手に立腹すべきではないとうまく気がついて、言つた。「泥坊めがわしの馬車にくつついているのを見ておりながら、お前のその大きな口を開いて知らせようともしなかつたとはな。ちえつ！ この男をあちらへ連れて行け、ムシュー・ガベル！」

ムシュー・ガベルはそこの宿駅長であつて、他に何かの徵稅吏をも兼ねていた。彼は、さつきから、この訊問を輔佐するためにすこぶる追従するような態度で出て来ていて、その訊問されてい

る者の腕のところの服をいかにも役人らしい風に掴んでいたのである。

「ちえつ！ あちらへ行け！」とムシュー・ガベルが言つた。

「今その他よそもの所者よそもの」<sup>よそもの</sup>が今夜お前の村で宿を取ろうとしたらそやつを捕えておけ。そしてそやつに悪い事をさせぬようにきつと気をつけるのじやぞ、ガベル。」

「閣モンセニユール下モンセニユール、御命令は必ず遵奉いたしますつもりでございます。」

「そやつは逃げ失せてしまつたのか、野郎めは？ ——さつきの罰当りはどこにいる？」

その罰当りは既に六人ばかりの特別に親しい友達★と一緒に馬

車の下に入つていて、自分の青い帽子で例の鎖を指し示していた。別の六人ばかりの特別に親しい友達がすぐさま彼をひつぱり出して、息もつかせずに侯爵閣下のところへ出した。

「その男は逃げ失せてしまつたのか、この頓馬め、馬車が輪止をかけに停つた時にな？」

「閣下モンセーニュール、奴は、川の中へ飛び込む人間のように、頭を先にして、丘の坂のところをまつさかさまに飛び下りてゆきましてござります。」

「それを調べてみろ、ガベル。馬車をやれ！」

鎖を見つめていた例の六人の者は、羊のようにかたまつて、まだ車輪の間にいた。その車輪が突然回転し出したのだから、彼等

が皮と骨とを助かつたのは全く僥倖であつた。その皮と骨との他には彼等には助かるべきものはほとんどなかつたのだ。でなければ彼等はそれほど運がよくなかつたかもしけれなかつた。

馬車は急に村から駆け出して、その向うの高台へと登つて行つたが、その勢はまもなくその丘の嶮しさに阻まれた。次第に、馬車は速力が衰えて並足となり、夏の夜のいろいろの甘い香の間をゆらゆらと揺れがたがたと音を立てながら登つて行つた。馭者たちは、無数の遊糸のような蚋いとゆう<sup>ぶよ</sup>があの蛇神復讐女神フユアリィに代つて自分たちの周りをぐるぐるかおりつていて中を、ゆつたりと自分たちの鞭の革紐の先を繕つていた。側そばづかえ仕仕は馬の脇を歩いて行つた。従僕はぼんやりと見える遠くの方へ先頭に立つて駆けて行くのが聞

き取れた。

丘の一番嶮しい地点に小さな墓地があつて、そこに一つの十字架があり、その十字架に救世主キリストの新しい大きな像がついていた。それはみすぼらしい木像で、誰か未熟な田舎の彫刻師の作つたものであつたが、その彫刻師はこの像を実物——おそらくは、自分という実物——から考案したのであつた。というのは、それは恐しく痩せ細つていたから。

永い間だんだんと悪くなつて來ていて、まだその一番悪いところへ來ていない一つの大きな悲惨の、この悲惨な表象★に向つて、一人の女が跪いていた。彼女は馬車が自分に近づいて來ると頭を振り向け、素速く立ち上り、馬車の扉ドアのところに現れた。

「ああ、閣下！ 閣下、お願いでございます。」

モンセーニュール

閣下

モンセーニュール

！

モンセーニュール

、

モンセーニュール

、

えもせずに、窓の外に顔を出した。

「どうした！ 何のことじや？ いつもいつもお願ひじやな！」

「閣下。お慈悲でござります！ 御猟場番人の、私の亭

主のことで。」

「猟場番人の、お前の亭主がどうしたのじや？ お前らの言うことはいつもいつも同じじや。何かが納められないのじやろう？」

「亭主はすっかり納めました、閣下。亭主は死にました

。」

「そうか！ では安穩になつておるのじや。わしがそれをお前の

ところへ生き返らせてやれるか？」

「ああ、さようではございません、閣下！」しかし亭主

モンセーニュール

は、あそこに、萎びた草が少しばかりかたまつて生えているところの下にあります。」

「それで？」

「閣下モンセーニュール」

、そういう萎びた草の少しかたまつて生えているところがそれはそれはたくさんございます！」

「それで？」

彼女は年寄の女のよう見えたが、ほんとうは若いのであつた。彼女の物腰は強い悲歎を抱いているような物腰であつた。代る代る、彼女はその筋立つた瘤だらけの両手を烈しく力をこめて握り

合せたり、片手を馬車の扉にかけたりした、——まるでその扉が人間の胸であつて、訴える手の触るのを感じてくれるもののように、やさしく、撫でさすりながら。

「閣下、お聞き下さいませ！」

「閣下、私のお願

いをお聞き下さいませ！私の亭主は貧乏のために死にました。

たくさんのが貧乏のために死にます。もつとたくさんの者が貧乏のために死にますでしょう。」

「それで？わしがその者どもを養えるか？」

「閣下、

、それは有難い神さまだけが御存じでござります。

けれども私はそんなことをお頼みするのではございません。私のお願いたしますのは、私の亭主の名前を書きました小さな石か

木片きぎれを一つ、亭主の寝ております場所がわかりますように、その上に置かせていただきたいということでございます。でございませんと、その場所はじきに忘れられてしまいますでしよう。私が同じ病で死にます時にはそこはどうしても見つからないでございましょう。私はどこか他の萎びた草のかたまつて生えているところの下に埋められますでしよう。 閣モンセーニュール 下ドア、死ぬ者はそれは

それはたくさんでございます。死ぬ者ははずんずん殖えて参ります。貧乏な者がそれはそれはたくさんでございますから。 閣モンセーニュール 下ドア

！ 閣モンセーニュール 下ドア！

側仕は彼女を扉から押し除け、馬車は急に疾い早足で駆け出し、馭者は馬の足を速めさせたので、彼女は遙かの後に取残され、そ

して モンセーニュール閣下は、再び蛇髪復讐女神に護衛されて、彼と彼のやかた館との間に残っている一二リーグ★の距離を急速に短縮しつつあつた。

夏の夜の甘い香は彼の周囲一面にたちこめた。そしてまた、そこから遠く離れてもいない飲用泉のところにいる、塵まみれの、襟襷を著た、働き疲れた群衆の上にも、雨の降るように、偏頗なくたちこめた。その群衆に向つて、例の道路工夫は、彼の全部であるところの例の青い帽子の助けを藉りて、彼等の辛抱出来る限り、さつきの幽靈のような男のことをまだ頻りに述べ立てていた。そのうちに、だんだんと、彼等は辛抱が出来なくなるにつれて、一人一人と減つてゆき、小さな窓々の中に灯火が瞬き出した。その

灯火は、窓が暗くなつてもつと星が出て来るにつれて、消されたのではなくて空へ打ち上げられたように思われた。

その頃、屋根の高い大きな家と、枝を拡げたたくさんの樹木との影が、侯爵閣下に覆いかかっていた。そして、その影は、彼の馬車が停つた時に、火把たいまつの光と入れ換つた。それから彼の館の大扉が彼に向つて開かれた。

「ムシュー・シャルルがわしを訪ねて来るはずじやが。イギリスから到著しておるか？」

「モンセーニュール閣下、まだ御到著ではございませぬ。」

## 第九章 ゴルゴンの首

侯爵閣下のその館は、どつしりとした建物であつて、その前面には石を敷いた広い庭があり、二条の彎曲した石の階段が、表玄関の扉の前にある石の露台で出会つていた。何から何まで石だけの建物で、どちらを向いても、どつしりした石造の欄干や、石造の甕や、石造の花や、石造の人間の顔や、石造の獅子の頭などがある。まるで、二世紀前にその建物が竣工した時に、ゴルゴン★の首がそれを検分したかのよう。

侯爵閣下は馬車から出て、火把<sup>たいまつ</sup>を先に立てて、浅く段をつけ

た幅広の上り段を上つて行つたが、その火把はあたりの暗闇を搔き乱し、彼方かなたの樹の間の廄の大きな建物の屋根にいる一羽の梟から声高い抗議を受けたほどであった。その他のすべてのものはごく静かであつたので、階段を上りながら持つて行かれる火把と、玄関の大扉のところで差し出されているもう一つの火把とは、夜の戸外にあるのではなくて、密閉した宏壮な室の中にあるもののように燃えていた。梟の声の他に聞える物音とては、噴水がその石の水盤に落ちる音ばかりであつた。何しろ、その夜は、何時間も続けざまに息いきを殺し、それから長い低い溜息を一つ吐いて、また息を殺すと言われるあの闇夜やみよなのであつたから。

玄関の大扉が背後で鏘然たる音を立てて閉まる、侯爵閣下は、

古い猪猟槍や、刀剣や、狩猟短剣などで物凄く飾られ、また、今はおのが保護者なる死の許もとへ行つてゐる多くの百姓たちが、領主の怒りに触れた時にそれで打たれたところの、太い乗馬笞や馬鞭などでいつそう物凄く飾られている表広間を、横切つて行つた。

夜の用心のために戸締りをしてある、暗い、大きな部屋部屋を避けながら、侯爵閣下は、火把持を前に歩かせて、階段を上つて、廊下に向いている一つの扉ドアのところまで行つた。その扉ドアがさつと開けられると、彼は、寝室と他の二室、都合三室の彼自身の私室へ入つた。床ゆかには涼しげに絨毯を敷いてない、高い円天井の室で、炉には冬季に薪を燃やすための大きな薪架があり、豪奢な時代の豪奢な国の侯爵という身分にふさわしいあらゆる豪奢なものがあ

つた。決して断絶することがないはずの王統★の先々代のルイー  
ルイ十四世——時代の流行様式が、この三室の高価な家具に歴  
然と顯れていた。が、それは、フランスの歴史の古い時代の貢の  
挿絵ともなるべきところの数多あまたの品によつて変化を与えられても  
いた。

その室の中の第三の室には、夕食の食卓に二人前の用意がして  
あつた。そこは、その館の消化器のような恰好★をした四つの塔  
の一つの中にある、円形の室であつた。小さな、天井の高い室で、  
そこの窓は一杯に開け放つてあり、木製の鎧戸は閉めてあつたの  
で、暗い夜の闇は、鎧戸の石色の幅広の線と互違あらへいに、幾つもの  
黒い細い水平の線になつて見えるだけだつた。

「甥めは、」と侯爵は、その夕食の準備をちらりと見やつて、言った。「到著しておらぬということじやつたが。」

御到著ではありませんが、モンセーニュール閣下モンセーニュールと御一緒のことと思つておりましたので、とのことであつた。

「うむ！ 奴は今夜は著きそうにもない。でも、食卓はそのままにしておけ。わしは十五分のうちに身支度を整えるから。」

十五分のうちにモンセーニュール閣下モンセーニュールは身支度を整えて、選りすぐつた贅沢な夕食に向つてただ独り著席した。彼の椅子は窓と向い合つていたが、彼はスープを吸つてしまつて、ボルドー葡萄酒の杯を脣へ持つて行きかけた時に、その杯を下に置いた。

「あれは何じやな？」と彼は、例の黒色と石色との水平の線のと

ころをじつと氣をつけて見ながら、静かに尋ねた。

「モンセーニュール閣モンセーニュール下アッ？ あれと仰せられますと？」

「鎧戸の外じや。鎧戸を開アけてみい。」

その通りにされた。

「どうじや？」

「モンセーニュール閣モンセーニュール下アッ、何でもございませぬ。樹と闇とがあるだけでございます。」

口を利いたその召使人は、鎧戸をさつと開アけて、顔を突き出して空虚な暗闇を覗いて見てから、振り返つてその闇を背後にして、指図を待ちながら立つた。

「よろしい。」と落著き払つた主人が言つた。 「元の通りに閉シめ

ろ。」

それもその通りにされ、侯爵は食事を続けた。食事を半ば終えた頃、彼は、車輪の音を聞いて、手にしている杯を再び止めた。その音は威勢よく近づいて、館の正面までやつて來た。

「誰が來たのか尋ねて來い。」

それは ル閣下 の甥であつた。彼は午後早くに ル閣下 の後数リーグばかりのところまで來ていたのであつた。彼はその距離を急速に短縮したのだが、しかし途中で ル閣下 に追いつくほどに急速ではなかつた。彼は ル閣下 が自分の前に行くということは宿駅で聞いていたのだ。

ちようどこちらに晚餐の用意がしてあるから、どうか来て食事

していただきたい、と彼に言つて來い（モンセーニュール閣下）がそう言つたのであるが）とのことであつた。まもなく彼はやつて來た。彼はイギリスでチャールズ・ダーネーとして知られている人物であった★。

モンセーニュール閣下

は彼を懇懃な態度で迎えた。が二人は握手をしなかつた。

「あなたは昨日パリーをお立ちになりましたのですね？」と彼は、食卓に向つて著席した時に、モンセーニュール閣下に言つた。

「昨日。で、お前は？」

「私は真直に参りました。」

「ロンドンから？」

「そうです。」

「お前は来るのにだいぶん永くかかつたようじやのう。」と侯爵は微笑を浮べながら言つた。

「どういたしまして。私は真直に来ましたのです。」

「いや失礼！ わしの言うのは、旅行に永くかかつたというのじやない。旅行をする気になるのに永くかかつたというのじや。」

「私の手間取りましたのは、——と甥はちよつと返答をためらつて——「いろいろな用事のためでした。」

「そうだろうとも。」と垢抜けのした叔父は言つた。

召使人がいる間は、それ以外の言葉は二人の間に交かわされなかつた。珈琲が出されて、二人だけになると、甥は、叔父を見つめて、

精巧な仮面に似た顔の眼と見合いながら、話を切り出した。

「あなたもお察しのように、私の戻つて参りましたのは、私が国を去りました目的を続行するためです。その目的のためには私は大きな思いがけない危険に陥りました。しかし、それは神聖な目的です。ですから、もし私がそれのために死ぬところまで行つたとしても、私はそれをやり通したろうと思います。」

「死ぬところまでということはないさ。」と叔父は言つた。「死ぬところまで、などと言う必要はないよ。」

「もし私が、」と甥が返答した。「そのために死の瀬戸際まで連れて行かれたとしても、あなたがそこで私を止めてやろうと気にかけて下すつたかどうか、怪しいものですねえ。」

鼻にあるあの深くなつたところと、残忍な顔にあるあの細い真直な線が長くなつたこととで見ると、そのことは到底望みがないと思われた。叔父はそんなことがあるものかという抗議の優雅な手振りを一つしたが、それは上品な躊から來たちよつとした形式であることは明かであつたので、相手に安心を与えるようなものではなかつた。

「実際のところ、」と甥が続けて言つた。「私の知つてゐる限りでは、あなたは、私を取巻いていた嫌疑を受けやすい事情に、いつもそう嫌疑を受けやすい外見を与えるようにと、殊更にお骨折になつたかもしませんね。」

「いや、いや、そんなことはしないさ。」と叔父は面白そうに言

つた。

「しかし、それはともかく、」と甥は、深い疑惑の念をもつて彼をちらりと眺めながら、再び言い始めた。「あなたの御方針がどうしてでも私に思い止らせよう、そしてそのためにはどんな手段であろうと躊躇しないというのであることは、私は承知しています。」

「のう、お前、わしはお前にそう言い聞かせたはずじゃ。」と叔父は、例の二つの凹みのところを微妙に脈搏<sup>う</sup>させながら、言つた。  
「ずっと以前にお前にそう言い聞かせたのを思い出してもらいたいものじやな。」

「覚えております。」

「有難う。」と侯爵は言つた、——實際ごくやさしく。

彼の声は、ほんと楽器の音のよう<sup>ね</sup>に、空中に漂つた。

「つまりですね、」と甥は言葉を続けた。「私がこのフランスでこうして牢獄に入らずにいられるのは、あなたにとつては不運であると同時に、私にとつては幸運なのだ、と私は信じます。」

「わしにはどうもまるでわからんが。」と叔父は、珈琲を啜りながら、返答した。「説明してもらえまいかのう？」

「もしもあなたが宮廷の不興を蒙つてお出でではなく、またここ何年間もあのように面白からぬ形勢になつてお出でではなかつたらば、一枚の拘禁令状★で私はどこかの城牢へ無期限に送り込まれていたらう、と私は信じているのです。」

「そうかもしけん。」と叔父は極めて冷静に言つた。「家門の名譽のためには、わしはお前をそれくらいまでの不自由な目に遭わせる決心をしかねないからな。いや、これは失礼なことを言つたのう！」

「一昨日の接見会リセプションも、私には仕合せにも、例の通り冷いものだつたろうと思いますね。」と甥が言つた。

「わしなら仕合せにもとは言わぬがな、お前。」と叔父はいかにも垢抜けのした上品さで返答した。「わしにはそうとは信じられんよ。孤独という有利な境遇に取巻かれた、考慮するには持つて來いの機会というものは、お前が独力でやるよりも遙かに有利にお前の運命を左右することが出来るのじや。だが、その問題を議

論したところで無益じや。わしは、お前の言う通り、不利な地位に立つておる。そういう小さな懲治の手段、家門の権力と名誉とを守るためのそういう穏やかな助力、お前をそんな不自由な目に遭わせることの出来るそういう些少の恩恵、そういうものも今は伝<sup>つて</sup>を求めてしつこく頼まなければ得られぬことになつておる。

そういうものを得ようと求める者は極めて多数じやが、それを与えられる者は（比較的に言えば）ごく少数なのじや！ 前はこんなことはなかつたのだが、そういうようないろいろのことではフランスは悪化して来ておるわい。わしたちの遠くもない先祖たちは近隣の下民どもに対して生殺与奪の権を持つておつたものじや。この部屋からも、たくさんのそういう犬どもがひつぱり出されて

絞め殺されたし、この次の部屋（わしの寝室）では、わしたちの知つているところでも、一人の奴などは、自分の娘のことについて——そやつの娘じやぞ！——何か横柄な気の利いたことを言いおつたというので、その場で短剣で突き刺されたものじやよ。わしたちは多くの特権を失うてしもうた。新しい哲学が流行はやつて来たでのう。で、当今、わしたちの地位をあくまで主張するとなると、ほんとうに不便な目に遭うかもしけんわい。（わしは遭うだろうとまでは言わぬ。遭うかもしけんと言うのじや。）何もかも全く悪くなつてしまふた、全く悪くなつてしまふた！」

侯爵は穩かに少量の一撮みの喫煙草を喫いだ。そして、國家更生の偉大な手段となるべき、この自分という人間がまだ存在して

いる国家について、いかにもこの上なく彼にふさわしく優雅に落胆したような様子で、頭を振った。

「われわれは、昔でも近代でも、余りわれわれの地位を主張して来ましたので、」と甥は憂鬱に言つた。「われわれの家名はフランス中のどの家名よりも憎み嫌われていると私は思います。」

「そうありたいものじやな。」と叔父が言つた。「高貴な者に対する憎悪は卑賤な者の無意識の尊敬じや。」

「この辺のどこの土地にだつて、」と甥は前と同じ語調で言い続けた。「恐怖と屈従との陰鬱な敬意以外のどんな敬意でも浮べて私を見てくれるような顔は一つだつて見当りませんよ。」

「家門の偉大さに対する礼儀じやよ。」と侯爵は言つた。「わし

どもの一門がその偉大きさを維持して來たやり方から見て当然受くべき礼儀じやよ。はつはつ！」そして彼はまた穩かに少量の一撮みの喫煙草を嗅いで、軽く脚を組んだ。

しかし、彼の甥が食卓に片肱をかけて、思いに沈んで元気なくその片手で眼を蔽うた時、あの精巧な仮面は、それをかぶつている人の無頓著を装<sup>よそお</sup>う態度には不釣合なほど、鋭さと細心さと嫌悪とを強く集中させて、彼を横目にじつと見た。

「抑圧は唯一の永続する哲学なのじや。恐怖と屈従との陰鬱な敬意は、なあ、お前、」と侯爵は言つた。「この屋根が、」と屋根の方を見上げながら、「空を見えぬように遮つてゐる限りは、あの方どもを鞭に柔順にさせておくじやろうて。」

それは侯爵の想像したほど永いことではないかもしかつた。この時からわずか数年後のその館と、またやはりこの時からわずか数年後のそれと同じような五十の館との光景を、その晩彼に見せてやることが出来たならば、彼は、火災で黒焦げにされ、掠奪で破壊された、その物凄い廃墟から、どれを自分のものとして主張していいか、途方に暮れたことであろう。彼の誇った屋根について言えば、彼はそれが新しい方法で空を見えぬように遮るのを知つたであろう。——すなわち、その屋根の鉛が、幾万の小銃の銃身から発射されて、それに中つた人々の死体の眼から、永久に、空を見えぬように遮る★、という新しい方法である。

「ともかく、」と侯爵が言つた。「お前が望まんにしても、わし

は家門の名誉と安泰とを保つてゆくつもりじやよ。だが、お前は疲れているに違いない。今夜は話はこれで切り上げるとしようかな？」

「もうしばらく。」

「お前さえよければ、一時間でも。」

「われわれは、」と甥が言つた。「悪事をして來たのです。そして今その惡事の報いを受けているのです。」

「わしたちが惡事をして來たと？」と侯爵は、尋ねるような微笑を浮べて、最初に自分の甥を、次に自分を優雅に指さしながら、真似て言つた。

「われわれの一家です。その名誉が私たち二人ともにとつて全

く違つた意味で非常に大切なものである、われわれの名譽ある一家がです。私の父の時代だけできえ、われわれは、何であろうとわれわれの快樂の邪魔をした人間には一人残らず害を加えて、夥しい悪事をしたのです。私の父の時代は同時にあなたの時代なのですから、父の時代のことを話す必要などがどうしてありますよう？ 私の父と双生子ふたごの兄弟で、共同相続人で、父の後継者であるあなたを、私は父と切り離すことが出来ましようか？」

「死という奴が切り離してくれたよ！」と侯爵が言つた。

「その父の死のために私は、」と甥が答えた。「私にとつては恐しい制度に束縛されることになり、私はその制度に対しても責任はあるが、その中につけて権力がないのです。それでも、私の母の

口から出た最後の願いは実行したい、母の眼に現れた最後の眼付には従いたいと思つています。その眼付は慈悲を施して罪の償いをするようにと私に懇願したのでした。それで、助力と権力とを求めましたが無駄だったので苦しんでいるのです。」

「そんなものをわしに求めてもだ、のう、お前、」と侯爵は、人差指で彼の胸のところに触りながら——一人はその時は炉の傍に立つていた——言つた。「それはいつまでたつたつて無駄だろうな。そう思つていてもらいたい。」

彼が喫煙草の箱を片手にしたまま、彼の甥を静かに眺めながら立つている間、透き通るように白いその顔にあるどの細い真直な線も、残忍そうに、狡猾そうに、きっと引締められた。彼は、あ

たかも彼の指が短剣の鋭利な切先きつさきであつて、それで技わざも巧みに相手の体からだを刺し貫きでもするかのように、もう一度甥の胸のところに手をあて、そして言つた。――

「なあ、お前、わしはこれまで自分の従つて来た制度を続けながら死ぬつもりじゃ。」

こう言つてしまふと、彼は喫煙草の最後の一撮みを喫いで、その箱をポケットに入れた。

「お前も道理のわかつた人間になつて、」と彼は、卓上の小さな呼鈴ベルを鳴らしてから、附け加えた。「お前の生れながらの運命に甘んじた方がいいのじやが。だが、ムシュー・シャルル、お前にはもうその見込がないようじやな。」

「この財産もフランスも私にはもうないものです。」と甥は愁然として言つた。「私はその二つを抛棄します。」

「二つともお前の抛棄出来るものかな？ フランスの方はそうかもしれん。が、財産は？ それは言うほどの値打もないくらいのものじやが、それでも、もうお前の勝手に出来るものか？」

「私の今申しました言葉では、私はそれをもう要求するつもりはないという意味なのです。もしその財産が明日にでもあなたから私に譲り渡されるとしましても——」

「明日<sup>あす</sup>そうなるということはありそうにもないという自惚れをわ

しは持つておるが。」

「——あるいは今から二十年後にそうなるとしましても——」

「それはまたずいぶん敬意を表したものじゃな。」と侯爵が言つた。「それにしても、わしはその仮定の方が有難いのう。」

「——私はその財産を棄てて、どこか他の処で他の方法で生活します。放棄したところで大したものじやありません。悲惨と廃墟とのごた集め以外の何でしよう！」

「ほほう！」と侯爵は、豪奢な室内をぐるりと見 しながら、言つた。

「見た眼にはそれはここなどずいぶん立派です。しかし、青空の下、白日で、そのほんとうの姿で見れば、それは、浪費と、失政と、誅求と、負債と、抵当と、圧制と、飢餓と、窮乏と、困苦との、崩れかけている塔なのです。」

「ほほう！」と侯爵は、いかにも満足そうな様子で、再び言つた。

「もしそれがいつか私のものになるとしましても、私はその財産を、それを曳きずり倒そうとしている重圧を徐々に除去するに（もしさういうことが出来るとしてですが）もつと適した誰かの手に、委ねます。そうして、ここを立去ることが出来ないで、永い間辛抱の出来る限り苦しめられて來た、あの悲惨な人々が、次の代には、幾分でも苦しみが減るようにします。ともかく、それは私のものにはしません。その財産には、またこの国中にも、呪いがかかるています。」

「してお前は？」と叔父が言つた。「余計なことまで聞きたがるのには宥してくれい。<sup>ゆる</sup>お前はお前の新しい哲学に従つて有難く暮し

てゆくつもりかな?」

「私は、生きてゆくためには、わが国の他の人々が、たとい名門の後楯うしろだてがあろうと、いつかはしなければならないかもしけれぬことをするより他ほかはありません、——つまり、働くことです。」

「例えば、イギリスで?」

「そうです。そうすれば、家門の名誉がこの国で私のために傷けられる恐れはありませんよ。また、他の国では家名が私のために穢けがされるはずはありません。他の国では私は家名を名乗つておりますから。」

呼鈴ベルを鳴らしたのは隣の寝室に灯火をつけさせるためだつた。

その室は今、通路の戸口から、ぱつと明るく輝いた。侯爵はその

方を見やつて、側そばづかえ仕の足音の遠ざかつてゆくのに耳を傾けた。

「イギリスはお前にはよほど気に入つておるようじやのう、お前があちらでまずうまくいつているところを見るとな。」と彼は、それから、微笑を浮べながら平静な顔を甥に向けて、言つた。

「さつきも申し上げましたが、私があちらでうまくいつていることについては、あなたのお蔭かもしれないと思つていますよ。その他のことについては、あそこは私の避難所なのです。」

「奴らは、あの自慢屋のイギリス人どもは、イギリスはたくさんの人間の避難所になつていてる★と言うておるのう。お前は同国人でありますことを避難所にしている人間を知つておるじやろう？ 医者じやが？」

「ええ。」

「娘と一緒にのう？」

「ええ。」

「なるほど。」と侯爵が言つた。「お前は疲れているじやろう。では、おやすみ！」

彼が例の極めて慇懃な態度で頭を下げた時に、その微笑してい  
る顔には何か隠立かくしだてしているようなところがあつたし、彼は今  
の言葉に何となく不可思議な意味を含ませたので、それが彼の甥  
の眼と耳とに強く響いた。同時に、あの眼の縁の細い真直な線と、  
細い真直な脣と、鼻の凹みとが、見事に悪魔的に見える皮肉さを  
見せて歪ゆがんだ。

「なるほど。」と侯爵は繰返して言つた。「娘と一緒に医者か。なるほど。そこで新しい哲学が始るという訳じやな！ お前は疲れているじゃろう。じゃ、おやすみ！」

彼のその顔に向つて質問することは、館の外の石造の顔に向つて質問するのと同様な効能しかなかつたろう。甥は扉ドアの方へ歩いてゆきながら彼をじつと見たが、何の得るところもなかつた。

「おやすみ！」と叔父が言つた。「わしは明日の朝またお前に逢いたいと思うておるよ。ゆつくりおやすみ！ わしの甥あすどのをあちらの部屋へ明りをつけて御案内せい！ —— それから、したければ、その甥どのを寝床の中で焼き殺しても構わんぞ。」と彼はこの最後の文句を心の中で附け加え、それから、小さな呼鈴ベルをも

う一度鳴らして、側仕を自分の寝室へ呼んだ。

側仕は来てやがて引下り、侯爵閣下は、その暑いひつそりした夜、眠れるようにと静かに体を馴らすために、ゆるや寛かな寝間著を著てあちこちと歩いた。柔かなスリッパを穿いた足が床の上で少しの音も立てずに、さらさらと著物の音だけさせて室内を歩き 一つ、彼は優美な虎のように動いていた。——物語にある、改悛の念のない邪悪なある侯爵が、魔法をかけられて、週期的に虎の姿に変るのが、今終つたばかりなのか、これから始ろうとしているのか、どちらかであるように見えた。

彼は華美な彼の寝室を端から端まで行つたり来たりしながら、ひとりでに心に浮んで来るその日の昼の旅行の断片を再び眼にし

ていた。日没頃に丘をのろのろと登つて來たこと、沈みゆく太陽、下り坂、製粉所、断崖の上の牢獄、凹地にある小さな村、飲用泉のところにいた百姓ども、馬車の下の鎖を指し示していた青い帽子を持つた道路工夫などである。その飲用泉は、パリーのあの飲用泉と、段の上に横わつていたあの小さな包みと、その上に腰を屈めていた女どもと、両腕を差し上げて「死んじやつた！」と叫んだ脊の高い男とを思い起させた。

「もう涼しくなつた。」と侯爵閣下は言つた。  
 「とこに就けるじやろう。」

そこで、大きな炉の上に一つの灯火だけを燃やしておいたまま、彼は自分の周りに薄い紗の帳とぼりを垂らした。そして、眠ろうとして

氣を落著けた時に、夜が長い溜息を一つついてその沈黙を破つたのを聞いた。

外囲の塀の上にある石造の顔は、重苦しい三時間といふもの、何も見えず、真黒な夜を見つめていた。重苦しい三時間といふものは、廄の中の馬は、秣<sup>まぐさ</sup>架<sup>かけ</sup>をがたがたさせ、犬は吠え、例の梟は詩人たちが常套的に梟の声としている鳴声とはほとんど似ていない鳴声を立てた。だが、彼等のものと定めてあることを滅多に言わないので、そういう動物の強情な習慣なのである。

重苦しい三時間といふものは、館の石造の顔は、獅子のも人間のも、何も見えず、夜を見つめていた。深い暗黒はすべての風景を包み、深い暗黒はその静寂をすべての路上の静まり返っている

塵埃に附け加えた。墓地では萎びた草の少しかたまつて生えていたところが互に見分けがつかぬくらいになつていた。あの十字架についている像は、眼には見えなかつたが、そこから降りて来ていたかもしけなかつた。村では、収税者も納税者もみんなぐつぐつと眠つていた。たぶん、飢えた者が通例するように御馳走の夢をみながら、また、こき使われる奴隸や輶くびきをかけられた牡牛がするかもしれないよう安樂と休息との夢をみながら、村の瘠せた住民たちは深く眠つて、食物を食べ自由の身となつていた。

暗い三時間を通じて、村の飲用泉は見えず聞えずに流れ、館の噴水は見えず聞えずに落ち、——どちらも、時の泉から流れ落ちる分秒のように、溶け去つた。それから、その二つの灰色の水が

薄明りの中に幽靈のように見え出し、館の石造の顔は眼を開いた。

次第次第に明るくなつてゆき、とうとう、太陽は静かな樹々の頂に触れ、丘の上一面にその輝かな光を注いだ。その真紅の光を浴びて、館の噴水の水は血に変つたように見え、石造の顔は深紅色になつた。小鳥の楽しく囀る声は高く賑かであつた。そして、侯爵閣下の寝室の大きな窓の風雨に曝された窓敷の上で、一羽の小鳥が力一杯にこの上もなく美わしい声で歌を歌つた。それを聞くと、一番近くの石造の顔はびっくりして眼を見張つたようと思われ、口をぽかんと開け下顎をだらりと下げて、怖じ恐れたように見えた。

いよいよ、太陽はすっかり昇つて、村では活動が始つた。開き

窓は開かれ、がたがたした戸は門を外され、人々は、新しい爽かな空気にまだ冷氣を覚えて——震えながら外へ出て来た。それから、村の住民の間では、滅多に軽減されることのない一日の労働が始つた。飲用泉のところへ行く者もある。野良のらへ行く者もある。ここでは、掘つたり鋤いたりしに行く男や女たちがいる。かしこでは、乏しい家畜の世話をして、どこの路傍にでもあるような牧場へと、骨ばつた牝牛を牽いてゆく男や女たちがいる。教会堂の中や例の十字架のところには、跪いている人の姿が一つ二つある。その十字架に祈祷している場に列席しながら、牽かれている牝牛は、十字架の下の雑草の間に朝食を求めようとしていた。

館は、その格式にふさわしく、遅く目覚めた。が、徐々に確実

に目覚めた。まず最初に、陰気な猪猟槍と狩猟短剣とが昔のように赤く染められ、次には、朝の日光によく切れそうにぴかぴかと光つた。それから、扉や窓がさつと開かれる。厩の中の馬は戸口のところへ流れ込んで来る清々しい光を肩越しに見す。樹の葉は鉄格子の窓のところできらきらと光りさらさらと音を立てる。犬は鎖を強くひっぱつて、解き放たれるのを待ちかねて後脚で立ち上る。

こういうすべての些細な出来事は、毎日毎日きまりきつて、朝が戻つて来るごとに、あることであつた。が、館の大鐘の鳴り響いたことや、階段を駆け上つたり駆け下りたりすることは、確かに、いつもあることではなかつた。また、露台テレスをあわただしく動

く人の姿も、ここでもかしこでもどこでも長靴を穿いてどかどか歩きることも、急いで馬の鞍に跨つて駆け去ることも、確かに、いつもあることではなかつた。

このあわて急ぐことをどんな風かぜが例の白髮しらが雜りの道路工夫に伝えたのであろう？ 彼は既に、村の向うの丘の頂で、その日の弁当（持ち運び映えのしない）を鴉ついいばでも喙ほむだけの骨折甲斐のない包みにして積み重ねた石ころの上に置いて、仕事にかかるついたのに。空飛ぶ鳥が、そのあわて急ぎの穀粒を遠方へ運んでゆくうちに、鳥が偶然に種子を蒔くことがあるように彼の上に一粒を落したのであろうか？ それはいづれにしても、その道路工夫は、その蒸暑い朝、膝まで埃ほこりに埋めながら、まるで命がけのように丘

を駆け下りてゆき、飲用泉のところへ著くまでは一度も止りはしなかつたのであつた。

村のすべての人々は飲用泉のところに集り、いつものふさぎ込んだ様子であたりに立つて、低い声で囁き合つていたが、しかし冷かな好奇心と驚きより他には何の感情も現さなかつた。大急ぎで牽いて来られて、何でもその辺のものに繫がれた牛は、ぼんやりと見 したり、寝そべつて、中途立ちやめになつた彼等の逍遙の間に拾い喰つておいた、別にそれだけの骨折をした甲斐もない食物を口の中へ戻して反芻したりしていた。館の人々の何人かと、宿駅の人々の何人かと、租税を取立てる役人の全部とは、多少の武装をして、何もない小さな街路の今一方の側に役にも立たない

ようなのにかたまつていた。既に、例の道路工夫は五十人の特別に親しい友達の群<sup>むれ</sup>の真中へ入り込んでいて、あの青い帽子で自分の胸を敲いていた。こういうすべてのことは何を前兆したのであろう？ また、ムシュー・ガベルが馬上の召使の背後にひらりと飛び乗ると、馬が（荷は二倍になつたにもかかわらず）、そのガベルを、ドイツの民謡のレオノーラ★を新たに演じたように、疾<sup>は</sup>駆<sup>やがけ</sup>で運び去つたのは、何を前兆したのであろう？

それは、彼方<sup>かなた</sup>の館で石造の顔が一つだけ多くなつたことを前兆したのであつた。

ゴルゴンが夜の間にその建物を再び検分して、不足していた一つの石造の顔を付け加えたのである。ゴルゴンが約二百年の間待

ちに待つていた石造の顔を。

その顔というのは侯爵閣下の枕の上に仰向に寝ていた。それは、突然ぎよつとさせられ、憤怒させられ、石に化せられた、精巧な仮面のようであつた。その顔にくつついている石の体の心臓には、一本の短刀が深く突き刺してあつた。その<sup>つか</sup>に一片の紙が巻きつけてあつて、その紙にはこう走り書きしてあつた。――  
「彼を速く彼の墓場へ運んでゆけ。これはジャーグより。」



## 註

## 〔緒言〕

　　ウイ爾キー・コリンズの劇の……　　ウイ爾キー・

　　コリンズは作者デイツケンズの友人の小説家ウイリヤム  
　　・ウイ爾キー・コリンズ（一八二四—一八八九）であり、  
　　デイツケンズはこのコリンズと共に作したこともある。デ  
　　イツケンズは小説家となる前に俳優になろうとしたこと  
　　があるくらいで、劇に対しては生涯強い熱情を抱いてい  
　　て、素人演劇をしばしば試みていたのであつた。コリン

ズのその劇の主人公のリチャード・ウォーダーの没的な性格が、ディツケンズにこの小説の主要な観念——それはこの作の終りの方に至つてわかる——を思い付かせ、遂にそれをこの作の主要な人物シドニー・カートンに再現したのである。

私は、これらの頁の中になされかつ……実感したのである。この強烈な言葉はディツケンズにあつては決して空しい嘘ではないであろう。ディツケンズの想像力は非常に強烈であつて、彼の作中の人物は彼にとつては常に実在の人物であり、あるいは彼自身の分身であつた。彼は筆を執りつつその作中的人物と共にあるいは笑いあるいは

は泣き、作中人物のことがあたかも実在の人物であるかのように妻や友人たちに語り、一篇の小説を書き了つてその中の人物と別れる時には心から彼等との別れを惜しみ、彼の作の「骨董店」の少女ネルの死や同じく「ドムビー父子」のポール・ドムビーの死などを書いた後には親しい友を失つた人のように歎き悲しんで眠ることが出来ずには曉までも街々をさまよい歩いたという。この「二都物語」中の諸人物も彼の心を完全に捉えたことは想像に難くない。

カーライル氏の驚歎すべき書物 トマス・カーライル

(一七九五—一八八一)の「フランス革命史(一八三七)

をさす。コリンズの劇によつて得た著想を表現するに当つて作者がフランス革命を材料としたことについては、カーライルのこの書に負うところがはなはだ大であつた。また、作者はフランス革命の資料についてはカーライルから数多の参考書を得てそれに拠つたという。

タヴィストック館 一八五一年から五九年までの間デイツケンズの住んでいたロンドンの家。

## 〔第一卷 鮎る〕

### 〔第一章 時代〕

イギリスの玉座には…… 当時のイギリスの国王はジョージ三世（一七三八—一八二〇）、王妃はシャーロ

ツト・ソファイア（一七四四—一八一七）であつた。シヤーロットは肥満していて不器量であつた。フランスの国王はルイ十六世（一七五四—一七九三）、王妃はマリー・アントワネット（一七五五—一七九三）であつた。

心靈的な啓示が…………迷信が盛んであつたことをさす。

サウスコット夫人 ジョアナ・サウスコット（一七五〇—一八一四）。もと女中であつたが、後に宗教狂となり、一宗派を創立し、押韻の予言を述べ、奇蹟を行う風をし、自分をヨハネ默示録第十二章に記されている婦であると称した。その信徒十万以上に達したと言われる。この一

七七五年には二十五歳であつた。

ウェストミンスター　今日はロンドン市の一区であるが、以前は別の町であつたのである。旧ロンドン市の西南にある。

### 雄鶏小路の幽霊　一七六二年、ロンドンのスマスフイー

ルドの雄鶏小路のある家に出たという当時有名だつた幽靈。こつこつと叩いたりその他の奇妙な音が聞え、ケント夫人という女の幽靈だと言い触らされて、ロンドン中の大騒ぎとなり、永い間多くの人々が瞞された。これはパースンズという男が十一歳の自分の娘に叩かせていたのだということが発見されて、パースンズは処罰された。

この一七七五年から十二年前のことである。

ただの音信が、つい先頃、アメリカにおける英國臣民の會議から……一七七五年の七月にアメリカにおけるイギリス植民地の住民から「代議士選出権なき課税」

に対してイギリス本国に抗議して来たことをさす。

この音信の方が……人類にとつてもつと重要なものである  
ということが……これがアメリカ独立戦争の導

火線となり、アメリカ合衆国の独立によつてデモクラシーの思想は新旧両世界を風靡し、遂にフランス革命が起  
るに至つたからである。

楯と三叉戟との姉妹国　　イギリスをさす。「楯と三叉戟」

は海神ネプテューンの標章であり、イギリスの紋章ではブリタニアをあらわす女人像が海の女王の象徴として楯と三叉戟とを持つてゐるのである。

紙幣を造つてはそれを使い果して……： 財政窮乏のために紙幣を濫発して、国勢が衰えつつあつたことをいう。

歴史上にも怖しい……枠細工 フランス革命当時に用いられた歴史上にも有名なかの断頭台をさす。枠細工の上の方に重い刃物が附いていて、それが差し伸べられている処刑者の首へ滑り落ち、その首が転がり込む囊が附いていたのである。

本市 ロンドン市の中核の最も繁華な商業区。昔の本来のロンドンの区域であつた処。

「首領」 当時の有名な追剥の名。

駅遞馬車 宿継馬車。宿駅と宿駅との間を往復する乗合馬車。鉄道の出来る前の主要な交通機関であつた。この頃の物語にはよく出て来る。

ターナム・グリーン ロンドンの西方の郊外にある地名。  
喇叭銃 口径の大きな、銃口が漏斗形をした、短い、往時行われた銃。

セント・ジヤイルジズ ロンドンの、本市の西、ウエストミンスターの北東の一地区。貧困と悪行との一中心地

として名高かつた。

ニューゲート ロンドンの古くから有名な監獄。旧ロンドン市の西の門のところにあつた。一二一八年に創建されて一九〇二年に取毀されるまであつたのだから、この作中の時代のみならず、この作者の時代にも存在していたのである。この監獄のことは後にも出て来るが、改善されずに、常によからぬ評判が立てられていた。

ウエストミンスター会館 昔のウエストミンスター宮殿の一部。ここで国事犯に対する審問が行われ、その入口のところで時事問題を論じたパンフレットが焼棄されたのである。

## 〔第二章 駅遞馬車〕

シユーターズ丘 ロンドンの南東八マイルのところにあるかなり高い丘。

ブラツクヒース シューターズ丘とロンドンとの途中にある広瀬な公有地。

手綱と鞭と馴者と車掌とが……軍律を読み聞かせた 馴

者と車掌とが手綱を曳き鞭で打つて馬に先へ歩ませたことである。「放置しておけば、動物の中には理性を賦与されているものもいるという議論に非常に都合のよくなる目論」とは、無論、前文にあるように、馬が自分勝手に路を戻りかけたことをさす。以下、この作にも、この

ようには諧謔作家としてのデイツケンズを示す文章や箇処が綿密な読者には处处に認められるであろう。

**宿駅** 駅遞馬車の繼替えの駅馬を繫留してある家。

**一クラウン** イギリスの五シリングの銀貨。

**半ガロン** 一ガロンは約二升五合の液量。

**テムプル閑門** 旧ロンドン市の西、ウエストミンスターとの境界にあつた有名な門。後の章でたびたび出る。この物語のテルソン銀行はその傍にあるのである。

もし甦るなんてことが流行つて来ようものなら…………

このジエリーの言葉の意味はずつと後になつて明かになる。

### 〔第三章 夜の影〕

忍返し　人の忍んで越え入るのを防ぐために、尖頭を外にして塀や垣や柵壁などの上に打ちつける釘状のもの。ジエリーの髪の毛を忍返しに喻えることは、これから後たびたび用いられる。

蛙飛び　前方に屈んでいる人の背に手をつけてその人の上を飛び越す遊戯。馬飛び。

犁　牛または馬に曳かせて耕す鋤。

### 〔第四章 準備〕

ロイアル・ジョージ旅館　当時はジョージ三世の治世であり、その名を屋号にした宿屋などが多かつた。

カレー ドーヴァーの対岸にあるフランスの港。

海の駝鳥のように………… 駼鳥は追い詰められると頭だけ砂の中へ隠して見えないつもりでいると言われているので、海から上つて頭だけを断崖の中へ突っ込んでい るようなドーヴァーの町を、戯れてその駝鳥に喻えたの であろう。

夜間にぶらぶら歩き つて………… 対岸のフランスか らの密輸入が盛んに行われていたことを暗示するのであ る。

クラレット ボルドー産の赤葡萄酒。

死海の果物 生のない果物の意味。彫刻した食べられな

い果物だからである。この前後の、黒奴のキュー・ピツドも、黒い籠も、黒い女性の神々も、もちろん、皆、鏡の縁の彫刻である。

少し外国訛りがあつたが……………その理由は少し後になつて判明する。

ボーヴエー パリーの北方約四十マイルのところにある都市。カレーからパリーへ行く途にある。

ムシュー フランス語の「……氏」、「……さん」、

「……君」に当る語。本篇では、もちろん、フランス人の名前に附けてある。また、フランス人が紳士に対する掛け語としてもこの語を用いる。

書入れしてない書式用紙に……。 当時、フランスの

王は御璽で封印した逮捕または拘禁の秘密令状を寵臣貴族たちに与えたのであつた。ゆえに、彼等はその令状に誰でも彼等の欲する者の名を書き入れて、その者を裁判なしにただちに投獄することが出来たのである。

九ペニスの九倍は………… ペニスもギニーもイギリスの貨幣で、十二ペニスが一シリングであり、一ギニーは二十一シリングに当る。

親衛歩兵の………… 柄目の中の イギリスの親衛歩兵第一聯隊の兵は大きなバケツ型の毛皮の帽子をかぶっている。それを「柄」に喻えて滑稽に言つたのであろう。

ステイルトン乾酪 もとイングランドのステイルトン村で造り始めた上等のチーズ。

嗅塩と……酢と 嗅塩は婦人などに用いる鼻で嗅がせる氣附薬、炭酸アムモニウムのこと。酢はやはり嗅剤で氣附薬にしたもの。

### 〔第五章 酒店〕

サン・タントワヌ パリーの東方の廓外、バステイユ牢獄とセーヌ河との間の一区域。下層階級の住んでいた地域であつた。

やがて、そういう葡萄酒もまた………… 革命の勃発を暗示するのである。「そういう葡萄酒」とは、もちろん、

前文の「血」をさす。フランス革命はこのサン・タントワヌにおける暴動から始つたのである。

サン・タントワヌの聖なる御顔…… サン・タント

ワヌはキリスト教教父の聖アントワヌ(サンクト)

セント  
聖アントニーの名をとつた地名であるので、ここではその語を街と聖者との両方にかけたのである。このサン・タントワヌの擬人法は、この物語では、この後にしばしば用いられている。

実際それらは海上に………… この「灯」はフランスの運命を、「船」は国を、「船員」は国民を、「嵐」は革命を象徴するのである。

痩せこけた案山子たち　　貧民をさす。「案山子」という語は「襤襖を著た人」をも意味するからである。

その点灯夫のやり方を改良して……革命の時に、街灯柱を絞首台代りにして、民衆の敵を滑車綱で吊り上げて絞殺したのである。

鳴声も羽毛も美しい鳥ども　　貴族をさす。

肩を竦める　　不快、当惑、平氣、冷淡などをあらわす身振り。

ドミノーズ　　二十八箇の牌子を使つて一人または数人でやる遊戯。

ジャーグ　　この名はフランス革命の運動を組織したと信

ぜられる秘密結社の合言葉であつた。

洗礼名　洗礼式の時に附けられる名。ここでは、もちろん、「ジャーグ」のこと。

マダーム・ドファルジユは……編物をして……………このマダーム・ドファルジユが常に編物をしている理由はよほど後（第二巻第十五章）になつて明かになる。

ノートル・ダム　パリーの有名な大寺院。サン・タントワヌの西方市の中央にあり、その大伽藍の上には二つの巨大な塔が聳え立つてゐる。

## 〔第六章 靴造り〕

何と有難いことでしょう！

彼の涙によつて彼の智能が

幾分か甦つたことがわかつたからである。

## 〔第二卷 黄金の糸〕

### 〔第一章 五年後〕

フリート街　　旧ロンドン市の西の境界であつたテムブル  
閑門から東へ通じている街。

悪しき交りがそれの善き光沢を…………　新約全書コリ  
ント前書第十五章第三十三節の「悪しき交りは善き行い  
を害うなり。」という句から言つたのであろう。

バーミサイドの部屋　　「千一夜物語」すなわち「アラビ  
ア夜話」の中に、バグダッドの富豪バーミサイド家の人に  
がある時シャカバツクという乞食を饗宴に招いたが、立

派な食器の中は皆空であつた、それをシャカバツクは実際に飲食するような身振りをして見せた、云々、という有名な話がある。その話から、このテルソン銀行の階上の大好きな食卓だけは置いてあるが食事のあつたことがないという部屋を、諧謔的に「バーミサイドの部屋」と呼んだのである。

アビシニアかアシヤンティーにふさわしい……曝されている首　アビシニアはエチオピアのこと。アシヤンティーは西部アフリカの黄金海岸の北にあつた王国で、一九〇一年にイギリス領となつたのだから、この作の書かれた当時はまだ独立国であつた。共に黒人の国で、首斬り

の蛮風がごく普通に行われていたのであろう。テムブル  
閑門には、往時、処刑者の首や肢体をその上に曝したの  
であつた。

青黴 チーズなどに生ずるものをいう。

ハウンヅデイツチ ロンドンの東部の一区域。

代理人を立てて……誓った時に 「洗礼式の時に」とい  
う意味を諧謔的に言つたのである。すなわち、このクラ  
ンチャードはジエリーという洗礼名であり、第一巻に出て  
来たあの使いの者なのである。

ホワイトライアーズ ロンドンのテムブルに近い一区  
域。フリート街からテムズ河までに拡がる。

クランチャード自身はわが主の紀元のこと……。

「わが主の年にて」すなわち「キリスト紀元」という意味のラテン語を英語読みにして「アナー・ドミナイ」という。それをわがクランチャード君はアナという名の女がドミニーズを発明した年という意味だと思つていたのである。

ハーリクインのように……：

ハーリクインは、黙<sup>パントマ</sup>

<sup>イム</sup>劇に出て来る道化役の一人で、常に派手な雜色の衣裳を著てるので、クランチャード君が補綴だらけの蒲団をかぶつているのを、ハーリクインに喩えたのである。

彼が銀行の時間がすんでからきれいな靴で……奇妙な事柄

これも、第一巻第二章の終りのジエリーの言葉や、この後のジエリーについての言葉などと共に、後（第二巻第十四章）になつてわかるのである。

テムブル 中世紀の聖堂騎士団の殿堂の遺趾のあるところ。フリート街の南にある一区劃。「テムブル」は「聖堂」の意味。テムブル関門はここにあつた。テムブルには、有名な内テムブル、中央テムブルの二法学会院があり法律関係の人々が多くいる。

## 〔第二章 観物〕

オールド・ベーリー 往時のロンドンの中央刑事裁判所、あるいは中央法廷のこと。旧ロンドン市の外壁のところ

にあつたので「オールド・ベリー」と言われる。「旧外壁」の意味である。フリート街の東北に当るニューゲート街のニューゲート監獄の近くにあつた。

四つ裂き　叛逆罪で処刑された人間の体は四つに切斷して、その各部分を諸所の都市に分配して曝し、他の犯罪者に対する見せしめとしたのであつた。

タイバーン　今のハイド公園の近くにあつたロンドンの往時の処刑場。一七八三年すなわちこの時より三年後までここで処刑が行われ、それから処刑はニューゲートの監獄に移されたのである。

二マイル半ばかりは…………

オールド・ベリーから

処刑場のタイバーンまでの道程は二マイル半ほどあつた。  
「他界への非業の旅」と言つても、その二マイル半だけ  
は天下の公道を通つて行くのである。

架刑台 往時罪人の頸と手とを板の間に挟んで立たせて  
街上に曝した刑具。その罪人を見物して笑い物にする見  
物人は、往々それに投石して負傷させたことがあつた。  
ゆえに、次の文章にあるように、その刑罰の程度を予知  
することが出来なかつたと言うのである。

笞刑柱 罪人を笞つ時にその人間を縛りつける柱。

殺人報償金 死に当る大罪人を告発したり、主人や恩人  
などを敵に売つて殺させたりした報酬として受ける金。

ベツドラム ロンドンの古くからの有名な瘋癲病院。

「ベツドラム」はベスリヘム（ベツレヘム）の転訛。もと修道院であつたが後に精神病院となつたロンドンのセント・マアリー・オヴ・ベスリヘムを略してベツドラムと言つたのである。以前はロンドン名所の一であつて、入場料を取つて見物人を入れていた。

社会の戸口だけは………… 社会が犯罪人を生んで盛んに法廷へ送り込んだことをさす。

網代櫈 昔、叛逆者、死刑囚などをそれに載せて縛りつけて刑場へ曳いて行つた網代の枠のようなもの。

フランス国王リュースが……なせる戦争 「リユース

ス」は「ルイ」を英語風に言つた名であつて、ここではルイ十六世をさす。一七七五年にアメリカ独立戦争が始り、一七八八年にルイ十六世はアメリカ合衆国を承認し、その支援に軍隊と艦隊とを送つて、イギリスと交戦状態に入つた。その状態は一七八三年まで続いていたのである。

大洋がいつかはその中に沈んでいる死者を……

新

約全書ヨハネ黙示録第二十章第十三節に「海その中の死人を出し：：彼等おののおのその行いに循いて審判さばきを受けたり。」とあることから言つたのである。

### 〔第三章 当外れ〕

君はかつて…………… 以下、被告の弁護士が相手方の証人のジョン・バーサツドに向つて質問をするのである。

すなわち対質訊問をするのである。

階段から蹴落されたこと 何か不正なことなどをして家から蹴出され放逐されることを意味する。

ブーローニュ カレーの西南にある、やはりドーヴァー

海峡に面したフランスの海港。

ジョージ・ウォシントンは歴史上ジョージ三世と……………

ジョージ三世は第一巻の註に記したように当時のイ

ギリス国王である。後に合衆国の大統領となつた

ジョージ・ウォシントン（一七三二—一七九九）は当時

アメリカ軍の総指揮官であつて、独立戦争開戦以来各地に転戦していた。

対質訊問　相手方のために召喚されて調べられる証人に對して反問すること。

呪うべきユダ　銀三十枚を得てキリストを売りユダヤの有司に渡して磔にさせたイスカリオテのユダ。

指の節を額に触れる　尊敬または認知のしである。

#### 〔第四章 祝い〕

バステイユ　往時パリーにあつた有名な牢獄。主として国事犯罪人を収容した。一七八九年フランス革命が起ると同時に民衆に破壊されたことは普く知られている。

サン・タントワヌ門の傍にある。マネット医師はこの牢獄に監禁されていたのである。

彼の顔はダーネーをひどく詮索的な眼付で…… マネット医師がチャールズ・ダーネーの顔に何を認めてこのような表情をしたのかは、この物語の終り近く（第三卷第十章）にならなければ判明しない。

放免された囚人の友人たち 当日の法廷の見物人を戯れて言つたのであろう。

**轎** 一人乗りで二人のかごかき 轎夫が棒で肩に担いで運ぶもの。

十七八世紀にヨーロッパの諸都市で流行した。

ポルト葡萄酒 ポルトガルのオポルト原産の有名な葡萄

酒。

ラツドゲート・ヒル オールド・ベーリーのあるニューゲート街の南に、聖ポール寺院から西に通じてある街路。<sup>セント</sup> フリート街に続く。そのフリート街の南にはテムブルがあり、その西端にはテムブル閑門があるのである。

一派イント わが三合余に当る。

蠅垂れが………… イギリスでは、蠅燭の蠅垂れの垂れ落ちる方向にいる人の身の上に凶事殊に死が来る、という迷信がある。

## 〔第五章 狄〕

ポンス 酒、砂糖、牛乳、レモン、及び香料などを混和

して製した飲料。

民事高等裁判所　または単に高等裁判所、あるいは最高民事法院、または単に高等法院とも訳される。原名では「王座裁判所」と言われ、イギリスの最高の裁判所であった。ゆえに、ストライヴィアはオールド・ベーリーも普通刑事裁判所も自分の出世の「梯子の下の方の段」として関係を断とうとしていたのである。

仮髪の花壇　　仮髪を著けている裁判官、弁護士たちの席を意味する。

ヒラリー期からミケルマス期までの間に　　イギリスではもと高等法院の開廷期が四期に分れていた。ヒラリー期

(一月十一日から同月三十一日まで)、イースター期（四月十五日から五月八日まで）、トウリニティー期（五月二十二日から六月十二日まで）、ミケルマス期（十一月二日から同月二十五日まで）である。ゆえに「ヒラリー期からミケルマス期までの間」とは、厳密に言えば一月十一日から十一月二十五日まで、すなわち高等法院の約一箇年間をさすのである。

**巡回裁判** 昔は裁判官が折々田舎を つて裁判した。その時は弁護士もその裁判官に附隨して巡回した。

**豺** 豺は獅子のために餌をあさりその報酬として食い残りの骨片を与えられるという昔からの言伝えがあるので、

「豺」という語は、他人のために下働きをする者、人の手先となつて働く者、という意味に使われる。

### ストライヴァーの事務室に…… 第二卷第一章の

「テムブル」の註に記したように、テムブルには法学会院がある。その法学会院内には弁護士の事務室がある。大抵數室より成る。

ジエフリーズ この物語の時代から百年ほど前の、残忍と放逸とをもつて有名であつた裁判官ジョージ・ジエフリーズ（一六四八—一六八九）をさす。

シユルーズベリー学校 イングランドの西部、ウェールズに近いシユルーズベリーの町にある小学校。一五五二

年に創立されたという古い歴史を持つてるので有名である。

### 〔第六章 何百の人々〕

ソホー広場 ロンドンのオックスフォード街の南にある広場。附近は外国人が多く居住していた。テムズ川から一マイルほど隔っている。当時はそのあたりまでが市内であつた。

クラークンウェル ロンドンの本市の北にある区域。住宅地である。当時は市外であつた。

オックスフォード街道 ロンドンの西部と本市とを繋ぐ大

街道。当時はこの街道から北はことごとく市外であつた。  
南向きの塀が………… 果樹を南向きの塀のところに植  
えておくと、暖かいために果実がよく熟するのである。

この巨人は表広間の壁から金色の片腕を………… この  
巨大な金色の片腕というのは、金細工師の看板なのであ  
る。それをこのように滑稽に説明したのである。

この時分までには……あの一種特別の表情 その家具類  
の配置などの「創案者」であるリューシーの額に現れる  
あの特殊な表情をさす。

自分の周囲のどこにも目につくその空想上の類似 家具  
とリューシーとの表情の類似。

プロス嬢 「嬢」の原語の「ミス」は、未婚婦人の名に冠する敬称であつて、このプロス女史は年齢がもうあまり若くはないのであるが、日本語には完全な訳語がないので、老嬢という意味で「嬢」と訳することにする。

応報の排列表 人の行為の善悪に対しての来世における応報についての順番表というような意味。

ゴール人の子孫 フランスのこと。ゴールは今のフランス及びその近隣の地域にわたつて古代にあつた国で、フランス人のことを戯れてゴール人とも言う。

シンダレラの教母 シンダレラは有名なお伽噺の女主人公で、彼女は繼母や姉妹たちに虐待されながら台所で働

いていたが、妖精であるその教母がシンダレラに魔法で美装させて王宮の舞踏会に行かせ、王子に恋されたシンダレラは魔法の消える夜半に宮殿から逃げ帰るが、自分の小さな上靴を落して来たことから遂に王子と結婚することになる。ここに「シンダレラの教母」と言つてあるのは、その教母が宮殿の舞踏会に行くシンダレラのために魔法で南瓜を馬車に、鼈鼠を馬に、檻櫻著物を美服に変えたからである。

青い部屋 フランスの中世紀の有名な物語にある青髪という男が、幾度も結婚してその妻を皆殺し、死体を青色の部屋に隠しておいて他の者に入るのを許さなかつたと

いうことから、誰をも入れなかつたプロス嬢の室を諧謔的にこう言つたのであろう。

ロンドン塔 ロンドンのほぼ中央のテムズ河北岸にある古くから有名な建築物。一〇七八年に建築され始め、後次第に増築されたのである。初めは城廓として築造され、王宮として用いられた時代もあつたが、永い間政治犯の牢獄として用いられていた。その後種々の観覽物の陳列所や武器庫となつた。

あなた方も御存じのように、私はあすこへ………… ダーネーは例の叛逆罪の廉で捕えられていた時にしばらくロンドン塔に監禁されたのであろうか。

DIG 英語の「掘れ」という語。

彼は片手を頭へやつて突然…… マネット医師がなぜこの時このような拳動をしたかは、この物語の終りの方（第三巻第九章）に至つて明かになる。

聖ポール寺院 ロンドン市の中間にある大寺院。ソホー広場の東方約一マイル半、クラーケンウェルの南にある。

### 〔第七章 都会における貴族〕

モンセーニュール フランスで貴族や高僧などに対して用いた敬称であり、「閣下」、「殿下」、「貌下」の意味に当るフランス語である。その語を作者はフランス貴族の擬人法として用いたのであって、ここでは、「モン

セニユール」は個人の名であると共に、また当時のフランスの貴族を象徴しているのである。後の章では、この語は本来の意味の通りに個人に対する敬称として用いられ、また、更に後の章では、フランス全貴族の代名詞としても用いられる。

チヨコレート　ここではチヨコレート飲料をさす。チヨコレートを砂糖湯または牛乳に溶かしたもの。

国を売った陽気なステュアート　イギリス国王チャールズ二世（一六三〇—一六八五）をさす。ステュアートは、彼の法外な放逸の費用を得るために、フランス国王ルイ十四世から巨額の金銭を得て、国会の意志に反して、ル

イ十四世のオランダに対する戦争においてフランスを援助するというドーヴィアーラー条約を、一六七〇年に密かに締結した。このチャールズ二世は「陽気な国王」と綽名されていた。

「モンセーニュール曰いけるは、地とこれに盈てる物はわがものなり。」　新約全書コリント前書第十章第二十六節に「地とこれに盈てる物は主のものなればなり。」とある。その「主のもの」という原文の代名詞を「わがもの」と変えたのである。

収税請負人　　フランスの王政時代に、一区域の租税を徴収する特権を政府から得て、その代償として政府に一定

の額を支払い、その契約の定額以上に人民から搾取したものはことごとく自己の懷に収めることが出来た収税吏。この収税請負人はこうして人民を誅求して、大革命の前には人民にはなはだしく怨まれていた。

面紗をかぶる 修道院の尼僧になることを意味する。

バベルの骨牌塔 「バベルの塔」は、旧約全書創世紀第一章に記されている、太古バビロンで天に昇るために建築しようとした高塔で、架空的の計画という意味に使われており、「骨牌塔」とは、骨牌札で築いたようなすぐに崩れる塔という意味であろう。

その社会の天使たち 上流社会の婦人たちをさす。その

中にはさすがの間諜でも一人の母性をも見つけ出すことが出来ないほど、上流社会の家庭は乱れていた、というのがこの前後の意味である。

**痠攣教徒** 十七世紀頃フランスに起つた一つの狂信的な宗派の信者。フランスにおけるヤンセン教徒の一派であつて、痠攣的発作に陥つたりその他の奇怪な動作によつて奇蹟的の治療を行うと称した。彼等はまたその痠攣的動作で未来を予言し社会を改善することが出来ると信じた。

**類癇** 全身硬直する病氣。

**テュイルリーの宮殿** 以前パリー市の中間にあつたフラ

ンス国王の宮殿。ルイ十四世時代からは華美を尽していた。

扁底靴 踵のごく低い、または踵のない、エナメル革の浅い靴。主として舞踏の時などに用いられるものである。

車輪刑 罪人の手足を車輪に縛つて死に致した残酷な処刑。

ムシユー・パリー パリ市の死刑執行吏をこう言つた。  
普通にはムシユー・ド・パリー。

監督派流儀に 未詳。この監督派というのはプロテスタント監督教会派をさすのであって、その唱道した監督制度主義とは教会の主権を法王のような一主権者に委ねな

いで教会の監督たちの手に委ねべきであるとしたものであつた。

一絞刑吏に根ざしたある制度 大革命時代の断頭台による処刑を意味する。

天帝を決して煩わさなかつた 願い事をしたりして天帝を煩わさなかつたこと。換言すれば、神を信仰しなかつたこと。この前後は、彼等はモンセーニユールに対してものみならず心までも平伏し尽していたので、神に対して平伏する余地が残らなかつた。それが彼等の不信仰であつた一つの理由であつたかもしがれぬ、という意味。

ガスパール 第一巻第五章に、サン・タントワヌで街上

にこぼれた葡萄酒で「血」という字を書いた、「ガスパール」と呼ばれた「脊の高い」剽輕者がいたことを、読者は記憶されるであろう。これはあの男であろう。

### 〔第八章　田舎における貴族〕

侯爵閣下の面上の赤味は彼の立派な躾の……　赤面したりするのは貴族たる者の立派な躾に反するからであろう。

**蛇髪復讐女神**　ギリシア神話の復讐を司る三女神。長い蛇の頭髪をしていたので、馭者の振う長い鞭をその女神の蛇の髪に喩えたのである。

**歯止沓**　車が坂を下る時車輪が滑らぬように輪底に取附

ける鉄片または木片。

幽靈のように脊が高く　この「脊が高い」という一語によつて、侯爵の旅行馬車の下にくつついて他の地方からやつて来た男が前章のパリーで子供を侯爵の馬車で轢き殺されたガスパールであることが、ここでは微かに暗示されているに止まる。

六人ばかりの特別に親しい友達　この「特別に親しい友達」という言葉は特殊の意味を持つていて、後になるほど数が増して来る。

永い間……一つの大きな悲惨の、この悲惨な表象　「大きな悲惨」とはその地方全体の貧窮をさすのであり、

「悲惨な表象」とはキリストの木像をさすのである。

一二リーグ 一リーグは三マイルである。

## 〔第九章 ゴルゴンの首〕

ゴルゴン ギリシア神話の醜怪な容貌をして頭髪は蛇であつたという女怪であつて、一目でも見る人をことごとく石に化せしめたといふ。

決して断絶することがないはずの王統 フランスのブルボン王統をさす。ブルボン王統は永久にフランスの王座を保つであろうと予言されていた。

消化器のような恰好 円筒形で、先が円錐形をなして尖っている形。

彼はイギリスでチャールズ・ダーネーとして……。

前に侯爵がこの甥を「ムシュー・シャルル」と言つたが、フランスでシャルルという名は同じ綴字で英語ではチャールズと発音するのである。

拘禁令状 第一巻第四章の註に記した如く、フランスの国王の私印で封印した密書であつて、それを国王から貰つた人は、それに誰でも任意の者の名を記入して、その者を裁判なしにただちに投獄することが出来た。

その屋根の鉛が…… 大革命時代からナポレオン戦争時代にかけて、建物の屋根瓦の鉛が溶かされて銃弾にされたのである。

イギリスはたくさんの人間の避難所になつてゐる ヨー  
ロッパ諸国の亡命者などは多くイギリスへ亡命したので  
ある。

ドイツの民謡のレオノーラ ある乙女が十字軍遠征に行  
つて死んだ恋人を歎き悲しんでいると、夜呼び起され勧  
められて、馬上の自分の恋人に見える姿の背後に乗つて  
駆け去つたが、それはほんとうは恋人の骸骨の幽霊であ  
つたという。十八世紀の末頃にはこの詩はイギリスでも  
よく知られていた。



# 解說

## 第一卷 輋る

〔六章から成る。この物語全体に対する短い序曲。出来事は一七七五年の秋から冬へかけてのわずか数日間のこと。場面はイギリスのドーヴィアーブルーフからフランスのパリへ。「軋る」という暗号文句を標題とし、フランスの一医師が十八年間の獄中の監禁から再び自由の世界へ軋るまでの顛末が語られるに過ぎぬ。この物語における最も主要な人物でさえこの巻ではまだ全然現れていない。〕

第一章 時代　この章では、作者デイツケンズは、一七七五年すなわちアメリカ独立戦争開始の年でありフランス大革命勃発の十数年前に当る頃におけるイギリス及びフランス両国の政治的及び社会的状態を、陰翳の多い筆で一抹的に描いて、この物語の発端の背景としている。純然たる序言的な章である。

---

第二章 駅遞馬車　物語はロンドンからドーヴィーへ通ずる街道から始る。一七七五年十一月末の夜。丘を登るドーヴィー行の駅遞馬車、その傍を歩く一乗客、泥濘の道、馬車を曳く馬、谷々をたちこめるイギリス名物の霧、厚く身をくるんだ乗客た

ち、馭者と車掌、等、等、——この物語の初めの方は長編の発端らしく悠々としてその道を辿り、遅々として進捗しない。先へ進むに従つて速度が速くなる。そのドーザー行の駆逐馬車を早馬で追いかけて来た使者のジエリード、ロンドンのテルソン銀行のジャーヴィス・ロリーという乗客に「ドーザーにてお嬢さんを待て。」という簡短な手紙を渡し、「甦る」という奇妙な返事を受けて引返す。この章の筋はそれだけに過ぎないが、読者をも霧の中にいるような雰囲気の中に残す。

第三章 夜の影 この章では、馬車と別れてロンドンの銀行へ帰つてゆくジエリード、馬車に乗つてドーザーへ向うロリー

とが書かれているだけで、物語の筋は一向進展しない。ただ、読者にますます疑問と期待との感を抱かせる。「夜の影」とは原語では「夜の闇」の意味であり、それが彼等にとつてその夜それぞれの形をなして現れる。ジエリーグローテスクは生粹のデイツケンズ的的人物の一人である。ここでその容貌が作者一流の幾分誇張的で怪奇的な戯画的手法でスケッチされる。デイツケンズは常に作中人物の容貌風采はもとより音声に至るまでもはつきりと想像したので、各主要人物のそれらを必ず書いている。甦るという言葉に悩まされるこのジエリーは秘密の商売を持つているのだが、その商売が何であるか、またその商売がこの物語にいかなる関係を持つことになるかは、ずっと後の第二巻第十四章

と第三巻第八章とに至つてようやく判明するのである。口リーの馬車の中での夢と現実との交錯は、はなはだ小説的に巧みに書かれている。心に重くかかる何かの用件を持つて一晩夜汽車に乗つたことのある読者は、この口リー氏と幾らか似たような経験を持つであろう。彼の夢に浮ぶのは、彼の勤務先の銀行と共に、年齢四十五歳の男の物凄く瘠せ衰えた顔。その男との想像上の対話。それから空想の裡でその男を頻りに掘り出し、その男がようやく出て来ると、たちまち倒れて塵になる。そういう陰惨な夢と、その夢から覚めて見る窗外の紅葉黄葉の疎林と美しく昇る朝暉とは、対照の妙を得て効果的である。

## 第四章 準備

その日の午前に駅逓馬車の著いたドーヴナーの旅館。それまでぼつてりと身に纏っていたものを脱いで正装して食堂へ入るロリー氏。六十歳の独身の紳士、テルソン銀行員。この物語において最初に登場し、最後まで副人物的な役割を勤めるこの一主要人物は、この旅館の食堂で肖像画を描かせるために著席しているかのように静かに腰掛けている間に、作者によつてその肖像画をペンで描かれる。それから、ドーヴナーのスケッチ、その他。その夜、彼の後を追うて来たマネット嬢。<sup>ヘロイ</sup>大きな薄暗い一室で、読者はまた十七歳ばかりの本編の女主人<sup>ン</sup>に紹介される。ここで、パリーでこれから処理さるべき事務の準備として、約二十年前の事がロリーの口を通じて一部分語

られるのである。前章以来の読者の疑問の霧は幾分かは霽れる。この章の終りのところで初めて登場するマネット嬢の附添いの婦人。プロス（ここでは名は記されていないが）。彼女はデイツケンズ的喜劇風の身振りで現れて来て読者を微笑させる。駅逓馬車から犬のような様子で出て来るロリー氏の描写や、食堂での彼と給仕人との会話や、その他の細部の巧みさなどは、一々指摘しない。

---

## 第五章 酒店

場面はパリーの貧民窟サン・タントワヌに移る。  
前章から数日後の冬の日。街上に葡萄酒の樽が壊れて、流れる赤葡萄酒を飮えた人々が争つて飲む光景。この街の葡萄酒は、

後にこの区域から始つた大革命の流血を前兆するのである。ここに描かれたサン・タントワヌ街の窮乏と汚穢との画面はその臭いまでも読者に感じさせ、極めて傑れている。莊重で峻厳なカーライルの文体を思わせるところがある。この街の酒店の主人ドフルジユとその妻とがここでその風貌を描写される。共に年齢三十歳前後。この二人がいかなる人物であるかは第二巻第三巻に至つて次第に明かにされる。しかし、この物語の「姿なき主人公」とも言い得る「革命」は、この章において微かにその前奏曲が奏されている。飢餓、貧窮、欠乏、狩り立てられ、追い詰められかけている人民の野獸的な顔付、ジャーキークという同一の名を持つ者の秘密結社。マダーム・ドフルジユは既に

その編物を始めている。このサン・タントワヌの酒店にマネット嬢とロリー氏とが現れる。そして、彼女の父マネット医師の昔の召使人であつたムシュー・ドファルジユの案内で、酒店の附近のある建物の六階の屋根裏部屋へとムシュー・マネットに会いに上つて行く。なお、ドファルジユがいかなる人々からマネットを引取つたかは、はつきりとは書いてない。ドファルジユがジャーグという同じ名の連中にマネットを覗かせるのは、貴族の圧制と暴虐との一標本を見せるためなのである。

第六章 靴造り サン・タントワヌ区のある屋根裏部屋。まだやはりバステイユの牢獄の中にはつもりで頻りに靴を造つ

て いる 変り果てた 白髪の マネット。名を問われると「北塔百五番」とのみ繰返す永年の囚人。その永年の監禁のために暗雲に鎖された智力。父と娘との初めての対面。娘の髪の毛や声によつて微かに甦つた遠い昔の記憶。娘の永い言葉によつてようやくごく微かに甦つた智能。夜になつてから、訪問者たちはこの甦る人ムシュー・マネットを馬車に乗せてイギリスに向つてただちにパリーを立つ。パリー市の城門でドファルジュだけが下りて別れる。街灯の下から大空の永遠の灯——星——の下へと走る馬車。第三章の駅逓馬車の中で幾度も繰返されたあの空想の対話が再びロリーの耳に戻つて来て、巻を閉じる。

## 第二卷 黄金の糸

「二十四章から成る。序曲に次ぐ展開部である。最も長くかつ変化に富む。年月は一七八〇年三月から一七九二年八月に至るまでの十二箇年余、場面はロンドンとパリーとフランスの田舎とにわたる。この作中の諸人物はほとんどすべて登場し、<sup>ヘロイシ</sup>主人公が彼女の黄金の糸を巻いてゆき、第三巻で起る波瀾はこの巻において完全に準備される。」

# 第一章 五年後 ロンドン。前章から五年後すなわち一七八〇年。

初めに、ロンドンのテムブル<sup>バ</sup>関門の傍にある古風なテルソン銀行が描かれる。極めてイギリス風な銀行であることが巧みに語られている。それに附隨して、テムブル<sup>バ</sup>関門の上に曝されている処刑者の首のことから、当時死刑ということが少しも珍しくなかつたことが書かれているのは、続章に出て来る叛逆罪の裁判に対する一種の予備知識を読者に与えるためであろう。

それに続いて、この銀行の戸外に息子と共にあたかも「銀行の生きた看板」であるかのような役を勤めているジエリー・クランチャーリー君が再び登場する。その年の三月のある朝。まず彼の私宅の場から始る。クランチャーリー君は、息子の小ジエリー君や、

前に出た女丈夫。プロス女史や、後に出で来る弁護士ストライヴ  
アーリー先生と共に、この物語における喜劇的的人物である。自ら  
「実直な商売人」と称する彼が、温順にして敬虔な細君の祈祷  
に頻りに文句をつけるのは、何か多少良心に疚しい所業をして  
いるからであろう。彼のいわゆる「蹲る」ことに対するさんざ  
ん毒づいた後に、彼は小ジエリーを連れて銀行へ御出勤になり、  
大小二匹の猿のように銀行の前に陣取る。当時十二歳の小猿は  
父親の指にいつも鉄の鎌がついているのを不思議がる。

第二章 観物 銀行（の戸外）へ出勤したジエリーはまもなく  
裁判所行の御用を仰せつかり、ロリー氏が行つてゐるオールド

・ベーリーへ入つてゆく。このジエリーやの描写や会話によつて読者は諧謔作家としてのデイツケンズに幾分接することが出来る。このオールド・ベーリーにおける叛逆事件の公判の場面で、この物語における二人の主要な人物——互いに容貌が酷似しているシドニー・カートンとチャールズ・ダーネー——が初めて登場する。もつとも、この章では、カートンの方は、まだ名も記されず、ただ「両手をポケットに突つ込んで」、「法廷の天井ばかり眺めている」、「仮髪を著けた今一人の紳士」として簡単に漠然と紹介されているだけであり、彼はこれから後の章に至つて次第次第にその姿を大きく現して、最後のこの小説中の最大の人物となるのである。また、ダーネーの方は、フラン

スの間諜の嫌疑をかけられたこの叛逆事件の被告、恐しい死刑の判決を受くべきこの法廷の観物として現れ、その真の身分などはこの巻の第九章になつて明かになるのである。被告席に立つた冷静な態度の質素な彼の姿。二十五歳ばかりの青年紳士。その他に、いざれも名は次の章まで記されていないが、被告の弁護士ストライヴァー。証人として現れるマネット医師とマネット嬢。前の巻から五年たつているのだから、五十歳の紳士と二十二歳の令嬢である。

第三章 当外れ いよいよ被告チャールズ・ダーネーの叛逆罪の公判が始る。検事長閣下の滔々たる論告。検事側の証人ジョ

ン・バーサツド及びロジャード・クライに対する被告の弁護士ストライヴィアード氏の対質訊問。それに対するすこぶる怪しげな答弁。次に、ロリー氏と、マネット嬢と、マネット医師との証言によつて、五年前に彼等が一緒にフランスからイギリスへ渡つた時のこと、マネット嬢とダーネー氏とが初めて逢つた時のこと、マネット医師がロンドンに居住したこと、その他が簡短に述べられる。それから、更に公判が進み、ストライヴィアードが同僚弁護士であるカートンの注意によつてカートンとダーネーとの容貌の酷似を利用して相手側の一証人の証言を粉碎する。次に、彼の被告に対する弁護。このバーサツドやクライというのは、実は、政府に傭われている間諜であつて、フランス生れの

被告に近づいて無理に交際を結び証拠を捏造してフランスの間諜として告発し、当時のフランスに対する国民的反感を利用して政府への人気を博そうとしたのであり、そういう類のことを職業にしている人間なのである。それがダーネーとカートンとの容貌の類似という思付きから失敗させられ、終日公判が続いた後に陪審官は遂に無罪放免の評決をする。死刑囚を見るつもりで集つて青蠅のように騒いでいた観衆は、その当が外れて青蠅のように戦場所から去つてゆく。この章で、カートンとマネット嬢とダーネーとの三人の最初の交渉が微妙に始つてゐる。

## 第四章 祝い

その夜。法廷の廊下で、釈放されたばかりのダ

一ネーを取囲んで祝いを述べるマネット、その娘リューシー、ロリー、ストライヴァー。大声の太つたストライヴァー氏が改めて紹介される。遠慮、思遣り、上品、敏感など――要するに一語で正確な訳語がないが「デリカシー」というひけめは一切持ち合せていない、三十歳を少し越している男。また、マネット医師のことはここでもこの後でもたびたび書かれるが、第三巻第十章の彼の手記に至るまでは彼の過去の経歴がはつきりわからぬ。確かに、彼の上にはバステイユ牢獄の濃い影が落ちているような印象を与える。この法廷の廊下で彼はダーネーの顔に何かを認める。ただ一人壁蔭の暗いところに凭れていたカートンは、皆の後から裁判所を出て、マネットとリューシー

とが貸馬車で去るのを黙々と見送った後、ぶらりと鋪道へ現れ、善良な銀行員の口リーをひやかしてから、ダーネーを誘つて二人で近くの飲食店へ行く。その二人の人物の対話の場面の大写し。ダーネーが去つてからのカートンの鏡に映る姿に向つての独白。それから醉つて卓子に突つ伏して眠つてしまふ彼の上に滴り落ちる不吉な運命を暗示するような蝋燭の蝋垂れ。

第五章 豺　ストライヴァーに対して豺の役目を勤めているシドニー・カートン。彼は飲食店をその夜晚く出て、テムブルのストライヴァーの事務室へ入つてゆく。作者は少年時代に二年ばかり法律事務所の見習書記をしていたことがあり、こういう

法律家などを書くことも巧みである。カートンは、ストライヴァーとシュルーズベリー学校以来の同窓生であるから、年齢もやはり同じくだいたい三十歳くらいであろう。前章からこの章へと彼の性格は次第に描かれて来る。ストライヴァーは（第二巻の終りの方である一つの小さな役割を演ずる他は）このカートンの対照に書かれているのである。徹夜して酒を飲みつつ仕事をしてから、カートンはマネット嬢のことを思つて憂鬱になりながら、どんよりした陰気な夜明の戸外へ出る。周囲の沙漠。一瞬の蜃気楼。浪費されている才能を抱いて埋もれている男。印象的な場面。

## 第六章 何百の人々

前章から四箇月後すなわち一七八〇年七月頃。

同じくロンドン。ソホー広場附近のマネット医師一家の閑静な住居が見事に描き出される。ある日曜日の午後。そこへロリー氏が訪ねる。ドーヴィアの旅館で初対面をした例のプロス嬢との対話。それによつてマネット医師のことがまた語られる。なお、プロス嬢の話にちよつと出るように、彼女にはソロモン・プロスという弟があることは、この物語の後の方の章のために記憶されなければならない。嫉妬深いプロス嬢がお嬢さんに会いに来る何百の人といふのは、ダーネーとカーテンとであつた。マネットに何か衝撃ショックを与えたらしいダーネーのロンドン塔の囚人の話。リューシーとダーネーとの間に交される二

三の簡短な、しかし愛人同志らしい対話。その家で聞える足音の反響をいつか自分たちの生活の中へ入り込んで来る足音の反響だというリューシーの空想。それに対するカートンの言葉。夜になつて襲来する雷鳴と電光と豪雨。暗示的で感銘的な場面。雨が霽れて帰る途で迎えに来たジエリーはまた口リーの言葉にぎよつとする。この章の結末の数行は、漠然たる、しかし効果的な暗示の文句である。

## 第七章 都会における貴族

これから三章は場面がフランスへ移り、人物はしばらく一変するが、やがて前に出た人物も登場して加わる。前章と同じく一七八〇年の夏。フランス革命の起

る九年前である。この章の前半のモンセーニュールは当時のフランスの貴族の象徴的人物であり、ここに、フランスの王政封建時代末期の支配階級の戯画が、モンセーニュールのパリーの邸宅における接見会リセプションの場面によつて、描き上げられる。この戯画もまた実に傑れており、第一巻第五章のあのサン・タントワヌ区の画面と対照されて効果的である。この章の後半からは、そのモンセーニュールの接見会リセプションに出席したある侯爵が主な人物となる。例によつてその人物の肖像画。彼はそこを去り馬車を駆つて街々を薦進し、平民どもを蜘蛛の子のように散らし、その拳句ガスパールという男の子供を轢き殺す。その場へある酒店の主人ドファルジユが現れる。一人の人間を殺して、金貨

を一枚投げ与え、何かの品物を壊してその賠償をすませたかの  
ようにもまた馬車を駆つて去る侯爵。その侯爵をただ一人きつと  
見つめるマダーム・ドファルジユ。それから、馬車で流れ去る  
仮装舞踏会のように著飾った上流人士。自分たちの穴から出て  
それを眺め続ける鼠のような貧民たち。昼は夜となり、仮装舞  
踏会は晚餐の明るい灯火に輝き、鼠は暗い穴の中にくつつき合  
つて眠り、万物はそれぞれの道を流れる。

第八章 田舎における貴族 窮乏し疲弊したフランスのある田  
舎。前章の翌々日の日没頃から夜へかけて。侯爵は彼の領地へ  
旅行馬車で帰つて行く。穀物の乏しい田園。すべてが貧乏くさ

い村。貧苦に窶れた村民。その村の宿駅の前でしばらく停つた侯爵は、青い帽子を持つた一人の道路工夫を訊問して、脊の高い男が一人自分の旅行馬車の下にぶら下つて来たことを知る。宿駅長のガベルが現れる。彼は徵税吏をも兼ねている。ガベルに命令を与えてから、侯爵はまた出発する。途で会う一人の寡婦の歎願を押し除けて、日がとつぶり暮れてから彼の館に到着する。彼は著くとすぐに、イギリスから来るはずのムシュー・シャルルが著いているかと尋ねる。

## 第九章 ゴルゴンの首 侯爵の館。その夜から翌朝へかけて。

一目であらゆるもの石に化せしめるというゴルゴンの首が検

分したかのようだ、何から何までが石で出来た堂々たる建物。月もなく風もない真暗なひつそりとした晩。やがて塔の中の豪奢な一室で侯爵が食卓に向つていると、侯爵の甥のシャルルが到着するが、このシャルルとは意外にも数箇月前イギリスでの叛逆事件の被告であつたチャールズ・ダーネーである。挙止だけは優雅で心の冷酷な、抑圧を唯一の永続する哲学と信じている、骨の髄からの封建貴族の叔父。貴族の暴虐圧制と誅求搾取とを嫌つて、財産継承の権利を抛棄し、国を去り、家名を棄てて、イギリスで働いて生活しようと/or>、新しい思想を奉ずる甥。この二人（殊に前者）はその会話やわずかな動作などによつて驚くべく巧妙に書かれている。甥を別室へ送り出して自分

の寝室で寝ようとする侯爵。その日の昼の旅行や前々日のパリーでのことの追想。それから深い夜の闇の三時間。この夜から朝へかけての叙述もまた最も傑れている部分の一つである。夏の夜は早く次第に明けかかり、遂に館でも夜がすっかり明け放れると、館の大鐘が鳴り響き、人々があわただしく駆けり、ただならぬ模様。侯爵もまた寝室で石になつたのである。彼を突き刺した短刀に附いている紙片の文句によれば、ドファルジユの仲間であるジャーグの一人に暗殺されたのであつて、暗殺者が前日に侯爵の馬車の下にぶら下つて来た脊の高い男であり、パリーで侯爵に子供を轢き殺されたガスパールであることは暗示されている。この物語の主要な人物は既に全部出揃い、読者

はそれらの人物について一通りは知つたのである。

第二巻未完。



# 青空文庫情報

底本：「一都物語 上巻」岩波文庫、岩波書店

1936（昭和11）年10月30日第1刷発行

1967（昭和42）年4月20日第26刷発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「彼奴→あいつ 恰も→あたかも 或る→ある 如何→いか・い  
かが 聊か→いささか 何時→いつ 一層→いつそう 今更→今  
さら 謂わば→いわば 所謂→いわゆる 於て→おいて 大凡→

おおよそ 於ける→おける 恐らく→おそらく 己→おれ 却つ  
 て→かえつて 彼処→かしこ か知ら→かしら 難い→がたい  
 且つ→かつ 嘗て→かつて かも知れ→かもしけ 位→くらい  
 極く→ごく 此処→ここ 每→ごと 悉く→ことごとく 此→こ  
 の 而→しかし 然る→しかる 屢々→しばしば 暫く→しばら  
 く 直ぐ→すぐ 頗る→すこぶる 即ち→すなわち 是非→ぜひ  
 其奴→そいつ・そやつ 大層→たいそう 大体→だいたい 大  
 分→だいぶ・だいぶん 唯→ただ 但し→ただし 直ち→ただち  
 忽ち→たちまち 度→たび 度々→たびたび 多分→たぶん  
 給え→たまえ 給う→たもう (て) 頂→いただ (て・で) 貰  
 →もら・もれ 何処→どこ・どつ 乃至→ないし 尚・猶→なお

尚更→なおさら 何故→なぜ に拘らず→にかかわらず 答→  
はず 甚だ→はなはだ 甚し→はなはだし 程→ほど 殆ど→ほ  
とんど 正しく→まさしく 将に→まさに 先ず→まず 益々→  
ますます 亦→また 間もなく→まもなく 勿論→もちろん 以  
て→もつて 尤も→もつとも 易→やす 己むを得ず→やむをえ  
ず 故→ゆえ 漸く→ようやく 僕→わし 僅か→わずか」

※読みにくい漢字には適宜、底本にはないルビを付しました。

入力：京都大学電子テクスト研究会入力班（畠中智江）

校正：京都大学電子テクスト研究会校正班（大久保ゆう）

2005年6月16日作成

2015年4月16日修正

### 青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 二都物語

## 上巻

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

著者 チャールズ・ディッケンズ

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>